

3.11を想う

— 東日本大震災と若者たち —



千葉大学ボランティア活動支援センター

3.11 を想う

— 東日本大震災と若者たち —

千葉大学ボランティア活動支援センター

挨 搽

ご挨拶



千葉大学

学長 齋藤 康

忘れえぬ震災と若者の思い

それは一瞬にして何もかも変わってしまうかと思うような出来事でした。それが起こってから、皆さんも私も自分にとって何が起きているか、そして回りにはどんなことが起きているのか、そして広くどこまで、何が起きているか、それぞれができる限りの手段でそれを確かめました。その時には自分が助かり、そしてみんなが助からねばならないという思いがあったことを自覚したことでしょう。そして、それをいざ実行しようとする時にはもちろん、それは仕事として、役割として、一生懸命に行動される姿でありました。それが社会を、国家を作る秩序でもあるのだと思います。しかし一人一人の活動は、その人の役割やその人の仕事ということを超えて、人間として、やむにやまれぬ思いからの行動であったに相違ありません。人間だからこそ発揮している不思議な力と、人間の素晴らしさを知らされる思いでした。ある人にとっては、仕事や役割ということが行動の動機にはあったかもしれませんが。しかし行動をしていく中で、人間本来の本能にも似た行動なのか、それまで生きてきた中で学んだ行動なのか、ただ人のために動いているという素晴らしい行為を見て、その行動の一挙手一投足を忘れることのできない光景として心に残りました。

若者たちは自らの仕事や役割という規制の中からではなく、助けねばならない、助けたいという純粋な気持ちから、いろいろな行動に挑戦して、少しでも役立ちたい、助けたいという気持ちでいるのを痛いほど感じていました。たくさんさんの支援が行われました。その活動から多くの学びもまたあったことでしょう。ある時は忘れえぬ感動にも出会ったことでしょう。どんなにか悲しい思いもしたときもあったことでしょう。一つ一つを大切に、これからも長く続くであろう震災からの復興のために、残された我々の役割として、助けたい、力になりたいという思いを大切にこれからも力を合わせて進んでいきたいと思う。

3. 11 の記憶を伝え、 思いを共有するために

千葉大学では、2011年3月11日の東日本大震災以降、被災学生に対する支援活動を行ってきた。また、昨年3月には、「千葉大学ボランティア活動支援センター」(センター長 山内正平教授)を設置し、被災地域におけるボランティア活動を行う学生たちを支援してきた。本冊子は、そのセンターのほぼ1年にわたる活動報告を中心にしながら、千葉大学でのさまざまな支援活動を記録するとともに、被災学生やボランティア活動に参加した学生、院生、留学生そして教職員からお寄せいただいた文章を掲載したものである。

読み進めると、被災学生が綴った事実のもつ重みに圧倒され、あるいは、ボランティア活動に参加するまでの学生たちの思いと実体験に触れ、ポスト 3.11 をどう生きていくのか、という若者たちの姿が浮かびあがってくるようであった。ある院生は、「何をしていたのかもわからずもどかしい日々を過ごしていた」自分が動き始めたときのことを、「時期がきたら、必ず人の役にたつことができる」という言葉と共にふりかえっている。確かに人によってその「時期」は異なるかも知れないが、この冊子を通して、3.11の記憶とたくさんの思いが共有され、未来への契機が醸成されていくことを願っている。

さて、あれから1年余。復興庁のまとめによると2012年2月23日時点で避難者は343935人を数え、原発事故のあった福島県では県外避難者が62674人に達している。ふるさとから切り離され、家族が共に生活できない深刻な状況が続いている…。いま、大学は何をなすべきなのか。目の前の課題はあまりにも大きい。千葉大学としてできることをすすめていきたいと思う。最後に、この手作りの冊子をまとめる作業をすすめてくれた学生スタッフに感謝の意を表すと共に、今回の震災でかけがえのない命をなくされた千葉大学のお二人の新生生に対し、心からのご冥福をお祈りしたい。

ご挨拶



千葉大学

理事
(教育担当) 長澤成次

目 次

東日本大震災の概要	1
ボランティア活動支援センターの歩み	7
センターの概要	
活動の記録	
センター主催の支援活動	
被災学生の思い	41
ボランティア活動を通じて	61
活動資料	125
あとがき	139

東日本大震災の概要

3月11日

未曾有の被害をもたらした東日本大震災



図1：H23 8/5 撮影 津波によって倒壊した家屋

1. 全国的な被害状況

2011年（H23年）3月11日14時46分、三陸沖（牡鹿半島の東南東、約130km付近）深さ24km地点を震源とする、M9.0、最大震度7の大地震が起こった。この地震は日本における観測史上最大の規模であり、未曾有の被害を私たちにもたらした（図1、表1）。その発生後しばらくの間は各地でライフラインが寸断され、水や食料、ガソリンなどが買い占められ、特に東北、関東地方の住民の生活は混乱に陥った。

その地震発生に伴って、高さ約9.7m以上の津波が太平洋に面する東北地方や関東地方に襲いかかり、多くの家屋が流され尊い命が失われた。さらに福島県においては東京電力福島第1原子力発電所が津波による被害を受け、放射性物質の大量漏洩を引き起こしてしまい、その周囲の住民は長期避難生活を余儀なくされている。

この地震によって特に岩手県、宮城県、福島県の被害は甚大であった。この3県だけで死亡者数は、左から4,670人、9,512人、1,605人にも及び、6月2日時点で避難生活を強いられた住民は75,215人であった。この三県を中心として、政府やボランティア団体などは復興支援活動を展開しているが、震災からおよそ11か月たったにもかかわらず、2月9日時点で仮設住宅生活を約27万人もの人々が送っている厳しい現状が続いている。

表1：東日本大震災による被害状況（H24 2/24 現在）

	人的被害			建物被害
	死者(人)	行方不明者(人)	負傷者(人)	全壊(戸)
北海道	1	0	3	0
東北	15,792	3,279	4,615	124,581
関東	56	3	1,403	4,165



図 2：活動するボランティア



図 3：現地で活動する自衛隊

今回の東日本大震災は、地震や津波対策の研究などに大きな影響を与えたが、その中でも特に波紋を広げた問題は原子力発電所である。東北や関東地方に限らず、日本全体で夏の電力不足が叫ばれたが、もう一方では原発停止を求める声が各地で上がり、今後の国が抱えるエネルギー問題を新たに浮き彫りにした。

加えて、この深刻な状況下において、自衛隊はもちろん、NPO団体や有志のボランティア（図 2）が目まぐるしい活躍を見せた。しかしながら、12月26日をもって自衛隊（図 3）は現地から撤退し、ボランティア者数も5月のゴールデン・ウィークをピークに急激に人数が減少している。この数値からわかる通り、日本国民の震災に対する意識が徐々に風化している。そんな状況下で、現地の復興は未だに目処が立っていない。

2. 千葉県の被害状況

東北地域の被害が甚大であったためメディアではあまり大きく取り上げられなかったが、我が大学が位置する千葉県も震災の影響を強く受けており、死者、行方不明者および負傷者を合わせた人的被害は251人にも達し、800棟近い家屋が半壊、1万棟ほどの家屋が半壊するという事態に至った（図 4、表 2）。特に旭市では津波の被害を強く受け、浦安市では液状化現象が発生した（図 5、6）。これら以外にも様々な地域で震災の爪痕が強く残された（図 7）。これらの被害に対して県内外問わず非常に多くのボランティアが被災地を訪れ、復興支援活動を行った。

表 2：千葉県の被害状況（H24 3/1 現在）

人的被害		建物被害			
死者	20人	全壊	798棟	床上浸水	154棟
行方不明者	2人	半壊	9,923棟	床下浸水	722棟
負傷者	251人	一部破損	46,828棟	建物火災	15件



地震による被害にあった市町
 地震や津波による被害にあった市町

図 4：千葉県各地の主な被害分布



図 5：液状化現象(浦安市)



図 6：倒壊家屋と押し寄せた瓦礫(旭市)



図 7：美浜区稲毛海岸 (千葉市)

【参考・引用元】

復興庁	被害者支援関連情報
国土交通省	東日本大震災 第 106 報 H24 2月16日 10:00
気象庁	平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震 ～The 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake～
警察庁	平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置
文部科学省	東日本大震災による被害情報について 報道発表 第 108 報 H24 2月16日 10:00
防衛省	写真一覧 東日本大震災への対応：自衛隊の活動（2）
全社協	被災地支援・災害ボランティア情報
千葉県	東日本大震災関連情報

東日本大震災発生直後の主な動き

月	日	時間	経緯	
3月	11日	14:46	三陸沖でマグニチュード(M)9.0の巨大地震発生	
			各県、各市町村に災害対策本部設置	
		14:46	運転中の東京電力福島第一原子力発電所の1～3号機が地震により自動停止	
		14:49	気象庁が北海道から青森県、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県、千葉県の太平洋沿岸等に大津波警報	
		14:50	官邸対策室設置、緊急参集チーム召集	
		15:18	岩手県大船渡で最大8.0m以上の津波観測	
		15:26	同じく岩手県宮古で8.5m以上の津波の観測	
		15:27	東京電力福島第一原子力発電所に津波第1波が到達	
		15:51	福島県相馬検潮所で最大9.3m以上の津波を観測	
		19:03	東京電力福島第一原子力発電所について菅直人首相が原子力緊急事態宣言を発令	
		21:13	福島県の東京電力福島第一原子力発電所の半径3km圏内の住民に避難指示。3～10km圏も屋内退避	
	12日	3:59	長野県北部でマグニチュード(M)6.7(暫定値)(震度6強)の地震発生	
		5:44	避難指示を東京電力福島第一原子力発電所の半径3kmから10km圏内に拡大	
		15:36	東京電力福島第一原子力発電所1号機で水素爆発発生	
		17:39	東京電力福島第二原子力発電所の半径10km圏内の住民に避難指示	
		18:25	避難指示を東京電力福島第一原子力発電所の半径10kmから20km圏内に拡大	
	13日	17:58	津波注意報解除	
	14日	11:01	東京電力福島第一原子力発電所3号機の原子炉建屋付近で水素爆発発生	
			東京電力が初の計画停電実施	
	15日	6:10	東京電力福島第一原子力発電所2号機の圧力抑制室付近で異音発生	
		6:14	東京電力福島第一原子力発電所4号機で音が生じて壁の一部破損を確認	
		11:00	東京電力福島第一原子力発電所の半径20～30km圏内の住民に屋内退避を指示	
		22:31	静岡県東部でマグニチュード(M)6.4(暫定値)の強い地震があり、震度6強を観測	
				東京電力福島第一原子力発電所4号機で火災発生
	17日	9:48	自衛隊が東京電力福島第一原子力発電所3号機に放水開始	
	18日	17:48	原子力安全・保安院が東京電力福島第一原子力発電所について、INES(国際原子力・放射線事象評価尺度)で「レベル5」と発表	
	20日		福島県飯館村の水道水から放射性物質を検出	
	21日		国が定めた暫定規制値を超える放射性物質が検出された福島県産のホウレンソウなどの出荷制限を指示	
	23日		東京都葛飾区の金町浄水場で乳児摂取制限を超える放射性ヨウ素を検出	
	24日		東京電力福島第一原子力発電所3号機のタービン建屋で作業していた東京電力関係者3名の被ばくを確認	
			東京電力福島第一原子力発電所の共用プールに外部電源供給。本設系統による冷却開始	
			東北道の一般車両の通行が可能に	
	25日		東京電力福島第一原子力発電所の半径20～30km圏内にも自主避難を要請	
	28日		東京電力福島第一原子力発電所の敷地内からプルトニウムが検出	
	4月	7日	23:32	宮城県沖を震源とする地震発生 マグニチュード(M)7.1(暫定値)
		8日		東京電力、東北電力管内の計画停電の原則終了を宣言
11日			枝野官房長官が東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内の一部地域を新たに「計画的避難区域」に指定し、1か月程度かけて住民の域外避難指示を発表	
		17:16	福島県浜通りを震源とする地震 マグニチュード(M)7.0(暫定値)	
12日		14:07	福島県浜通りを震源とする地震 マグニチュード(M)6.4(暫定値)	
13日			仙台空港、民間機就航再開	
21日			在来線のJR東北線が仙台—一ノ関間、岩切—利府間で運転再開し、全線が復旧	
29日			東北新幹線、一ノ関—仙台間が復旧し、東北新幹線全線復旧	

ボランティア活動 支援センターの歩み

I センターの概要

1. センターの設置目的, 概要

東日本大震災の被災地では救援・復興活動が行われており、長期にわたってボランティアが必要であると予想された。そこで我が千葉大学ではボランティア活動を希望する学生や教職員を支援する事を目的とし、3月末に「千葉大学ボランティア活動支援センター（以後文中ではセンターと略）」を設置した。

センターは「ふれあいの環」学生総合支援センター（以下文中ではふれあいの環と略）内にあり、常時在室しているふれあいの環コーディネーターがセンターの窓口として対応している。室内には、震災ボランティア掲示板や活動報告パネルなどがあり、自由に情報を得る事が出来る。活動の企画や運営は、大学教職員と、ふれあいの環で活動する学生支援団体「ボランティア・コーディネーター」を中心とした有志学生によって進められる。

2. 活動内容

センターの主な活動内容は以下の5つである。

- ・ ボランティア活動の企画
- ・ ボランティア情報の収集, ボランティア希望者への情報提供などの支援
- ・ ボランティア活動保険加入などの活動支援
- ・ 募金活動の支援
- ・ ボランティア活動用品の貸与・支給

センターではボランティア活動を行う学生, 教職員の安全と情報を支援するためにボランティア登録を推奨している。ボランティア登録した場合, 活動中の事故や怪我, 損害賠償責任等について保証する「ボランティア活動保険」に無償で自動的に加入することが出来る（保険料は大学が負担）。また登録者に対して, ボランティア企画のお知らせや他団体のボランティア情報等をメールにて配信している。

3. 集計

○ 活動状況

表1は平成24年3月2日現在のボランティア活動件数を示しており, 表2は具体的な活動内容を示している。表1より男性よりも女性のほうが登録者, 活動件数ともに上回っていることが分かる。また表2から, 宮城県での活動が飛びぬけて多く, 次いで岩手, 福島, 千葉となっていることが分かる。とりわけ千葉県での活動については, 震災による浦安などの沿岸埋立地での液状化現象で, 泥かき作業などの震災直後の活動が多くを占めている。

表 1 : ボランティア活動件数 (平成 24 年 3 月 2 日現在)

	合計	学生		教員		職員	
		男	女	男	女	男	女
登録完了者	419 名	171 名	215 名	8 名	6 名	8 名	11 名
活動実施延べ件数	1122 件	439 件	579 件	36 件	18 件	36 件	14 件

(注) 活動件数は、1 人 1 日で 1 件としてカウント

表 2 : ボランティア活動状況 (平成 24 年 3 月 2 日現在)

場所	件数	活動内容
岩手県	81	炊き出し瓦礫の撤去, 泥かき, アンケート配布支援
宮城県	907	●泥かき, 家屋の清掃・片付け, 瓦礫の撤去, 救援物資の仕分け, 傾聴, 学習支援, 学校支援, 思い出探し, 入浴支援, クリーン活動 ●避難所支援 (炊き出し, 食事準備, 傾聴, 子供の遊び相手) ●ボランティアの後方支援, 動物救護センター支援 (犬の世話) 学校心理士支援
福島県	73	●屋内外の片付け・泥かき, 安否確認支援, 支援物資の仕分け, ●避難所支援 (生活支援, 児童への娯楽提供, 被災者のエモーショナルケア) ●学校行事支援, 子供リフレッシュキャンプ
千葉県	旭市	7 泥かき, 炊き出し, 支援物資配達
	浦安市	8 泥かき, 簡易トイレ配達, 建物被災度調査 (市役所職員の補助)
	船橋市	10 避難所支援, 募金活動
	習志野市	1 募金活動
	千葉市	8 支援物資の仕分け・積み込み, 泥かき, 募金活動
	佐倉市	16 歴史的資料の搬出・整理
	君津市	2 中学校での講演
	小計	52
その他	9	募金活動, 支援物資の積み込み
合計	1122	

○ ボランティア登録者の月別活動件数

図1は期日に関わらず1回の活動を1件と数えた場合の月別活動件数である。図1から分かるように活動件数が一番多かった時期は夏休み期間の7、8および9月であり、特に7月の数は飛びぬけている。ちなみに8、9月にはそれぞれセンター主催のボランティアツアーが行われている。だが10月に入るとその数は激減し、とりわけ1月は1、2件といった様子である。2月で増加しているのは、センターが福島県富岡小中学校との豆まき交流活動を行ったためと思われる。

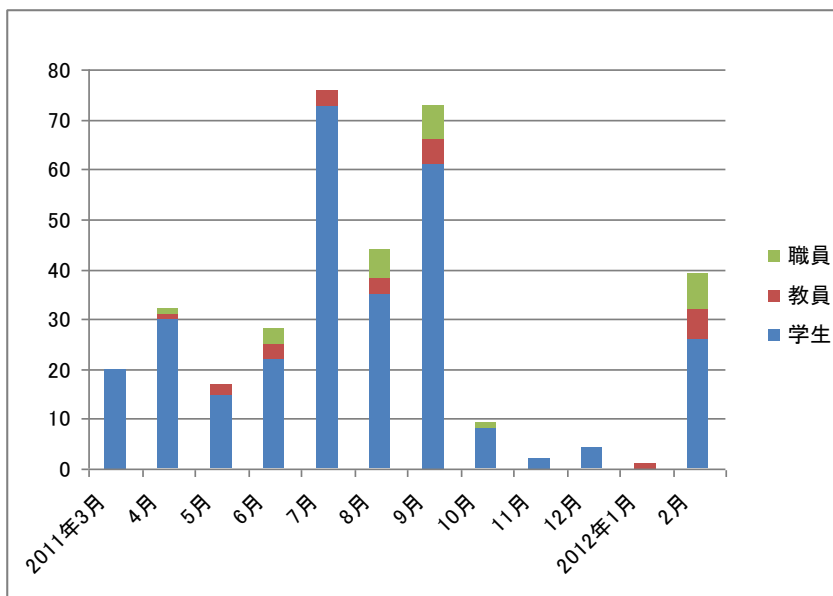


図1：センター登録者 月別活動件数 I (2012年2月29日現在)
(注) 期日に関わらず1回の活動を1件と数える (日帰りでも3日間でも件数は1件)

○ 活動者数の内訳

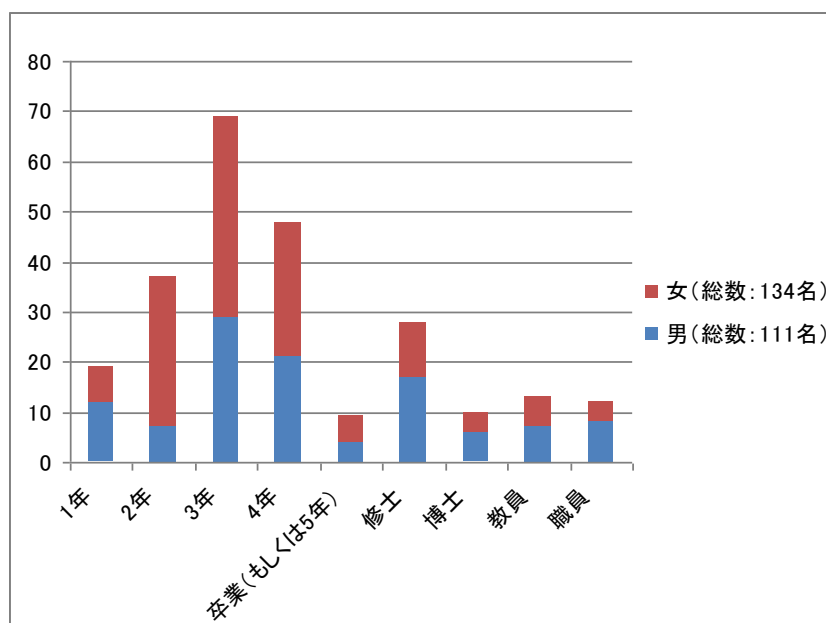


図2：活動者学年内訳 (2012年2月29日現在)

図2は登録者のうち、活動している者を学年別にみたものである。これによると、まず全体的には男性よりも女性の方が活動経験人数は多い。ただこれは一度でも活動した人を人数として数えているため、活動の期間、程度や内容の大きさを必ずしも意味しない。すなわち、男性の方が活動の程度について、より長期間に及ぶこともありうる。

また、学年別活動人数では学部3年が最も多く、男女比も半々である。次いで多いのが学部4年、そして学部2年となる。これについては、学校生活のゆとりがそのまま反映されていると思われる。すなわち、ある程度単位を取っているが、まだ本格的な進路活動が始まっておらず、時間的ゆとりのある3年生が、全体的に見て最もフットワークが軽く活動に意欲的だったのではないかと考えられる。

○ 活動回数の内訳

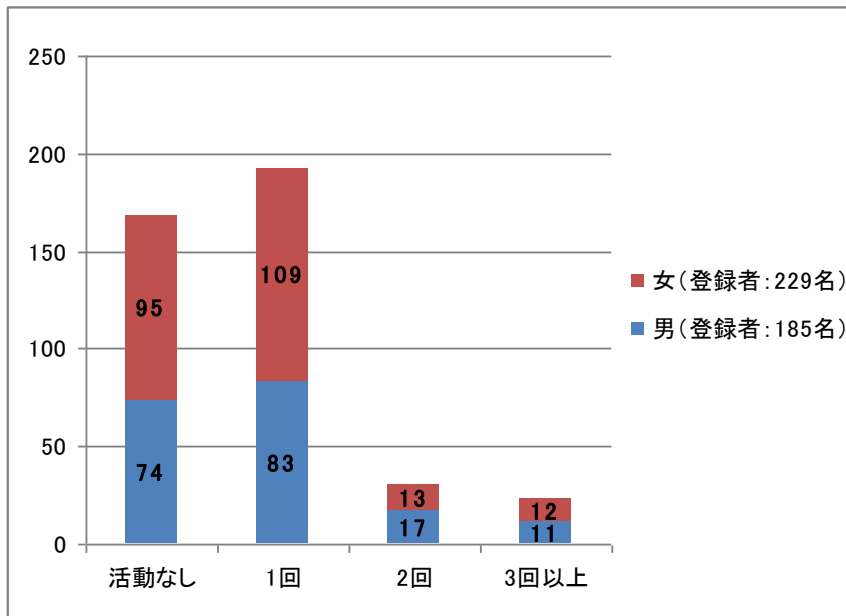


図3：登録者 活動回数内訳（2012年2月29日現在）

図3はセンター登録者の活動状況を活動回数別にみたものである。これによると、1回だけ活動した人と、一度も活動をしていない人はだいたい同じであり、この二者が全体のおおよそを占める。一方、2回と3回以上の活動者数もほぼ同数であるが、1回または活動なしの人数と比べると、その数はおおよそ6分の1にもなる。つまり特徴としては、センターに登録しても活動していない人が多数いる点と、1回活動した人がその場限りで終わってしまい、2回目以降も活動することが極めて少ないという点があげられる。したがってセンターとしては、活動なしの人の関心を掘り起こすことと同時に、1回活動した人が2回目の壁も越えることでリピーターになれるよう、工夫を施したイベントやツアーの開催が必要だろう。



実際の活動のようす

Ⅱ 活動の記録

2011年

3/17~27

募金活動

大学付近の駅や、学内で募金活動を行った。積極的な呼びかけと、大勢の方の協力により、大学内外で多くの義援金を集めることができた。

【学外募金】参加人数：97名
総額：5,260,729円

【学内募金】参加人数：7名
総額：119,006円



5,6月

ボランティア交流会

ボランティアに関心のある学生同士が交流を持つことができる場を企画。現地でボランティア活動をした学生とボランティアをしたことがない学生とが、現地の様子やボランティアに関する情報などを話し合い、交流した。



8/4~7

第1回
ボランティアツアー

夏休みを利用し、学生、教職員が被災地を訪れ、現地のボランティアセンターのもとで活動した。

真夏の暑さの中、長そで長ズボンで黙々と作業をしていた。

場所：宮城県気仙沼市

内容：瓦礫の撤去、漁網の解し

参加者：学生 31 名 教職員 7 名



9/22~25

第2回
ボランティアツアー

夏休みを利用し、再び被災地を訪れる。第1回とは異なり、2日間とも同じ場所での作業であったため、能率的に作業をすることができた。

場所：宮城県南三陸町

内容：瓦礫の撤去

参加者：学生 24 名 教職員 10 名



10/7

君津市中学校で講演会

震災後に行われたボランティア活動や、それを通して感じたこと、また、現在の現地の様子などを中学生に向けて講演した。



10/27

【主催】

全国訪問ボランティアナースの会 CANNUS (キャンナス)

双葉保育園
スマイルプロジェクト

気仙沼の保育園児を持つ 14 家庭(46 名)を東京ディズニーランドに招待するプロジェクトのサポート。一家族に一人のボランティアがつき、パークを案内。



後日、学生がビデオと写真から DVD を作製。出来上がったものを双葉保育園に届けに行った(2月 14 日)。

11/5~6

大学祭 東北物産展

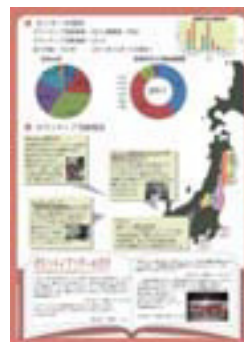
大学祭で遠方支援として開催。都内のアンテナショップから東北の名産品を取り寄せ販売した。



11/6

生涯学習
ネットワーキングフォーラム

ポスター・冊子を作製し、震災ボランティア活動の取り組みを紹介するブースセッションに出展。



11/14

震災復興支援シンポジウム

けやき会館で震災復興支援シンポジウムを開催。
センターの活動報告を学生2名が行った。



12月

V-1
PRカコンテスト

【主催】 Gakuvo

30秒の団体活動PR映像を作製し、学生ボランティア団体が自分たちの活動を広く社会に伝えるPR力を競い合うコンテストに参加。



12/5

千葉県
ボランティアシンポジウム

【主催】 千葉県

古谷佳大さん(工学部・3年)が、bayfm78.0ラジオパーソナリティーのKOUSAKUさん、県内でボランティアを行っている方々と対談。



12/16

カタリベカフェ

「3.11 あなたは何をしていましたか？」をテーマにフリートークを行うイベントを開催。参加した学生・職員・OBの方々が、震災をめぐる自らの思いなどを自由に語り合った。



2012年

1/18

ボランティア団体
との交流会

学生の被災地への関心を再度高めるため、被災地で継続して活動をしている2つの学生団体を招き、団体と一般学生、さらには団体間の交流を目的とした交流会を開催。交流会後半では、各団体の協力・連携も視野に入れた今後の展望を模索した。



参加団体（ ・学生復興支援団体「げんき団」
・環境 ISO 学生委員会松戸キャンパス



1/31

富岡第一小学校校長 基調講演

震災関連講演会を開催。千葉大学教育学部の卒業生で、福島県富岡町の富岡第一小学校校長の八島敬氏に、一被災者と校長という二つの立場から見た震災と原発事故についてお話いただいた。



会場には多くの方が詰め掛け、メディアからは伝わってこない被災者の生の声に耳を傾けた。



2/3

富岡小・中学校 豆まき行事への参加

福島県富岡小学校での豆まき行事に
大学の学生・教職員が参加。
富岡小学校が一時移転している三春町
に学内の留学生，学生および教職員
が出向き，豆まきや雪合戦などの遊び
をとおして児童と触れ合った。

参加者：22名（学生・教職員・OB）



Ⅲ センター主催の支援活動

夏休みを利用したボランティアツアー

1. ツアーの概要

○ 目的

交流会等を通して、学生からボランティアに参加したいがお金がない、時間がないなどの声が挙がった。そこでセンターは、時間がある夏休みに格安で参加出来るボランティアツアーを企画した。今回のツアーではボランティア初心者及び未経験者を対象とし、ツアー後もボランティア活動に取り組めるきっかけ作りを目的とした。

○ ツアー日程

1日目	千葉大学出発 ⇒ 車中泊
2日目	現地着 ⇒ 活動 ⇒ 入浴, 夕食, 振り返り ⇒ ホテル泊
3日目	活動 ⇒ 入浴, 夕食, 振り返り ⇒ 現地発 ⇒ 車中泊
4日目	千葉大学着 ⇒ 解散

○ 参加者内訳

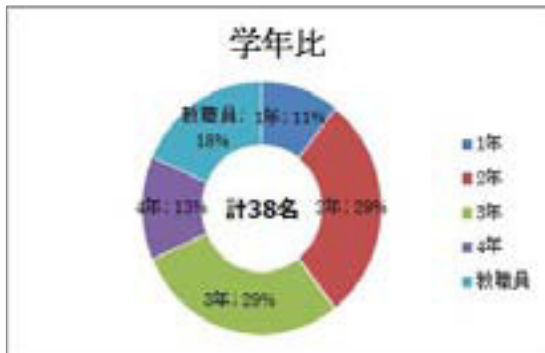


図1：第1回ツアー参加学生の学年比



図2：第2回ツアー参加学生の学年比

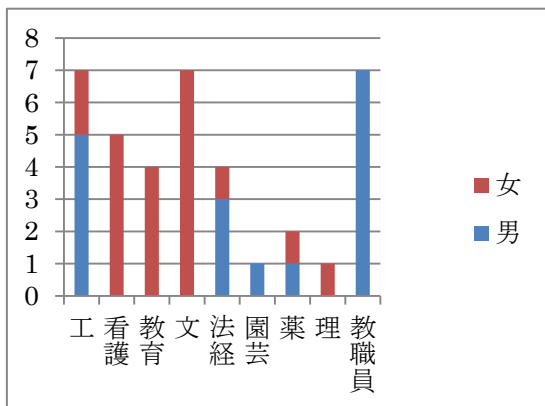


図3：第1回ツアー参加学生の所属学部と男女比

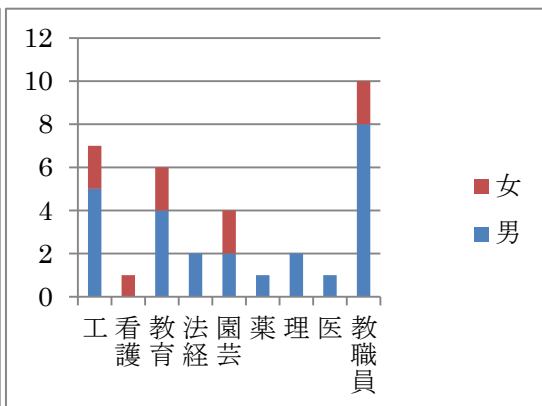
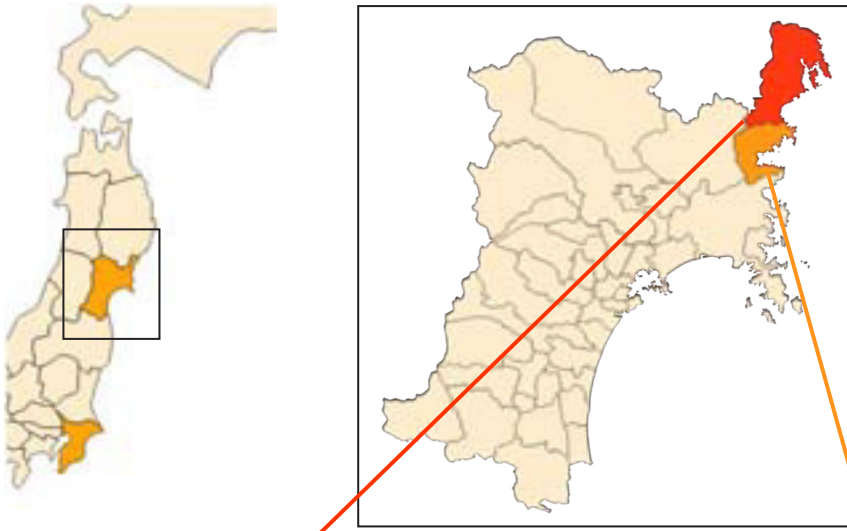


図4：第2回ツアー参加学生の所属学部と男女比

○ 活動内容



第1回ボランティアツアー
(2011.08.04~07)

活動場所	宮城県気仙沼市 気仙沼市社会福祉協議会 ボランティアセンター
活動内容	がれきの撤去(1日目) 絡まった漁網の整理(2日目)
交通手段	バス借り上げ 1BOX車(後方支援用)



第2回ボランティアツアー
(2011.09.22~25)

活動場所	宮城県南三陸町 南三陸町災害 ボランティアセンター
活動内容	瓦礫の撤去
交通手段	バス借り上げ 1BOX車(後方支援用)



2. 学生の声

1日の活動終了後とツアー全体の終了後にそれぞれ振り返りと事後研修を行った。これらでは、その時感じていること、想うこと、考えていることを率直にコメントシートに記入してもらい、その後交流をした。以下ではそのコメントシートに書かれていた想いや考えの中からいくつか抽出しまとめてある。学生、教職員の生の声を聞き、参加者がどのような体験をしたか感じ取って頂きたい。

○ 参加した動機

前々からボランティアに参加したいとは思っていたけど、日程や金銭面に不安があり、行けなかった。今回は主催が千葉大学だったので安心して参加できた。

(第1回ツアー参加者 文・4年・女)

実際に現地の様子を見て、人の役に立ちたいと思ったから。

(第1回ツアー参加者 看護・2年・女)

実際に被災地がどのような状況か知りたかったから。

(第1回ツアー参加者 工・3年・男)

震災を自分の中で風化させないため。

(第1回ツアー参加者 法経・1年・女)

ネットで読んでいるボランティア日記に記されていること、テレビのニュースで見た映像、雑誌に載っている被災地の風景を自分の五感で確かめたいと思った。なぜなら体験を経た想像は何もないときのものより現実に近くなると考えたから。また、ボランティアツアーへの参加という形で自ら行動することで、今後一歩踏み出すまでが短くなると思ったから。

(第2回ツアー参加者 園芸・4年・女)

第1回のツアーにも参加したが1度で終わりにしたくなかったの。

(第2回ツアー参加者 法経・4年・男)

これからどうしていいか分からなかったの、とりあえずボランティアをしてみようと思った。

(第2回ツアー参加者 工・2年・女)

震災を忘れないため。状況を自分の目で見るため。

(第2回ツアー参加者 教育・2年・女)

○ 実際に活動してみたの感想

被災地を実際に見てみて、津波の被害の大きさを実感できました。流されて、さびて積み上げられた車、大きな船が乗り上げている建物などの様子は、津波の強力さを感じました。しかし、クレーン車や大型機械が活躍する一方で、細かな作業や、物の分別など、まだまだ人の手が必要なところが数多くあることを知り、ボランティアの必要性を感じました。

(第1回ツアー参加者 法経・3年・男)

やはり、自分の目で見るのとメディアを通して見るのとでは全然違って、ショックも大きかった。震災のとらえ方も変わったし、自分の目で見ただけからこそ生まれた考えや疑問も多く、行って良かったと思った。たった2日間、数時間でどれだけ役に立てたかは、正直、自信はないけれども、自分にとって何にも変えられない貴重な経験となった。

(第1回ツアー参加者 文・3年・女)

初対面の人が多い中で、この2日間コミュニケーションをうまくとって、円滑に活動している人が多かったのが印象的で、自分も今後、人とのコミュニケーションを大事にしていきたいなと思いました。また、この短期間だけでも、同じ志をもつ人々と一緒に活動し、ボランティア活動出来たことは貴重な経験だったと思います。

(第1回ツアー参加者 理・1年・女)

足場が悪く、暑さもあり、思っていた以上に体力が消耗された。また、時間・人数の割に作業が進まなかったように感じた。

(第1回ツアー参加者 文・3年・女)

集まったがれきは今後、どうなるのか。

(第1回ツアー参加者 文・3年・女)

震災から半年が過ぎ、千葉では普段の生活を取り戻し、正直、被災者たちを考える時間が減っていた。今回参加させてもらい、復興にはまだほど遠く、多くの人の助け支えがあることを改めて実感出来た。とても良い経験になった。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

自分は自分の家具や家電はボコボコに壊れていても大切に扱ってほしいと思いました。なので、今回は大切に扱って掘り出したつもりです。

(第2回ツアー参加者 工・4年・男)

自分たちが活動したところが綺麗になることで、直接復興の手伝いが出来ている実感がわいた。しかし復興までの道のりはまだ長いものであるとも感じた

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

聞くのと見るのとでは大違いでした。半年も経ったのにまだこんな状態なことに驚きました。一瞬の出来事なのに元に戻すのにこんなに時間がかかるとは…。地道な作業で結構大変でした。

(第2回ツアー参加者 工・2年・女)

被災地の方だと思うが、車中から我々に頭を下げてくる方を良く目にした。その姿がとても印象的でやるせなく、活動に身が引き締まる思いでした。

(第2回ツアー参加者 教職員)

生活の形跡が少しでも残っている部分に触れることで手作業で行う意味があるのだなと感じた。またリフレクションで多くの人の意見を聞くことが出来て良かった。

(第2回ツアー参加者 法経・4年・男)

○ 活動を振り返っての反省点と改善点

鉄底入りの長靴が足の小さな女性用サイズがなかったために、普通の長靴で参加したところ、くぎを踏み抜いてしまい怪我をしてしまった。

(第1回ツアー参加者 法経・1年・女)

けがに関する注意は事前の説明会でもあったが、甘く見ていた。実際にけがをする人がでて、積極性と慎重さの両方を意識しながら活動することが大切だと分かった。

(第1回ツアー参加者 工・4年・男)

土に埋まったがれきの撤去をする際に、土と分類するためにザルのようなものがあると良かった。また、集めたがれきを運ぶバケツなどもあった方が良かった。

(第2回ツアー参加者 園芸・1年・男)

行った先で何が出来るかを考えることも重要で、何でも準備していけば良いわけではないし、限界がある。その場にあるかごや鍋など利用しながら活動出来ると良い。

(第2回ツアー参加者 教職員)

○ 今後のボランティア活動参加者に伝えたいこと

焦らない。無理に達成感を得ようとしない。そういう行動のせいで体調を崩したりすれば、周りの迷惑になる。又、現地のボランティアセンターや依頼主の迷惑になる場合がある。達成感を得ることは大切だが、それが第一目標ではない。

(第1回ツアー参加者 薬・2年・女)

事前準備をしっかりとしておくことが大事です。事前研修のときに必要だと言われたものはちゃんと準備し、わからないことはしっかり聞くなり、ネットで調べるなどして行ってください。

(第1回ツアー参加者 文・3年・女)

自分に何が出来るかではなく、まず参加してほしい。現場を見ることで気持ちは変わると思います。何でも良いから活動したい、貢献したいと思うはず

(第2回ツアー参加者 教職員)

ボランティアというのは無償労働なので、正直、気が進まない人もいると思う。ただボランティアを通して多くのことを学べるし、初めて分かることもあると思うのでぜひ参加してほしいです。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

継続的なボランティアの参加が大切だと思います。作業内容は違えども継続することで力になれると思う。

(第2回ツアー参加者 教育・2年・女)

自分たちの目で現場を見て感じる事が出来るから、参加することは必ずプラスになると思う。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

○ 大学生として帰ってから出来ること、やりたいこと

参加することに意味がある！参加することによって自分の価値観や視野を広げることが出来る。その価値観や自分の経験を周りの人に伝えることで、リアルな情報を多くの人に知ってもらいたい。

(第1回ツアー参加者 文・4年・女)

被災地に直接赴くのはなかなか大変なことなので、千葉でも協力できるボランティアがあれば参加したい。

(第1回ツアー参加者 文・3年・女)

継続してボランティアに参加する。被災地の現状を見守り続ける。

(第1回ツアー参加者 文・2年・女)

自分の大学生活を見直す。もっと出来ることがあるかもしれない。

(第1回ツアー参加者 工・2年・女)

震災を過去のものにしない。

(第1回ツアー参加者 文・4年・女)

ボランティアというのは敷居が高いものでも、大変なことでもなく、できることをするだけ良いという考えで多くの人が少しずつ加わってくれればいいと思う。

(第2回ツアー参加者 工・3年・女)

友達や家族に自分の経験したことを伝えたい。多くの人が知ればいいと思う。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

現地のものを買う。とは言っても直接現地に赴き、購入するのは難しいので取り寄せ、大学祭にて物産展を開き多くの人に買ってもらうことで援助をしたい。

(第2回ツアー参加者 工・3年・男)

私は、千葉大の附属中学校で非常勤講師をしているので今回のボランティアで感じたことなど、生徒に話をし、現状を知ってもらう。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

報告会の企画。ボランティアツアー参加者と未経験者の交流会をひらけたら良いと思う。

(第2回ツアー参加者 工・3年・男)

自分の時間がたくさんある時だと思うので、またボランティア活動に参加したり、募金という形でも支援していきたいと思います。

(第2回ツアー参加者 園芸・1年・女)

今までボランティアをやったことがなかったが、この経験を通して非常に有意義なものだと思った。今後もこのような機会があれば、参加したいと思います。

(第2回ツアー参加者 教育・修士2年・男)

被災地支援の第2フェーズ

継続的支援への道 - 子供たちとともに未来へ向けて -

千葉大学と福島県富岡町、富岡小中学校との協働

福島県富岡町立 富岡第一・第二小学校、富岡第一・第二中学校、富岡は津波の5校は東日本大震災の被災および原発の避難区域の指定により、福島県三春町の工場跡地の建物を利用して9月1日から仮設的に移転している。同地区の学校は将来的な見通しは立っていないが、第一・第二小学校の校長が千葉大卒業生ということもあり、千葉大学では継続性を視野にいれて連携・支援していく方向で検討を行っている。

三春町の仮校舎



OB たちの環

千葉大学OBが千葉大学メルマガ【卒業生との絆ニュース】のからの呼びかけに応じて富岡小中学校へ大型遊具を提供した。設備費用なども卒業生からの義援金でまかなわれる。

写真は11月のもの

学びの連携

柏の葉センターから富岡小中学校へ小型植物工場をプレゼント！
安心して食べられる植物の栽培をすすめた。

植物工場とは？

閉鎖的な空間で内部環境をコントロールして植物を育てるシステム。農業不要で気候に左右されないのでも安全！千葉大を拠点とした柏の葉センターで研究されている。



柏の葉キャンパス駅前ららぽーとに設置された植物工場「みらい畑」

そして、これから

- ・学生企画授業として「フクシマを考える」を開設
- ・コミュニティ・ガーデンの設置
- ・夏休みキャンプへの招待

…など今後の活動を準備中

千葉大学ボランティアセンター

福島県富岡小中学校の豆まき行事への参加

1. 概要

○ 目的

瓦礫の撤去などの人手が必要とされるボランティアは次第に減り、団体のボランティアを受け入れる現地ボランティアセンターは減少していく傾向にあった。しかしながらまだ課題として残っている部分も多く、これからは継続的に寄り添い支援していくことが必要であると想定された。そこでセンターは、福島県富岡町にある小学校の学校長が千葉大学卒業生という事もあり、富岡小中学校に対して継続的支援、連携を行うこととした。今回は連携のきっかけ作りを目的として開催された。

○ 参加者内訳（※留学生は全て J-PAC（短期留学）の学生）

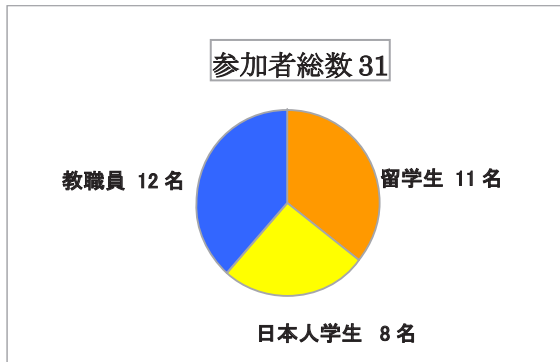


図 1：参加者内訳

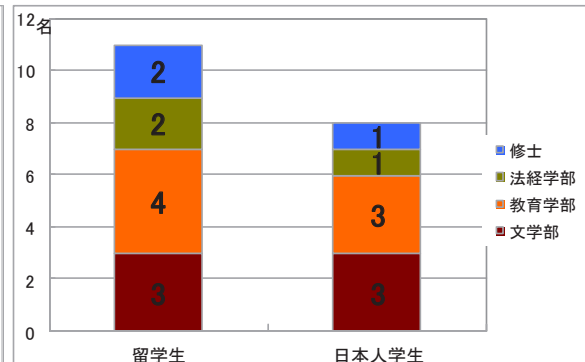


図 2：学生の学部内訳

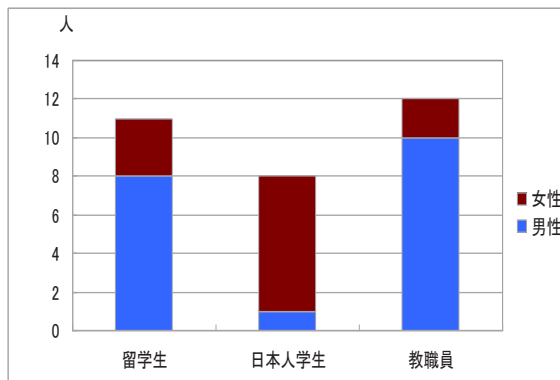


図 3：男女比率

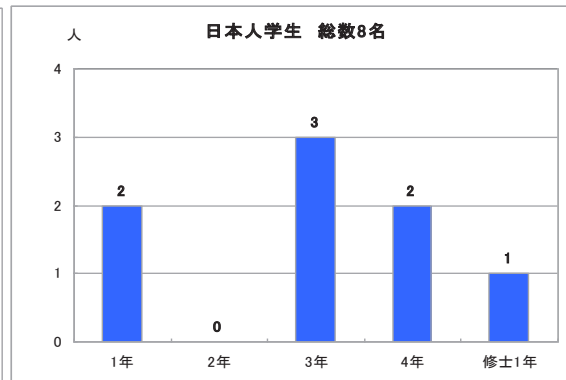


図 4：日本人学生の学年内

○ 福島県富岡町立小中学校について

福島県富岡町立富岡第一・第二・小学校、富岡第一・第二中学校、富岡幼稚園の5校は東日本大震災の被災及び原発の避難区域の指定により、福島県三春町の工場跡地の建物を利用して9月1日から仮移転している。第一・第二小学校の校長が千葉大学卒業生ということもあり、この度の連携が実現した。



○ 開催日(2月3日)のスケジュールと活動内容

7:15 貸切バスで出発

11:30 移転先の三春町にある
富岡小中学校に到着

11:30 授業参観

12:15 各学級で
簡単な自己紹介
給食

12:55 昼休み

13:55 豆まき集会

14:20 学校での活動に参加
(児童とのふれあい)
帰りの会

15:30 下校バス見送り

16:00 富岡町小中学校
を発ち大学へ

20:30 大学到着

4時間以上かけて
ようやく到着!!

留学生が生徒達に
自分の国を紹介!

一緒にお弁当
を頂きます

昼休みは雪合戦! 皆本気です

豆まきでもありったけの力を込めて投げま

豆まきの後、教室で
鬼からプレゼント

2. 学生の声

○ 交流の感想

小学生と遊べてとても楽しかった。また節分も体験でき、面白かった。

(出身国：カナダ・文学部・女)

福島に行くのも、太平洋を見るのも初めてだったが、景色が美しかった。子供たちとの交流も楽しかった。一緒に雪合戦し、手伝ってあげることができて幸せになった。

(ハンガリー・理学研究科・男)

初めて東北に行ったがとても印象的なツアーだった。色々な点で避難生活の気配も感じたが、小学生たちは本当に元気で生き生きとしており、私も楽しく過ごした。留学生もこのボランティアに参加できてよかった。

(ドイツ・人社研・男)

一年生と遊ぶのは本当に楽しかった。子供たちはとても明るくて優しくかった。音楽の授業は私の小学校にはなかったので、新しい経験だった。

(アメリカ・法経・男)

初めは恥ずかしがっていた子供たちも、帰るころには素敵な笑顔を見せてくれて、似顔絵のプレゼントもしてくれた。一生忘れられない思い出になった。

(ミャンマー・教育・女)

学生達とはたったの4時間しか交流できなかったが、私に懐いてくれた。この経験は一生忘れない。

(アメリカ・法経・男)

活動の目的がよく、いい活動だった。子供たちが仲良くなってくれ、一緒に遊べて楽しかった。

(タイ・教育・男)

みんなで活動したのが一番良かった。生徒たちは照れ屋だったが、興味のあることについて話しかけるとだんだん慣れてきた。楽しい一日を過ごせた。

(トルコ・文・男)

初めて日本の小中学校に行ったが、子供たちが一生懸命勉強していて驚いた。皆で遊び、豆まきをして本当に感動した。やっぱり、日本で英語の先生になりたいと思った。

(アメリカ・教育・男)

自分の国と日本の小学校の違いを見つけるのが面白かった。たくさんあたらしい経験もでき、楽しかった。

(アメリカ・文・男)

震災の影響を受けている小中学校の実態の一部を知ることができた。交流した児童が笑顔になってくれたのはよかった。また留学生と交流できたことも良かった点だった。

(教育・4年・女)

日本人学生・留学生・教職員みんなと一緒に小学生と雪遊びをしたのが印象的だった。ともに体を動かすことで、互いの距離がすごく近くなったと思う。

(教育・修士1年・女)

最初の方は遠慮がちだった小学生たちも、雪合戦を通して打ち解けることができたため、外で思い切り遊ぶことの大切さを実感した。また、実際に被災地に行ったことで、未だに子供たちが安心して生活できる環境には戻っていないことを知ることができた。生徒の中には仮設住宅に暮らす子もいて、安心して学校に通える環境づくりの整備の必要性を感じた。継続的支援が大切だと思った。

(法経・4年・男)

限られた環境でも楽しそうに学校生活を送る子供たちをみて、やりきれない気持ちになった。4人の教室、給食ではなくお弁当、そういう現実を目の前に子供たちはどんな気持ちになるのか。今回は一日きりの活動だったので、子供たちの色々な「声」をあまり聞けなかった。だが今後も継続して関わっていきながら、子供たちにできることを考えていけたらいいと思う。

(教育・1年・女)

一緒に給食を食べたが、弁当が小学一年生には明らかに多い量で、もう少し何とかならないか…と思った。ただ、共に遊ぶなかで、いま現在の子供たちの元気な姿が見られて安心した。

(文・3年・女)

子供たちの心の影をぬぐいきることはできないが、また参加したいと思った。また、カイロや食料などたくさんの補助はありがたかった。

(教育・3年・女)

子供たちはすこし緊張していたけれど、こちらから話しかけると終始嬉しそうな顔をして、色々と話してくれた。担任の先生も本当に温かく迎え入れてくれた。避難区域の子供たちがどんな風に学校生活を送っているのか、自分の目で知れたことはよかった。「Fukushima」という被災地の異質性をあらためて実感できた。また、普段なかなか交流できない留学生と一緒に活動できたことも刺激的だった。

(文・4年・女)

○ 活動を振り返っての反省点と改善点

時間が短かったため、できたことは子供たちと遊び、楽しいひとときを過ごすことだけだった。できれば学校生活に貢献できるような手伝いが少しでもできるとよかった。また、学生が至る所で写真撮影をしていたが、個人情報の問題があるので、よくないのではと思った。

(日本人学生・教育・4年・女)

日帰りでの活動だったが、継続して行うべきだと感じた。今度は千葉大に小学生を招待し、大学祭を楽しんでもらうのも良いと思う。

(日本人学生・法経・4年・男)

時間が限られていて、交流以上のことができなくて残念。また、日本人学生、留学生が共に行くなら、それぞれの役割ももう少し考えるべきだった。中学生とも交流したかった。

(日本人学生・教育・修士1年・女)

移動時間が長い。行きを夜行バスにして一日丸々活動できればいいと思う。

(日本人学生・文・3年・女)

行きの時間を早めるか、帰りの時間を遅めて、交流の時間を増やすべきだった。また、今回は全て子供たち側が用意していた企画だったが、こちらが計画した企画もあったらよかった。

(日本人学生・教育・1年・女)

一度きりの交流になるより、今回のメンバーを中心に、また同じクラスの子供たちと交流できたらいいなと思う。

(日本人学生・教育・3年・女)

今回は初めてということもあり、沢山準備して歓迎してくれたが、活動を継続するなかで、もっと自然な関係性が構築できるとよいと感じた。

(日本人学生・文・4年・女)

せっかく行くのに3,4時間遊ぶだけではもったいない。

(留学生・文・男)

時間が短すぎた。4時間だけでは足りない。

(留学生・法経・男 ほか多数)

○ 今後の学生生活において、自分たちに出来ること

震災というテーマをもっと強く意識する。また、自分の国でも関心を引きかける。

(留学生・人社研・男)

今後、色々なボランティア活動に参加したい。

(留学生・教育・女)

またこのような活動があれば参加したい。子供たちとサッカーやバスケットができると嬉しい。

(留学生・文・男)

アメリカに帰る前に、富岡小中学校にまた遊びに行きたい。そこで、私が触れ合った児童が一年でどれだけ成長したか見たいと思う。

(留学生・法経・男)

交流のときに、子供たちに自国文化を紹介したように、こういった触れ合う機会でも、自分たちの国についてもっと発表できたら良いと思う。

(留学生・法経・男)

異文化を勉強しながら、子供たちにとって異文化であるタイの文化について、説明できるようにする。

(留学生・教育・男)

震災ボランティアを経験した人たちの間で少し前から、震災の悲惨さを写真や映像で残し、「忘れない」「伝えていこう」という動きが見られる。だがこれは時間の経過とともに効果が薄れ、震災から1年経つ今ではほとんど期待するような効果はない。感情的になって思考を停止するのではなく、この大震災を記録として残しながら、知識を蓄積し、防災教育を作り上げ徹底していくことが必要だ。といっても壮大なものではなく、今回の企画へ参加するといったように、「一人でも多くの人は何らかの形で震災の復興支援に関わった」経験を積むことが大切だ。学生のもつ時間と若さを生かして、型にとらわれない柔軟かつ多様な支援を行っていくことが、結果として次の震災へ備えることにも繋がると思う。

(日本人学生・文・4年・女)

まずは継続的に交流を続け、信頼関係を築いていくことが大切だと思う。毎回違う人が行くよりは、ある程度、計画性を持ってチームで交流できると良いと感じた。

(日本人学生・教育・修士1年・女)

震災を忘れず、震災の現状を自身の目で見ると。震災の影響を受けている小中学校の現状を知人に伝えていく。

(日本人学生・教育・4年・女)

富岡小中学校と千葉大学の近況報告を定期的に行う、などの情報交換。また、互いの学園祭に招待してイベントを行う。

(日本人学生・法経・4年・男)

私達が先生や親よりも年齢的に近い存在であることを考えると、できることはたくさんあると思う。次回の訪問に向けて、何か用意してから行けるとよい。その分、千葉にいる間も、富岡の子供たちのことを考えていられるので。

(日本人学生・教育・3年・女)

ボランティアで見て、聞いて、触ったことを忘れない。ひとに伝える。仮設住宅から高速バスで学校に通うことは異常だと思うので、普通になってしまわないように、どうしたらいいのかを考え続けることが重要だと思う。

(日本人学生・文・3年・女)

私達が学生という立場で、どういったかたちで被災地の復興にかかわっていくことができるのか、もっと多くの方が考えなければいけないと思う。震災から1年経つ今も、福島原発問題は現在も進行中であるのに、徐々に私たちの記憶から風化してはいないか。それを防ぐためにはまず、現状を知ることから始めなければならないと思う。常に東北（特に福島）の現状にアンテナを張り続けることだ。なによりも今回の震災で起こった出来事を今後どうしていくか、一人ひとりが自分のこととして捉えていかねばならない。

(日本人学生・教育・1年・女)

○ センターへの要望とアイデア

日帰り（夜発日帰り）の震災ボランティアがあれば、ぜひ参加したい。また、富岡小中学校では給食が提供できない状況なので、温かい食事の提供などのボランティアもいいのでは。

(日本人学生・教育・4年・女)

福島の現状（とくに子供たちの生活など）についての報告会や、原発についての講演会など、みんなで情報を共有する場をつくってほしい。

(日本人学生・教育・1年・女)

被災地出身で、何かしたいと思っている学生にセンターの存在をもっとアピールし、「自分の故郷をどうにかしたい！」という学生の援助をしてほしい。また、被災地出身の学生とそれ以外の学生を集め、意見交換会をしてみると、新たなアイデアが生まれるのでは。

(日本人学生・教育・修士1年・女)

卒業するので千葉大生としてボランティア活動に参加するのは今回が最後だったが、今後も富岡小中学校の様子が知りたい。千葉大のウェブサイトに活動報告や写真をアップしてほしい。

(日本人学生・法経・4年・男)

震災で学習が遅れ、転校先校の勉強についていけず、戻ってくる子もいるという話を先生から聞いたので、学習支援活動が必要だと思う。泊りがけやサマーキャンプなど、もう少し子供に寄り添い、長期的に見てあげられるようなプログラムがあればいい。

(日本人学生・文・3年・女)

新入生歓迎行事や運動会など、次の行事に向けて、大学生企画を準備したい。今回の豆まきも、ある1年生の子が「つまらなかった…」と言っていたので、全員で体験できる集会があればいいと思う。

(日本人学生・教育・1年・女)

千葉に招待しディズニーランドに連れて行ってあげたい。または、たまには気分転換として、違う場所で遊ぶ機会を設けたい。

(日本人学生・文・4年・女)

もっと富岡の地方のために手伝いたい。

(留学生・文・男)


バスツアーやボランティア活動などがもっとあると、活動もできるし、より自然なかたちで日本人やその文化について知ることができる。もっとイベントを増やしてほしい。

(留学生・教育・女)


○ 児童達からの感想

ボランティア活動
支援センターの歩み


千葉大学のみなさんへ
豆まきしう会の時は、あ
りかとうございます。千葉
県さんのら、花生とてもおいし
かったです。昼休みに雪が
せなしたのも楽しかったです。
来年の豆まめまきにも来て
くれるととても、うれしいで
す。また、いつか会いまし
ょう。ありがとうございました。
とみおががーい学校 2年 [redacted]




千葉大学のみなさんへ
この前は、遠くから来てくれておかげ
さには、みなさんと遊んでいて楽し
かったです。また、いっしょに遊みたいな
と思いました。千葉大学のみなさんと遊
んだ時、いつかおどろき、楽しい気分にな
りました。それは、き、といつより明るく楽しい
気分になれたからだと思います。自由に
いては、おもしろいとおどろかされた人か
きて、ぶつう通りになて、おもしろい
人がやさしくしてくれて、おかげです。
3年 [redacted]



千葉大学のみなさんへ
この前は、遠くから来てく
れてありがとうございます。
この前、千葉大学のみなさん
と集合してとても、楽しか
かったです。また、豆まき集会の時
オニのかくをしてくれてありが
とうございました。また、この学校に
来ていっしょに元氣よく遊んで
てください。
3年 [redacted]



千葉大学のみなさんへ
この前はわたしといっしょに遊んでくれて
ありがとうございます。また、豆まきや集合戦でとても
楽しかったです。また、千葉大学のみなさんと遊んで
くれたとてもおもしろく、たくさんおもしろい
おもしろい、集合戦はわたしも強かったです。
時間が経つのがわかって、おもしろい、楽しく
遊ぶことができて、おもしろい、また、おもしろい
機会があれば、ぜひまたいっしょに遊んで
ほしいと思います。
5年 [redacted]



被災学生の想い

東日本大震災での被害を受けて

宮城県出身
教育学部 匿名

東日本大震災の際には、被災者支援の給付をしていただき、心から感謝を申し上げます。実家が地震と津波により大きな被害を受け多くのものを失ったため、このようなご支援を頂いたことやそのほかの被災者向けの大学側の取り組みは学業を続けるための大きな支えとなりました。

津波は私の住む町を襲い、多くの人や建物が一気に波にさらわれてしまいました。私がよく知る周辺地域の街も、地域ごとなくなってしまいました。地震発生当時、私は幸運にも実家から少し離れたところにいたため津波に遭うことはありませんでしたが、実家が津波と地震の被害に遭いしばらく親戚の家で避難生活をするようになりました。電気や水道が使えない中、頻繁に起こる地震によって怖くて毎日夜も眠れずにいたことを思い出します。親せきや知人が亡くなったり、危機一髪で助かった人や人づてに当時の様子を耳にするたびに、衝撃と悲しみで言葉を失い、体が硬直していました。しかし家族や親せきと支え合いながら、涙をこらえながら、復旧に向けて毎日朝から夕方まで働きました。食料をはじめ必要な生活物資が手に入らず、困難な生活が続く中、自衛隊や様々なボランティアの方々が救援物資を運んでくださったり、家の片づけを手伝ってくれるなど、多くの人から支援していただいたことは本当にありがたかったです。その中には外国人の方々もいました。私は当時までこんなに人の暖かさを感じたことや人とのつながりを大事に思ったことはありません。それは私だけではなく多くの人が感じたに違いありません。人というのはやはり支え合って生きていかなければならないものと多くの方は確信したと思います。人とのつながりが薄れてきたと言われる現代ですが、私たちはこの震災をきっかけにして、人間関係というものを改めて考えなおす必要があるでしょう。

地震から1年近く経った現在ですが、当時の事を思い出すといろいろな思いが心の中にあらわれ、私自身うまく言葉にできないのが現状です。しかし震災で学んだことは数知れません。私が経験したことを周囲や後世に伝えていくことを課題とし、多くの人への感謝の気持ちを忘れず一步一步前進んでいきたいと思います。

「一陽福来」を信じて

福島県浪江町出身
理学部 匿名

平成23年3月11日に発生した東日本大震災。福島県は、地震、津波で多くの尊い命や財産が失われました。さらに、福島第一原子力発電所の事故により、甚大な被害を被り、親戚・友人の多くが福島県内外へと分散避難しました。安否は確認できたものの、避難生活を繰り返すうちに連絡が取れなくなった人たちもいます。

あの日から間もなく一年が経とうとしています。しかし現在も多くの県民が故郷を離れた避難生活や様々な不安を抱えながらの生活を余儀なくされています。避難先では住宅がまとまっていなかったこともあり、町民同士の交流が難しく孤立を感じ、その不安を少しでも解消するとともに、絆をつないでいくため、まずは顔を合わせる場として交流会が開かれるようになりました。私の家族もその交流会に参加している一組です。そこでは浪江町で余生を過ごそうと決めていた方にもお会いしました。長期化する避難生活、先の見えない不安の中でどのような思いで日々生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか、おのずと話題はふるさとのことで、そこで実家や故郷といった単語を耳にするたびに、帰る場所のあることの大切さを、今回の震災を通じて改めて思い知らされました。

最近では、情報提供や交流の為のサロンを常設されているところも増えており、会を重ねるにつれ「がんばろう！」という気運が湧き上がっているのを感じました。しかし残念なことに、度重なる避難所の移動等によって肉体的・精神的に重大な影響を受け、亡くなられた方が多数いることも交流会で知りました。加えて、事態が長期化することで、震災自体の記憶が風化し始めているのではないかということも感じました。

予期されていなかった事態とはいえ、常に最悪の事態は考慮されてしかるべきです。政府は、その解除や生活再建のロードマップを具体的に示すことが必要だと思いました。それが示されない中で県民の多くは、今後の生活設計を迫られているという厳しい状況に置かれています。災害からの復興・復旧までには長い時間がかかることは間違いありません。私たちも現状に甘んじるばかりではなく、苦難に立ち向かう元気と勇気を持って歩き出さなければいけないと思います。

東日本大震災を受けて

岩手県陸前高田市出身
文学部 匿名

2011年3月11日14:46、私はその時を両親と共に岩手の自宅で迎えました。今でも鮮明に覚えています。大きな地震でしたが特に特別な危機感も抱かず、両親に言われるままに近くの小学校の校庭に避難しました。あの惨事を引き起こす津波が来るとは夢にも思いませんでした。

私と母と途中で合流した祖母は車の中で話をしていましたが、母が外にいる知り合いに声をかけたことがきっかけで、津波が迫ってきていることを知りました。外に出ると、遠くにある堤防の上に水しぶきが見え、波が堤防を越えていることがすぐに確認できました。祖母は膝が悪かったため、母と私で両脇を支えながら山の方へ逃げました。逃げている人達の中では私達が最後でしたが、校庭には津波に気づかず車の中で待機している人が大勢いました。祖母は痛い、痛いと言いながらも精一杯走りましたが、山のふもとに着く頃には波に追いつかれてしまいました。私と母達は二手に分かれ、私は一人で山に向かいました。しかし山に登ろうとした

とき、私の足元に今にも波にのまれそうなご老人がいるのを見つけました。そのご老人の腕を引っ張り、引き上げようとしたのですが、その間に私も首まで波にのまれ流されてしまいました。ご老人は波の中に消えていきました。引き波がきて私は山からどンドン離されていきましたが、幸い流れは遅く、また山のふもとに流れ着きました。先に山の上に逃げていた父が私の名前を呼ぶ声を頼りに自力で山に登りました。すると、投げられたロープにつかまり波から引き上げられている母と、その横で沈んでいく祖母を山の下の方に見つけました。祖母の顔はゆっくりと波の中に消えていきました。私は何が起きているのかすぐには理解できず、ただ茫然としていました。祖母の遺体は約2週間後、その場所で発見されました。

私は今回の震災で、生と死の境が本当に紙一重であることを思い知らされました。小さい頃から一緒だった友人、学生時代の恩師、たくさんの親戚、あの日助けようとしたご老人、車の中で大学合格を祝福してくれた祖母。同じ時間同じ場所で、亡くなった方々と生き残った自分。生き残った意味は何だったのかと、今でも考えることがあります。死をととても身近に感じるようになってから、普段の生活で感じることも変わってきました。一瞬一瞬を強く大切に生きることが、亡くなった方々へしてあげられることなのではないかと考えるようになりました。また、今回のようなときには情報に左右されずに危険を察知することも大切です。絶対安心、はありません。最終的には自分の判断が自分の運命を決めるのです。もしかしたら明日、同じような震災が別の場所で起こるかもしれません。起こらない保障はありません。3月11日の震災で皆さんと変わらずそこに生きていた大勢の方々が命を落としたこと、その中には一瞬の判断次第で助かった命がたくさんあったことを絶対に忘れないでください。そして、亡くなった方々の分まで強く強く生きてください。私はこの震災での記憶が薄れてしまわないように、たくさんの方々に伝えていこうと思います。

東日本大震災で感じたこと

宮城県石巻市出身
工学研究科 匿名

私は昨年起きた東日本大震災から、一日一日を大切に過ごすこと、募金やボランティアなどの支援の重要性、この二つを特に感じました。

・一日一日を大切に過ごす

私は、東日本大震災の影響で家族や親戚こそ亡くさなかったものの、非常に多くのものを失いました。地震後初めて地元石巻に帰った時は、あまりに変わり果てた地元の景色に愕然としました。津波の影響で瓦礫とヘドロまみれの実家を見たとき、建物のほとんどが無くなり瓦礫の壁が永遠に続く海沿いの地区を見たとき、今までは当然のようにそこにある物も、いつかは必ず無くなってしまふことを実感しました。それ以降、私は、何かあった時に後悔しないように、今まで以上に一日一日を大切に過ごすようにしています。

・支援の重要性

今回の震災において、たくさんのボランティアや自衛隊の方々の活動や、募金や配給などの手厚い支援があり、非常に助かったことを覚えています。例えば、私が実家の周りの瓦礫の撤去をしている際には、ボランティアの方々が積極的に手伝ってくれました。また、自衛隊の方々がお風呂を設置して下さったこと、寄付により仮設住宅内の家電が揃えられていること、数えればきりがありますが、これらの支援なくしては、今回の震災を乗り越えられなかったと思います。また、SEEDS 基金など千葉大学の援助により、無事大学院へ進学でき、日々研究に励んでいることを心より感謝します。

今後、もし大災害が起こった場合は、できる限りの支援をしたいと思います。支援してくださった皆様、ありがとうございました。

震災を体験して

岩手県大船渡市出身
工学部 匿名

去年の3月11日、私は千葉にいたので実際に東日本大震災を体験したわけではなかったのですが、実家が大船渡市で家族や親戚が被災地で生活していたということで今回このような文章を書かせていただきました。

地震が起きた時はたしかに千葉もかなり揺れましたが、まさかその時はこのような事態になってしまうとは思っていませんでした。地元は沿岸部にあるということもあり、よく津波警報が出ることもありますが実際に大きな被害が出るような津波は最近起きていなかったのが現場にいた人達もそんなに大きな津波が来るとは思っていなかったそうです。しかし、テレビをつけたときにニュースでは見慣れた街が中継されていて(家や車が津波で流されていてもはや見慣れた光景ではなかったのですが)、大きな衝撃を受けたと同時にものすごい恐怖がこみ上げてきました。その直後に母親から、たった3文字の「逃げた」というメールが届き、少しだけほっとしましたが、それ以降連絡は完全に途絶え、不安な数日間を過ごすことになりました。関東に住んでいる親戚から連絡をいただき、しばらくはその方と連絡を取り合い、情報交換をしながら過ごしていました。

数日後、朝起きてみると見知らぬ番号から一本の不在着信があり胸騒ぎがしました。かけ直すことは出来ずもしこの着信が家族からのものだったら自分はなぜとることが出来なかったのだろうと後悔の気持ちでいっぱいになりました。不安で仕方なかったのでいつもはバイブレーションだけの携帯電話を着信音量最大にして生活していました。その時から着信音にはすごく敏感に反応するようになっていました。半日後くらいに再び知らない番号からの着信がありその時は運良く受けることが出来ました。弟でした。消防署に衛星電話が設置されて、そこに並んで数十秒ずつですが順番に電話をかけることが出来るようになったということでした。当

時は携帯電話が繋がらなかったのではほんの数十秒の電話も衛星電話に数時間並ばなければかけられないという状況が何日も続いたそうです。弟から家族や近い親戚の無事を聞かされ、ほんの数十秒会話出来たというだけでかなり安心して嬉しくて号泣してしまいました。こちらからの連絡は一切出来なかったのもそれからは電話がかかってくるのをとり逃さないように待っていました。

地震が起きてからしばらくは電気や水道は使えない状態が続き、家ではろうそくを立て、水はわざわざ遠くまで汲みに行かなければいけないような生活をしていたそうです。スーパーでもレジは何時間も並ばなければ買えないという状態がしばらく続いたとのことでした。今のこの生活の便利さを知ると当時の被災地での生活はどれほど辛いものだったのか、体験していない私たちには計り知れないものだったのだろうと思います。

去年の夏に震災後初めて実家に戻り目にした光景は想像を絶するものでした。見慣れた建物は跡形もなく消え、どこに何があったのかということすら何も思い出すことができずでした。生まれた時から暮らした住み慣れた土地がそのような姿になってしまったということにすごく悲しい気持ちになりました。しかし、街はそのような姿になってしまっても、地元の人たちは昔と変わらず笑顔で元気に過ごしていたのでこちらが逆に元気づけられてしまうようでした。夏休みは短い期間でしたが復興ボランティアということで、瓦礫撤去作業や個人宅の引っ越しのお手伝いなどもさせていただき良い経験になったと思います。

今回の震災を通して私は人と人とのつながりの大切さや家族の大切さなど普段は当たり前すぎてなかなか気付かなかった様々な大切な気持ちを再確認することができたように思います。起きてしまったことはもう取り返しのつかないことであり、下をむいてばかりでは前に進むことができないと思うのでこの現状はしっかりと受け止めて、学んだことを今後活かして行けたらいいと思っています。

震災が私たちにもたらしたもの

福島県出身
法経学部 鈴木信吾

2011年3月11日、私は所属しているサークルの部屋にいました。友人や先輩と何気なく会話しているときに、東日本大震災は発生しました。揺れ始めた時には特に何も感じませんでしたが、揺れが強くなり、棚から物が落ちたりガラス戸が異常に音を立てたりするのを見て、「これはまずい」と思い、部屋から出ました。しばらくして、震源地が三陸沖と発表され、実家に電話を掛けました。しかし、回線が混雑して、一向につながりませんでした。私の頭の中には最悪の事態が想定されていました。

やがて回線が落ち着きを取り戻したころ、父から電話がありました。食器棚やタンスはぐしゃぐしゃになってしまったが、家自体は大丈夫、と聞いて、とりあえず一安心しました。周辺の様子を聞くと、平屋でない家は大体半壊・全壊し、瓦屋根はみんな瓦が落ちてしまったそう

うです。また、友人からの写真を見ると、断層のできたアスファルトや、大きく波を打っているレンガ敷きの歩道などが写っていました。海から遠く離れた内陸の地にまで、これほど大きな揺れが起こったということに正直驚きました。

今回の震災で、私たちが日頃考えている『安全』というものは実に拙いものなのだ、と感じました。私の住む地域は内陸で地盤も固く、近くで地震が起きても比較的揺れにくい場所だといわれていました。しかし、今回の地震では、揺れの影響をもろに受けました。天災とは思ってもよらないようなときに来るものだと分かっていたのですが、安全だと思っていたのが崩れるのはやはり衝撃的でした。

シェイクスピアの本に『今が最悪の事態だ』と言っている間は、最悪の事態にはなっていない』という有名な言葉があります。「最悪の事態」の想定ができ、対処が可能ならば、災害は防ぐことができるでしょう。しかし、想定できないから最悪の結果をもたらすのであり、だからこそ『天災』なのかもしれません。天災に対して私たちができるもっとも重要なことは、覚悟することなのだと思います。

伝えたいこと

福島県富岡町出身
工学研究科 小暮健人

まずはこの場をお借りして被災学生をご支援してくださったすべての方に厚く御礼申し上げます。皆様からのご支援により現在も大学で勉強することができております。ありがとうございました。

昨年の地震発生時、私は海外にいたため現地のニュースで日本の震災のことを知りました。夜ホテルに戻り、NHKの国際ニュースで太平洋沿岸の津波映像や福島第一原発の水素爆発の映像を見たときのショック、家族に会いに日本に帰りたいけども帰れなかったあのもどかしさを私は一生忘れないと思います。その震災から1年近く経ちますが、私は未だに心のモヤモヤを拭い去ることができていません。実家のある福島県富岡町全域が警戒区域に指定され、許可なしでは立ち入ることが未だ禁止されているためです。桜の名所があることで有名な富岡町でしたが、一時帰宅をした友人の話によると、荒廃した街の状況はまさに「死の街」という表現が相応しいとのことでした。行政による大規模な除染作業が行われることになるとは思いますが、風評被害や偏見の定着により、街が完全に元通りになることはないだろうというのが私の正直な感想です。私の家族や友人を含め、地元住民の避難生活は長期化することが予想されます。地元住民の立場からすれば、災害はまだ終わっていないのです。

そこで千葉大学の皆様に2点ほど伝えたいことがあります。1点目はご支援のことです。地元住民の避難生活は長期化することが予想されるため、彼らを含め福島県に対してどんな形でも構いませんので、継続的な支援を今後もお願い致します。2点目は日本のエネルギーに関す

ることです。今回の原発事故による犠牲を無駄にしないためにも、関東にお住まいの皆様こそ日本のエネルギーに対して関心と自分の考えを持っていただきたいのです。関東圏の電力供給のために福島と新潟に原発があるのはどういうことなのか、普段何気なく使用している電気は何からできていて、今後それはどう変化していくべきなのか、日本の産業や社会、世界的情勢を加味して今一度考えてみてください。考えた結果、原発は必要であるとか、原発は必要ないとか、各々が自分の考えを持って生きていくことが重要なのだと思います。それがフクシマと同じ失敗を防ぎ、日本のエネルギーの未来を創造するための第一歩になるはずですから。

東日本大震災

福島県出身
理学部 佐久間光貴

3月11日、僕は「明日は、入学手続きのために千葉に行く日だ」と千葉大入学に胸を膨らませていました。妹もその日、無事に中学を卒業し、高校生活を楽しみにしており、家族みんなが新しい生活にワクワクしていました。学費を振り込み、母と遅めの昼食をとろうとお店に入りました。ちょうど僕が注文したナポリタンが到着し、「美味しそう」と目を輝かせていた14時46分、地震が起きました。店の奥からはお皿が割れる音。店員さんが「外に出てください!」と叫びました。「少し大きい揺れだけど、どうせすぐおさまるだろう」と思っていた僕はナポリタンに後ろ髪を引かれながら外に出ました。しかし、外に出ても揺れは一向におさまらず、むしろ大きくなっていきました。何かにつかまっていなければ立っている事もままならない揺れの中、周りでは悲鳴や様々な物が崩れる音が聞こえ、家族で抱き合っている人、必死で連絡をとろうと電話をかけている人などが目に入りました。同時に僕がそれまでの抱いていた期待や希望も崩れ去りました。

町並みは一変。瓦屋根の瓦はほとんど落ち、塀は倒れ、建物は倒壊、半壊が多数で被害のないところなどありませんでした。ただただ呆然とするばかりでした。何をどこから考えればいいのかわかりませんでした。

津波と原発事故を除けば、僕の住む福島県須賀川市の東日本大震災による被害は相当なものでした。

震災直後「みんな無事で良かった。生きていてケガがなくて良かった。」家族みんな、周りの人達みんなで心からそう思って喜びました。

でも、現実問題父の会社の建物は半壊、加えて原発の風評被害で旅行会社の仕事は皆無になった。母の会社も倒壊した。かろうじて他の場所での営業ができ、解雇されずに済んだが混乱の中で仕事は思うようにできなくなった。そんな中で僕は大学に、妹は高校に行けるのだろうか…という思いで毎日過ごしていました。

町中が被害に合いライフラインがままならず、大きな余震は頻繁に続き、なにより原発事故で外にも出ることができなくなったこの状況でどうなっていくのか、不安だらけの毎日でした。

震災から間もなく一年が経ちます。

須賀川は、帰るたびに建物が解体され更地が増えていく、福島から出て行く人も多い、父の旅行会社もますます厳しくなるばかりで、今もいろんな面で大変な状況は変わりありません。

それでも、僕は家族、学校、みんなに支えられこうして大学生活を送ることができています。

この震災でたくさん失うものもありましたが、多くのことを学び、得ることもできました。

家族の絆、みなさんからの支援、義援をこんなにありがたく感じたことはありませんでした。人間として大きく変わった一年だったと思います。

僕は震災後、福島がまた「うつくしま福島」に戻れることへの強い思いと、あたたかく見守ってくれる周りの人達への感謝の気持ちを忘れたことはありません。

今は何もできず何の力もない自分に対し歯がゆさを感じますが、自分のすべきことやるべきことをしっかりやる、それが自分にできる最大の支援だと信じています。

いつかどんな形になるかわかりませんが、須賀川の福島の日本のためになることができるよう日々努力していきたいと思っています。

東日本大震災で感じたこと

福島県出身
園芸学部 匿名

3月11日に起こった東日本大震災で、東北地方は様々なものを、多くのものを失くしました。その中で、福島で私が住んでいた相双地区は、普通なら絶対に失くすことができないものを失くすことになりました。それは、故郷です。津波で家屋がなくなっても再び建てることができます。消えた商店街も復興することができます。しかし、私たちはその町に立ち入ることすらできません。行けてもせいぜい数時間です。ただ、TVで映る地元は何も変わっていません。海水浴場も、遊んだ川も山も震災前となんら変わらないのです。そんな変わっていない地元に戻れないことにいらいらしていました。

震災後私の家族は福島を離れ、引っ越すことにしました。両親が色々考慮した上での決断だったので、私は離れたくないという思いを封じることにしました。新学期が始まり大学では、震災のことをネタにしたり笑ったり、他の人に心配をかけないように気を使ったりもしました。そんなことをしているうちに、自分の中で色々溜めこんでしまい精神的にだんだんきつくなっていました。

そのときに、加入している大学のサークルの先輩や友人がそんな私に気付いてくれ、何回も何回も話を聞いてくれました。ある友人は私のために様々な人を紹介してくれたりして、本当に心が楽になったのを覚えています。何もお返しすることができないのに、自分から進んで話を聞いてくれたり時間をさいてくれたりしてくれる人たちと、この大学で出会えたことは大げさにではなく、本当に宝物だと思いました。今でも感謝しきれるものではありません。

また成人式で同郷の友人たちと会ったときには、同じような状況の人も居たり、就職している友人は、自分なりに考えて福島のためとって一生懸命働いているということを知りたりして、本当に尊敬できる友人に出会えていたことを嬉しく思いました。

他にも、国や東電よりも早く個人的に家を貸してくれたり、小さい団体ながらも迅速に援助をして下さった方々、分からないことを色々教えて下さった地域の方々には本当に感謝しています。

震災でたくさんのことを失くしました。そして返ってくることもないと思います。でも人の優しさがこんなにも暖かいということを知ることができました。次はその方たちに、返していなくてはならないと思います。そのために、前を向いて一步一步進んでいこうと思います。

今私にできる事

宮城県石巻市出身
教育学部 横江和樹

私の出身地は宮城県の東部沿岸に位置する石巻市雄勝町であり、震災以前は硯の生産日本一、わかめ・ほや・カキ・銀鮭・ホタテの養殖などの漁業が盛んな小さな町でした。

私の家族は震災当日それぞれバラバラの場所で被災することとなりました。父は雄勝町の隣の町、多くの児童が犠牲となった大川小学校の近くの店で、母と祖母は実家がある雄勝町立浜で、妹の1人は仕事先である雄勝町船越の海の近くの職場で、もう1人の妹は石巻市門脇にある自動車学校にいる時に大地震に襲われました。

父は地震で揺れているにも関わらず、ただ事ではないと察しすぐさま車で実家へ戻り、母と祖母もただの地震ではないと感じ津波を意識しすぐさま近くの高台へ逃げたそうです。妹は丁度その日車を使う仕事を行っていたため津波を警戒し車で近くの高台へ、もう1人の妹は自動車の路上教習中であつたが教官に運転を代わってもらい高台にある自動車学校へ避難し命だけは助かりました。

しかし、津波によりほとんどの家が流されてしまったため、立浜の住民は、唯一無事であつた龍澤寺と末永さん宅に分かれそれぞれ10~20名で避難所へ移動するまでの9日間、共同生活を行うこととなりました。地震当日はとても寒く雪が降るほどであつたそうで、電気もつかなくなり日が落ちるとあたりは真っ暗になったといひます。そんな暗闇の中、波に流された建物同士がぶつかり合い騒音が辺りに鳴り響く、そしてその騒音の間に「助けて！」と叫ぶ声が一晩中聞こえたといひます。しかし、暗くてあたりは見えないし助けることは出来ない。父も「あれが一番つらかつた」と語っていました。水は山の沸き水を使い、燃料は瓦礫、食べ物はもともと田舎という地域柄であつたため冷凍庫などにストックしている家が多く、それらを持ちより生活をしたといひます。

妹は避難所となつた大須中学校へ移り、そこで避難所運営のボランティアを行つたそうです。もう1人の妹は、自動車学校で数日間過ごした後、従兄弟に迎えに来てもらい母親の実家へと

場所を移しました。こうした生活を終え、一旦立浜を離れ避難所となった小学校で約 140 日の避難生活を送り、立浜に仮設住宅が建設されたため再び戻ることとなりました。

現在は、ホタテの養殖業を復興させようと日々復興活動を行っており、先日、震災後初となるわかめの収穫が行われました。ホタテの養殖に関しても第一号の稚貝が海に投入されたそうです。また立浜地区では「さんりく海の幸支援制度」という一口オーナー制のプロジェクトが漁師たちによって進められており、支援者を募集しております。

今回、この東日本大震災に関する原稿を依頼された時は正直どうしようか迷いました。しかし、「被災者の生の声」ということで震災を風化させないということに少しでも協力できたらと思い執筆いたしました。

私は、来年度より石巻市役所に就職することが決まり、地元に戻ります。無事に就職することができたのも、学生支援金による援助があったからであり、支援者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

これを読んでいただき、少しでもみなさんに被災地の事、石巻市の事、雄勝町の事に興味を持っていただくことが、私に今できる事でありこれが大好きな地元の復興に繋がると信じております。

3.11 に寄せて

福島県出身
文学部 匿名

あの日からもうすぐ1年が経過しようとしている。現在私の暮らす東京圏は、度重なる震度3クラスの地震や噂される首都直下型地震に怯えつつも、「正常」に機能し、明日も同じ平和な日常が来ることを信じて疑わない。

あの日とはなんだっただろう。臭いものに蓋をするように、当時の状況や現在の事実からは目を背けられ、あるいは美化され、感動的な話に仕立て上げられ、輪郭がぼやけて掴めない。それを象徴するのが2011年内に出された「原発事故収束宣言」であろう。震災は終わっていないし、復興が始まってさえいない現場もあるというのに、だ。また一日は平凡に過ぎていき、そんな時の流れに私も身を置いている。

たまに、地元市役所のHPを開く。トップページに並ぶ災害関連情報、放射線マップや除染計画などの文字を目にすると、ふと現実に呼び戻される感覚になる。震災が現実味を帯びてくる。自分が通った小中学校や、日々友人と遊んだ公園が、自宅の庭先が、関東でホットスポットと呼ばれるところよりも高い数値を現わす。それが危険なのかどうかの判断は個人に任せられ、多くの方はそこで普通に生活を再開している。おそろしいのは目に見えないことだろう。実体がなくまだよくわからないモノについて、信憑性の欠ける膨大な情報に人々の生活は振り回される。避難したり、外での活動を控えたり、逆に安全さをアピールしたり、それに対して

同情されたり非難を受けたりする。どの行為にも悪意はなく、根本的に間違っていない。しかし正しいともいえない。私たちは、正解のない問題を突きつけられている。

“Think globally, act locally”というフレーズが流行ったけれども、これに“Feel personally”と付け加えた人がいて、つまり、実感できるものでないと関心が及ばない、ということだ。意思決定機能を持つ首都圏と被災地はまず物理的に隔たりがあり、直接の関連が薄い(と感じるだろう)。さらに震災から日が経つにつれ、心理的隔たりも拡大を続けている。人々の関心はもっと身近なところへと移っていく。わたしだってそうだ。申し訳ないけれども、例えば津波被害を受けた人々の今後を親身になって考え続ける、そこまでは思いが至らない。復興を見守っていきたいという気持ちはあるが、私が本質的に問題を「わかる」には膨大な時間が必要で、中途半端な同情を彼らは必要としているのだろうか、と考えてしまう。しかし、わかろうと努力することは大切だと思う。

正直、首都圏で暮らす人々は、「震災」「復興」「がんばろう日本」といった数々の言葉を聞き飽きているのではないだろうか。いまの自分の生活に直接的には関わりのない話だ、私はそれも仕方がないと思っている。だが、少し想像力をはたらかせてほしい。不可抗力で自分の築いてきた居場所が破壊されてしまったらどうか。大切な人々と離れて暮らさざるを得なくなったら。毎日とは言わない、ときどき被災地を思い出してくれるだけでいい。ただ私は、被災地をまなざす視線が途絶えるのがおそろしい。

大震災を体験して

岩手県出身
工学部 匿名

東日本大震災が起こった3月11日のあの日、私は両親の住んでいた岩手県の沿岸部にいました。揺れの後、私と母は高台に避難し、津波に飲まれることなく無事でした。後に仕事場だった父とも再会でき、家はだめになりましたが、家族は無事でした。

あれから数カ月経ち、私は千葉で震災前と変わらない生活をしています。そのせいか、あの津波で沢山の方が亡くなり、沢山の方が家をなくし、住んでいた地域が壊滅状態になってしまった事実を、まだ受け止めきれないような気がします。

私が避難所で過ごした期間は約一週間でした。余震の中父の安否もわからず、情報もなく、食糧も満足にない初めの数日間は不安でいっぱいでした。2・3日すると、自衛隊の給水車が来、全国からの支援物資が届くようになりました。その頃には電気も使えるようになり、私たちが住んでいる地域の現状や、東日本全体の現状を、メディアを通して知ることができました。

避難所では、家を流されてしまった人、家族を亡くした人、家族の安否がわからない人達が沢山いました。その中で、比較的早い段階で家族の無事を確認できた私はとても恵まれていたと思います。

この震災で沢山の人が亡くなりました。近くの中学校などが、遺体安置所になっていました。私の家があった場所の隣の川でも、亡くなった方が発見されたそうです。言葉では言い表せないほど悲惨でした。

家族や友人、大切な人を亡くされた人のことを考えると、言葉ができません。私はこの体験記を書くにあたり、何を書けばよいのか考えましたが、私より辛い思いをされている方の事を考えると、何を書いていいのかわからなくなりました。

私の両親は、今現在津波の被害にあった地域の隣町に住んでいます。父の職場の方のご厚意で、その方の家を貸していただいています。私は震災後、夏休みや冬休みに帰省しましたが、震災前住んでいた地域には、行くことができませんでした。正直、見たくありませんでした。見るには辛すぎました。

もうすぐ震災から一年が経ちます。日常が突然壊れる恐ろしさは、忘れることができません。毎日が充実しているほど、それが突然壊れてしまうのではないかと、という不安に駆られます。

震災後、沢山の支援をいただきました。私は大学に戻ることは不可能かと思っていたので、本当に感謝しています。

今、被災地では、職を失くした方が大勢います。元の町に戻るように、復興を頑張っている方が沢山います。辛い経験を乗り越えようと、頑張っている方が沢山います。本当に大変なのは、これからです。このような人達がいることを、忘れないでいてほしいです。私自身も、前に進めるよう頑張らなければならないと思っています。最後に、色々な支援をしてくださって、ありがとうございます。

震災を経験して

福島県出身
教育学研究科 橋本綾香

「過去と相手は変えられない。未来と自分は変えられる。」それが父の口癖でした。あの日から間もなく1年になろうとしています。この言葉が身に沁みるようになってきました。

この1年間、月に1度のペースで実家に帰省していました。出来る限り、家族の力になりたいと考えたからです。話を聞くことで気持ちが和らぐなら、という気持ちを持っていました。またボランティアとして、卒業した学校で生徒に対する学習支援を行ったり、時には相談に乗ったりもしました。実感できたこととしては「考え方がとにかく前向き」ということ、そして「皆で支え合って生活している」ということです。風評被害もあり、世界中からもマスコミからもバッシングの嵐を受けたにも関わらず、常に前向きで明るくて地域ぐるみでの支え合いができていく県は他にないと実感しています。

千葉に引っ越してから被災したのですが、戸籍を福島に残していたので、一時期は私自身も病院の受診を拒否されたことがありました。また、川内村で製作された花火の打ち上げの拒否や、他県ががれき処分の受け入れ拒否のニュースも立て続きにおき「福島」の住民が加害者に

なっているかのような扱いを受け、怒りと悲しみが込み上げました。そのときに何もできなかった自分に恥じらいも覚えました。

「何か自分に出来ることはないだろうか」この寄稿の依頼を頂いたとき、「形に残して後世に伝える」ことも今の私にできることの1つ、と考えました。首都圏直下型大地震も予測されている現在ですが、この東日本大震災で多くの教訓を与えてくれたことは間違いありません。避難訓練に積極的に参加する住民が増えたこと、マニュアルの改正に着手した企業が増えたこと、これらは大きな進歩だと思います。ただ、「自分たちさえ何とかなればいい」という感じが拭い切れていないのも事実です。もっと地域ぐるみで対策を考えることが出来ないものか、ともどかしく感じます。近所とのコミュニケーション不足が心配されますが、1年という区切りを迎えるにあたって地域内のコミュニケーションを見つめ直す必要があるように思います。それが「首都圏崩壊」の未来を変える一歩になるのではと考えています。

被災者枠での授業料免除の制限が厳しくなったこともあり、「一部損壊」の私は申請することができません。家だけではなく土台や瓦、家電や車など、多くのものへの出費が重なりました。金銭的な支援はもちろんですが、今回の地震で精神的なストレスを軽減させるための取り組みや人材の派遣、そして何より「日本全体で東北を支えてほしい」と思っています。国民一人一人の意識改革が求められているのかもしれない。

短い文章ではありますが、少しでもお力沿い出来ていれば幸いです。今後も長期的な支え合いが広がっていくことを期待しています。

東日本大震災を受けて考えて欲しいこと

岩手県陸前高田市出身
匿名

東日本大震災で私の故郷と生家は大変な被害を受けました。私の故郷である陸前高田市は特に被害が大きく中心部である高田町は山間の地区を除きほぼ全滅と言っていいほどです。震災から早くも1年が経とうとしていますが未だに心のどこかに穴が開いてしまっているような気持ちがあります。あちこちに仮設の店舗は出来ているものの市街地の復興は全くと言っていいほど進んでいません。この先地元がまた賑わう日が来るのかも分からない状態です。

今回の震災を受けて被災地以外の人も思うところがあると思いますが、私は第一に伝えたいことがあります。それは震災で起こった様々な出来事を他人事だと思わないでほしいということです。今回の震災の規模は誰もが想像もしなかったまさに「想定外」の出来事だったと思います。事実、陸前高田市の被害は市の想定を遙かに上回るものでした。浸水区域に指定されていない地域だけではなく指定された避難所だったのに津波に吞まれてしまった場所もあります。厳しい言い方をすれば人々の「市が指定しているのだからここは安全だろう」「自分は大丈夫だろう」という認識の多さが犠牲者の数につながったとも言えると思います。

震災を受けて私自身もいわゆる「大災害」と自分は無縁だろうという認識を改めさせられる

ことになりました。そしてこれは東北に限った話では決してありません。東京では首都直下地震が近いうちに起こると言われていますし、東海、東南海、南海地震が連動して東日本大震災並の地震が発生する可能性もあります。3月11日テレビから映像を見ているだけだった人が被災者にならないとは限らないのです。今後災害が起こったときのために今回の震災をただの出来事ではなく教訓にして欲しいと私は強く思います。私の考えを強くしたのは市の津波浸水区域が変更された時のある市民の反応です。あれだけの規模の津波が発生したにも関わらず「ここまで津波が来るなんて信じられない」と応えた市民の反応に私は衝撃を受けました。「ここまでなら大丈夫」「自分に限って死ぬなんてあり得ない」という考えは捨てて欲しいのです。

時間が経つにつれ被災地の現状などについて他県の人々の関心がなくなっていくのは仕方ないことだと思います。しかし震災で得た教訓は絶対に風化させて欲しくないと思います。そういった意味で今回の震災は誰にとっても他人事ではないのです。それを覚えていて欲しいと思います。

次に、今回の震災における様々な人からの支援についてです。地震が起きてから千葉に戻るまでの1ヶ月間私は避難生活を送ることとなりました。ライフラインが遮断された状態での生活を強いられましたが、その間全国から様々な形で支援を受けることとなりました。自衛隊の方だけでなく民間からも水や食料、生活必需品が送られ、そのおかげで私の家族は大きな苦労もなく生活を送ることが出来ました。物資の搬送元を見ると西日本から送られてきたものも多く人の温かみを強く感じました。支援してくださった人には本当に感謝したいと思っています。

最後に、被災地では苦しい現状を送っている人もまだまだいるのだということを忘れないでください。被災地から離れて東京に出てみれば普段と変わらない光景が広がっています。そこで生活していると震災のことなど嘘のように感じますが、被災地ではまだまだ深刻な状態が続いているのです。そこは覚えておいてください。

災害は他人事ではありません。被災地以外の人でも今回の震災で多くのことを学んで欲しいと私は思います。

東日本大震災を経て

福島県浪江町出身
理学研究科 匿名

未曾有の大震災が日本を襲い、もうすぐ一年が経とうとしています。メディアや人々の会話から震災の話題はほとんどなくなり、日本が落ち着きを取り戻してきたように思います。

今回、このような寄稿の機会を頂きましたが、私の中で未だに様々な思いが整理しきれていない部分があり、何をどのように書こうか悩んでおりました。しかし、一被災者として実際に見聞き体験したこと、感じたことを率直に伝えることで、震災についてありのままを知っていただけたらと思っています。

東日本大震災で、私の出身地である福島県浪江町は地震・津波・原発の三重の被害を受けま

した。震災当日、私は千葉にいたため直接被災はしておらず、幸運にも家族も全員無事でしたが、自宅は津波で流失し、多くの知り合いを亡くしました。

震災当時、私の祖母と高校生の妹は浪江町の自宅で地震に見舞われましたが、地震後津波がくるといふ考えはなく、余震や地割れを心配し木陰で待機しているところを、運よく近所の方の車が通り「乗れ!」と言われ訳もわからぬまま同行し、そのおかげで津波を逃れました。その後は津波、さらには原発が爆発したためなるべく遠くに避難するようとの指示があり、地震後七日間で五カ所の避難場所をバスや知り合いの車に同乗させて頂き転々と移動したそうです。

避難中、テレビなどでも救援物資の不足や原発周辺の避難民へ物資が届かないことが取り上げられていましたが、祖母や妹も例外ではなく、最初の三日間ほどは三人で一日一個白いおにぎりが配られ、それを祖母と妹、避難先で合流できた叔母の三人で譲り合いながら食べていたそうです。四日目に塩味のついたお煎餅をいただいたときは涙が出るほどうれしかったと妹は言っていました。また、妹は自宅で地震に見舞われた際、抜け落ちた天井を頭からかぶり全身ゴミまみれのまま七日間お風呂に入れなかったこと、さらに避難中寒かったことが原因で風邪をひき、熱を出し寝込んでしまったこともあり、本当に悲惨な避難生活だったようです。

その後、家族の避難所生活も無事終わり、私も普段の生活を送っておりますが、特に震災当初はどこかで現実を信じきれず、またどうしようもない現実に少し気持ちが不安定になってしまいうこともありました。「あの家は、もうどこにもないんだ」「あの自然に囲まれた大好きな景色はどこにもないんだ」「写真も思い出のモノも、もうないんだ」とふとした時に思い、しかし、感覚としては家の絨毯の感触からドアの閉まる音まで、全てが鮮明に思い出され、半ば信じられないような自分に言い聞かせるような、自分でもよく分からない状態でした。また、「親戚や友達の家族がどのように津波にのまれたのだろう」、「そのとき何を思ったのだろうか」「もしかしたら生きていて誰もいない町で助けを探していたかもしれない。原発さえなければ…」などと考えてしまうと、おかしくなってしまうようでした。

現在は、高校生の妹は東京都内の高校に転学して私と共に関東で生活し、他の家族は福島県内の借り上げ住宅で生活を送っております。当初は、住むところはもちろんほとんどすべてのモノを失い途方にくれておりましたが、多くの方のご支援のお陰で、現在は不自由のない生活を送ることができつつあります。そればかりか、私自身も家族もこの震災をきっかけにたくさんの方々の思いやりに触れ、また家族や親戚、友人との絆を実感し、温かい心や前向きに生きていく気持ちを与えて頂きました。今、このように笑いながら明るく過ごしていただけるのも、皆様のお陰です。書面になってしまいますが、この場をお借りし、友人、先生方、大学関係者の方々、その他多くのご支援いただいた方々に心から感謝申し上げます。

しかし、被災者の戦いはこれからも続きます。原発被災者に関しては、原発が完全に収束すること。今後いつ帰れるのか、帰れないのか。どちらにしても私たちはどのような未来を築いていくのがより良いのか。多くの避難者は先が分からない状態です。また警戒区域内の状態は、

津波被害のあった場所は家が立っていた場所が分からないほど雑草が生い茂り、津波被害のない場所は地震のあとがそのままなのはもちろん、動物の糞や死骸で悲惨な状態です。また、震災で家族や大切な人を失った方々の心の傷は、私には察しきれないほど、とても大きく深いものだと考えます。

震災から一年が経ち、世間ではあまり震災について騒がれなくなりましたが、このような現状があることを心のどこかに留め、震災を風化させないで頂きたいです。

最後になりましたが、このような貴重な寄稿の機会を頂き有難うございました。駄文ではありますが、寄稿を通し、震災について、被災者の思いについて、一人でも多くの方の何か参考になれるものがあれば幸いです。

皆様に頂いたご支援を胸に、今後も前向きに希望を持ち、皆さまと共に復興のためにできることをしていけたらと望んでおります。

臆病者

宮城県気仙沼市出身
理学部 匿名

大学生生活3度目の引っ越しもひと段落した矢先だった。

あの日の空はよく晴れていて、新しい生活に向けての活気が、西千葉を包んでいた。

穏やかで、風が気持ちよかったのを覚えている。

突如として日本を襲った大きな災害は、この穏やかな日に、平和な日本に、光の射した未来に、そこに生きていた人々に、容易には拭えない、消すことは出来ないかもしれない傷跡を残した。

現状、この災害が引き起こした問題には解決されていないものが多い。

政治にも科学技術にも混乱を呼び、そして新たな問題に派生していく一方に思える。

枝分かれした問題に気を取られ、大震災の恐ろしさや傷跡、被災地の人々の思い、亡くなられた方々への祈り、そういった、先の問題解決には至らないであろうが大切にしていかなければならないことが、少しずつ風化しているようで、正直悲しい。

たった1年で、関心は薄れてしまう。事実である。

しかし、忘れまい、と。こうして、私達被災地出身者やボランティア活動をしてくれた学生の想いを、形に残す機会を与えてくださった大学関係者の方々に、此処で御礼を申し上げる。

震災について感じたこと、がテーマであるが、正直に言えば当時は混乱の最中、日々を生きることに精一杯だった。私自身は、冒頭にも書いたように、西千葉にいたので、地元気仙沼の様子をテレビで眺めていることしか出来なかった。港にオイルが流れ出し、赤い炎に包まれ燃え続ける故郷を、ただ、眺めることしか出来なかった。

(自分は此処で何をしているのだろう。)

そう思う日々が続いた。しかし、だからと言って、地元に戻る勇気もなかった。変わり果てた姿は容易に想像できたが、認めたくなかったのか、怖かったのか、いずれにせよ、地元に戻ったら大学をやめてしまうだろうと思った。この出来事はあまりにも衝撃的で、私の心には、希望という言葉は重すぎた。

家族とも連絡が取れなかった。何よりも心配だったのが、家族である。震災は昼過ぎだったので、妹と弟、姉と母、それに義父は、皆ばらばらだったのだ。結果的に、私の家族に不幸はなかった。しかし2週間、家族と連絡が取れない不安。自分の中に根付く家族の繋がりを、思い知らされた。

他にも感じることはあった。しかし淡々と此処に綴るだけの余裕もなければ、心の整理も疎かにしているような今、全てを書くことは出来ない。友人の死を知って後、他の友人の生存確認もやめてしまったまま。実家はすでに全壊して家族は仙台に移ったため、実のところ気仙沼には震災以降一度も帰っていない。心の整理は、まだつけられていない。

足早にまとめさせていただくが、震災があつて今、確かに感じることは、他人との繋がり、その温もり。人は弱い。心は弱い。しかし、家族、友人、仲間。繋がりを知り信じられる時、いくらでも強くなれるのだ、と。

辛く悲しい出来事ではあつたが、繋がりを信じて生きていこうと、そう思わせてくれたのも、震災であつた。私は、この出来事を決して悲観したりはしない。嘆きより祈りを、怒りより行動を。そして悲しむ時は悲しみ、喜べることを心から喜ぶ。自分は、ありのままに生きていくしかないのだ、と。自分らしく、そして環境のせいにする事なく。

現地の悲しみ、辛さを私の文章では伝えることは出来ない。私は被災地に行けなかった臆病者であるから。読み返してみれば、震災の恐ろしさや脅威についてもあまり触れていない。自身が潰れてしまうのを恐れて、触れることを拒んできたから。

しかし此処では、あくまで私自身が、この震災について感じたことを書かせていただいた。こうして考えや想いを文面に起こす機会を得たことによって、幾らか、心の整理もついてきたように思う。

今はまだ、自分にも力がなく、学び勤しむことしか出来ない。
しかしいつか、友人たちと、気仙沼で酒を飲みたい。心からそう願う。

大震災を体験して

宮城県出身
文学部 匿名

実家・父親の会社が被災しましたが、それでも無事に大学に通えている自分はとても幸せだと思います。大災害を間近で目の当たりにして、金銭的な面で苦しむ人を多く見てきました。我が家もそのうちの一つですが、大学からの援助があってとても助かりました。

被災地に関して暗いニュースがまだまだ多いですが、確実に復興は進んでいると感じています。その中で、被災者である私もこれから何ができるのかを考えながら学生生活を送ろうと思います。ありがとうございました。

ボランティア活動を通じて

大学が災害ボランティア活動に企画し、 学生が参加することの意義

普遍教育センター

白川 優治

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に未曾有の被害をもたらした。およそ1年が経過しようとする本稿執筆時において、15,854名の死者と3,203名の行方不明者をもたらしている（2012年3月8日現在）。被災地域は、過去類例のない広範囲に及び、千葉県もその一地域となった。千葉大学も被災地にある大学のひとつである。

この大災害の発生以降、大学生を含む、多くの人たちが、被災地域での救援、復旧、復興のための様々なボランティア活動に参加してきた。現在も参加している。また、多くの大学のボランティアセンターが大学の企画としてボランティア活動を展開し、被災地支援に積極的に取り組んできた。震災発生直後、文部科学副大臣名による文科省通知「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について（通知）」（平成23年4月1日）において、被災地支援のためのボランティア活動が推奨されたこともあり、大学及び大学生によるボランティア活動に注目が集まり、文科省通知に対して賛否両論の議論がなされた。

それでは、大学がその在学学生を対象とするボランティア活動を企画し、特に災害ボランティア活動に取り組むことにはどのような意味があるのでしょうか。そこには、被災地支援という直接的で純粋で人間的な動機と効果、そして具体的な貢献だけでなく、その学生がその活動を経験することによってもたらされる別の意義と効果が付随的に存在する。また、その効果が存在することからこそ、大学がボランティア活動を企画・実施することができる。そこで、本稿は、大学が災害ボランティア活動を企画・立案することと、大学生が災害ボランティアに参加することの意味を考えるために、(1)大学におけるボランティア活動の位置付けを整理し、(2)「災害ボランティア」の特殊性と大学が「災害ボランティア」を企画する意味を検討した上で、(3)千葉大学の取り組みから見た災害ボランティアを大学が企画し、学生が参加する意義について検討する。そして、これらのことを通じて、今後、千葉大学は被災地支援ボランティア活動にどのように向き合うべきなのか、それがどのような意義をもつのかについて考えてみたい。

1. 大学におけるボランティア活動の位置付け

まず、ボランティア活動は、大学においてどのように位置づけられてきたのだろうか。ボランティア活動が、自発性・無償性を意味する「ボランティア」と具体的体験・実働を意味する「活動」を組み合わせた語であることに象徴されるように、自発的な具体的活動が一般的に想定される。そのため、大学をはじめとする教育機関がその活動を位置づけるとき、例えば、その活動に「単位を付与する」というときには賛否が分かれることになる。自発性、無償性をその語意に有するにもかかわらず、活動者が利益を得ること、利益のための活動となる可能性を持つことに対して批判が生じるためである。このことは、災害ボランティアに限らず、さまざまな地域ボランティアにも共通する。

しかし、他方で、近年、「ボランティア」は大学教育に積極的に位置づけられてきた。例えば、文部科学省の調査によれば「学部段階においてボランティア活動を取り入れた授業科目を開講している大学」は 44.0% (322/731 大学)、「学部段階でボランティアに関する講義科目を開講している大学」は 32.7% (239/731 大学) みられる (文部科学省 2011)。このようにボランティアを授業科目とする大学は増加傾向にある。

このことは、大学教育改革の動向と無縁ではない。近年、大学に対しては、その卒業生が身につけるべき能力として、経済産業省の社会人基礎力 (2006 年)、文科省の学士力 (2008 年) などが提示してきた。これらの能力概念は、コミュニケーション力に代表されるような具体的な技能・スキルなどの総称であり、大学卒業生に対して、専門的学識のみでなく汎用的能力を習得することを要請するものである。このようななか、大学教育には、知識を習得する学習と異なるタイプの具体的な経験や活動をその内容に組み込んだ学習、具体的には、アクティブラーニング、サービスマーケティング、インターンシップ、コーオプ教育、PBL (Project Based Learning/Program Based Learning・課題解決学習)、共同学習などが、正規の教育課程 (授業) として組み入れられてきたのである。ボランティアが授業科目に組み込まれ、大学教育に積極的に位置づけられていることはこのような背景による。

それでは、このような、学生の具体的な経験や活動をその授業内容に組み込んだ学生参加による各種プログラムにはどのようなことが共通するのであろうか。それは、「経験学習」として、学生の活動や経験を教育的効果を持った意図的な教育プログラムとして組み立てることで授業を設計することにある。具体的には、①事前学習 (動機/目的)、②具体的活動と中間的振り返り・共有 (活動と気づき)、③事後学習 (整理/省察)、④活動報告 (共有/省察) を一貫したプログラムとして設計することにより、さまざまな活動を、反省的実践を通じた学習過程として位置付けるものである (図 1)。

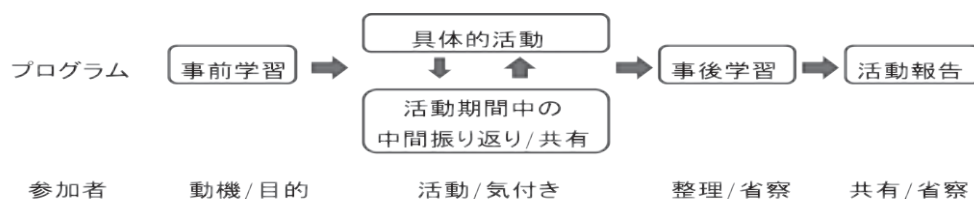


図 1 具体的活動に基づく教育プログラム

このような経験学習は、具体的活動を通じて得た、成功もしくは失敗、自信や後悔、協力や葛藤などの経験を、他の参加者と共有することを通じて相対化することで、自らの成長につなげていくことがその基本的な考え方として存在する。このような経験学習の基本的枠組みは、正規の授業に限らず、授業外のさまざまな活動を、教育効果をもつ活動としてプログラム化することを可能とする。ボランティア活動についても、事前・事後学習を含めて教育効果をもつプログラムとして整理することができる。

このことは、大学が教育機関としてボランティア活動を企画・実施する際に、重要な意味をもつ。なぜなら、自主的・無償性を基盤とするボランティア活動を、教育機関としての大学が組織的に展開することに積極的な意味をもたせることができるためである。つまり、大学がボランティア活動を推進するためには、個人の自主的活動であることを超えて、NPO 団体等の他の団体にはない、大学が行うことの意義が必要となる。その一つの理由には、大学による社会貢献がある。他方で、他者の役に立つという直接的で具体的貢献だけでなく、その活動を通じて参加者が成長することを、意図的、自覚的に活動者にもたらし、教育機関である大学がボランティア活動を推進する重要な理由となる。このことを、ボランティア活動の教育的効果と呼ぶことができる。

2. 災害ボランティア活動の特殊性と大学が「災害ボランティア」活動を企画する意味

ボランティア活動に教育的効果を考えることができるとしても、各種のボランティア活動のうち災害ボランティアは極めて特殊な意味を持っている。なぜならば、ボランティア活動を、経験学習の枠組みに位置づけることは、その活動の教育的効果を前提としたうえで計画される、意図的な「学び」の機会として位置付けられることを意味するためである。このことは、教育機関としての大学がボランティア活動を推進することは、教育的プログラムとして自覚的に意図的に位置づけられていることを含意する。

しかし、災害ボランティアは大学が意図的に設計できるものではない。災害の発生、そしてその災害被災地の救援・復旧を支援する活動が、いつどこで必要となるかを予測することはできないためである。また、被災地支援のための活動は、災害発生から復旧・復興までの過程により被災地域のニーズは変化し続ける。具体的には、災害発生直後の救援段階、一定時間経過後の復旧・復興段階、平常時に戻るために段階によって、被災地域が必要とする活動は異なる。したがって、その活動を事前に計画し、その教育的効果を前提に組織的なプログラムに位置づけることは困難である。

このように、計画することが困難である非意図的な活動であり、時間経過のなかで具体的に求められる活動内容が大きく変化する災害ボランティア活動は、教育機関としての大学が意図的・計画的な教育効果を有する活動として準備することは難しい。それでは、大学が災害ボランティア活動を企画することにはどのような意味があるのであろうか。ここでは、大学がその在学生に対して被災地支援機会を提供することの意味を指摘したい。

大学にはきわめて多様な大学生が学んでいる。例えば、大学 1 年生は未成年が多く、多

くの場合、保護者の庇護のもとにある。上級生になれば成年に達するとともに、またそれまでの大学生活のなかでの経験により、社会的・人間的に大きな成長を得ている学生も多い。また、自分の意思でさまざまな行動に積極的に取り組む学生もあれば、自発性は欠きながら何らかのきっかけがあれば行動を起こすことができる学生もある。現代の大学生は極めて多様である。今回の東日本大震災での被災地支援ボランティアに参加した学生を、このような前提で考えるとき、積極的に自発的な問題意識を持つ学生は、自らの責任と判断により、災害発生直後から各種 NPO 団体等が企画する被災地支援ボランティア活動に参加したであろう。そのような積極性をもつ学生を「強い学生」と称すれば、その行動力を積極的に評価されるべきである。

しかし、全ての学生がこのような「強い学生」であるわけではない。例えば、震災発生後、「何かしたい」と思いながら、見聞きしたことがない団体の活動に一人で参加することには躊躇を覚えた学生、そのような活動に参加することを保護者から止められた学生もあるかもしれない。ボランティア活動に参加することに恥ずかしさを感じ、行動に移すことを躊躇した学生もあるかもしれない。このような学生を、ここでは対比的に「強くない学生」と称するならば、10代後半から20代前半にかけての多様な学生が在籍する現代日本の大学において、「強くない学生」はむしろ「普通の学生」であろう。このことは、例えば、4000人程度の回答を得て行われた大学生調査において、過去1年間のうちにボランティア活動を経験したことがない学生が回答者の4分の3を占めていることから類推できる(山田代表 2008)。このような「強くない学生」の中には、「大学が」企画する災害ボランティア企画「であれば」、安心して参加できると考えた学生(または、保護者に参加を認められた学生)もあるだろう。自らが所属する大学への信頼を背景に、自分の思いを実現するきっかけを見つけたときに、一歩踏み出して行動することができることは「強い」。「普通の学生」が、その「強さ」を発揮する機会を大学が提供することは、学生が在籍する大学でなければできない重要な役割となるのである。

3. 千葉大学の取り組みから見た大学が災害ボランティアを企画し、それに参加する意義

千葉大学は、東日本大震災発生後、ボランティア活動支援センターを創設し、在学生・教職員のボランティア活動を支援してきた。同センターは、設立当初から学生・教職員に対して、登録制により大学の経費負担による「ボランティア保険」を提供するとともに、各種 NPO 団体等による各種の被災地支援ボランティアプログラムの情報を提供し、ボランティア団体関係者等の学内講演会等を主催し、被災地域の現状を伝えるための諸活動に取り組んできた。さらに、2011年8月、9月にはボランティア活動支援センターが主催するボランティアツアーを実施し、宮城県内の被災地域への具体的支援活動を実施している。さらに、2012年以降は、福島県の実験避難学校支援を中心に活動している。

ここでは、2011年8月と9月に、ボランティア支援センターが主催した2回のボランティアツアーへの参加学生の「振り返り」を参考にしながら、大学が災害ボランティアを企

画することの意義と学生がそれに参加することの意義を考えてみたい。

まず、振り返りのシートをもとに参加学生がどのような意図・目的により支援活動に参加したのかをみると、「被災地を自分の目でみたい」「地震の後から復興のために何かしたいと思っていた」とする意見が複数見られた。これは、直接自分で被災地域を見たいという希望をもちながら、その機会を得られなかったことを示唆している。このことは、企画に参加した学生の多くが、その機会を待っていたことを意味している。

さらに、活動を通じた気づきとしては、「自分の活動は一部でしかない途方もない作業」「個人のニーズに対応するためにはまだまだボランティアが必要」とする意見が見られた。実際に活動して初めてわかることもあり、また、自分一人の力の限界と、それでもその活動に関わることの意義を考えることに繋がっていることがわかる。

そして、自分自身が今後の取り組みたいこととしては、「見たこと、感じたこと、被災地の現状を伝える」「周囲にボランティア活動を勧める」「次のボランティアをするために勉強する」「次のボランティアをするためにバイトをして資金を貯める」「帰ってきてしまうと何もできないといういらいらが募る」などの意見がみられた。災害ボランティア活動を通じて、自分が何をすべきか、今の自分が何をすることが将来の活動に繋がるか、ということを考えるきっかけを得た学生がみられることに注目したい。大学で学ぶことが、自分が「より役に立つ」人間になるために必要なことであると気づくことは、今の自分自身の無力さに気づくことによる。このことの持つ意味はきわめて重要であろう。

他方、交通手段が用意され、宿泊施設が用意され、食事が用意された「ボランティアツアー」に対して、違和感を持ったとする感想もみられた。これは、災害ボランティアとは、もっと厳しい環境、例えば、宿泊先もなく、食料も十分ないなかで行うものであるというイメージを持っていることを背景としている。災害ボランティアの実体験は、時期や場所によって異なる。しかし、このことは、あらゆる経験を通じて自分たちが経験しているボランティアとは何か、被災地のための活動することはどういうことかを考えることに繋がっていることを示す一例である。

最後に、一参加者として共に参加した立場から感じたことを記録しておきたい。千葉大学のボランティア活動支援センターの取り組みは、学生自身がボランティアコーディネータとして企画を運営すること、「後方支援」として大学教職員のサポートを得た活動であることに特徴がある。学生自身がボランティアコーディネータとして具体的な活動の企画・準備段階からかわり、調整することはリーダーシップの育成の側面を持ち、そのことによる成長は目を見張るものがある。他方、災害ボランティア活動は、被災地域の状況やその支援の取組に従事することの各人の思い入れを背景に、ある種の高揚感をもたらす。そのため、意見や感情、方針の対立を生じやすい。このことは、年齢に関係なく生じるものである。このようななか、例えば、学生同士の議論が対立的な状況になるようであれば、「後方支援」として大学教職員のサポートを得た活動においては、教職員が適度な助言を行いながら一定の教育的配慮をもって状況を整理することができる。この環境は、災害ボラン

ティア活動にはじめて参加する学生にとって安心感を与えるものにもなる。「普通の学生」にとってこのことは非常に重要な環境であったと思われる。

おわりに

大学が災害ボランティアを企画することは、さまざまな学生に、その機会を提供することにつながる。大学で学ぶ学生は、「強い学生」ばかりではない。しかし、大学がきっかけを提供することにより、具体的な行動に踏み込むことができる「普通の学生」があるとき、そして、そのことがその学生の成長につながることは大学が教育機関としての役割を持ちつつ、被災地支援を展開する一つの理由となるだろう。活動に参加する学生たちは、自分の目で被災地現状を知り、自分自身がその場に身置いて活動することによって、この災害をどのように考えるか、ボランティア活動をどのように考えるか、被災地域の支援をどのように考えるか、何に取り組むべきか、を議論する。そして、自分自身がどのように生きるべきか、と考える。千葉大学ボランティア活動支援センターが関わることによって、ただ活動するだけでなく、その活動に、活動を通じた省察と参加者同士の議論を含めた教育的なプログラムとしての価値を持たせるとき、学生が災害ボランティア活動に参加することは特別な意味を持つ。「普通の学生」が強くなれる機会を提供することは、教育機関としての大学が提供することができる機会でもある。このように考えるとき、千葉大学ボランティア活動支援センターの取り組みは、大学が教育機関として、被災地支援としてだけでなく、学生の成長を促すためにも継続的に取り組むことが期待される。この取り組みが教育機関としての大学が果たすべき、学生の成長のための活動として重要な意味を持つためである。

(参考文献)

- 桜井政成・津止正敏編著 2009年、『ボランティア教育の新地平』ミネルヴァ書房。
- 菅磨志保・山下佑介・渥美公秀編 2008年、『災害ボランティア論入門』弘文堂。
- 文部科学省高等教育局 大学振興課大学改革推進室 2011年、「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（2011年8月24日）
- 杉岡秀紀・久保友美 2007年、「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題、展望」、同志社大学『社会科学』79号、pp.129-158。
- 馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎 2006年、「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』36号、pp.155-162。
- 上畑良信 2006年、「大学の教育課程と学生のボランティア活動」『長崎県立大学論集 40(1)』、pp.57-80。
- 山田礼子研究代表 2008年、『転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究（改定版）』（平成16-18年度科学研究費補助金研究）。

当時の日記から (3月11日以降の日記から抜粋)

活動場所：福島県
匿名

3/11 福島に帰省していました。福島の友人に誘われて行ったケーキ教室で、作ったクレープの試食をしているときに地震が起きました。床に落ちたホイップクリームや食器などを掃除したあと、友人の車で実家へ向かいました。mixiを見て、来た道が崩落して通行止めになっていることが分かったので、別のルートで行くことになりました。市内は真っ暗で信号が消えていて、電車が来ないのに踏切の遮断機は下りたままでした。大谷石の塀はみんな崩壊していました。玄関がつぶれて家に入れないうちがたくさん外に出ていました。道路の地割れと余震で車がひどく揺れました。崩れた橋や陥没した道を避けながら車を走らせると、行きは20分で来たのに、帰りは1時間半もかかりました。家に着くと、父と母が真っ暗な中で部屋の片付けをしていました。近所の人から断水するという噂を聞き、風呂桶や鍋など、ためられるものすべてに水を溜めました。夜ご飯はケーキ教室で作ったクレープを食べました。

3/12 昼頃、電気は復旧しましたが、ガスと水はまだ復旧しません。給水車は7時間待ちだったため、井戸水を使っている家を探して近所の子供達をつれて水をもらいに行きました。午後、原発が水素爆発したことをラジオで知りました。夕方、スーパーマーケットは開店しましたが、開店十分前には150人の行列ができていました。「ヨウ素を含む昆布を食べると被曝を防げる」と言うチェーンメールを真に受けた人が昆布を買い占めていました。歩いている人はみんなマスクをして帽子を深々とかぶっていました。

3/13 午前中、父の小学校のボランティアに来てほしいと頼まれました。「報酬は水です」と言って、近所の中学生や高校生に声をかけペットボトルを持って自転車で向かいました。小学校の体育館は帰宅困難者の受け入れで、土足により砂や泥だらけになっていたため、みんなで水拭きをしました。帰りに近所の神社にお参りに行くと、鳥居が崩れてなくなっていました。

3/14 8:00 母の中学校は水洗トイレが使えると聞いたのでついて行くことにしました。中学校の体育館には1000人くらいが冷たい床の上に毛布をひいて生活していました。私は、中学校で安否確認の電話の受け答えと新学期の準備の手伝いをしていました。10分おきくらいに「そちらの避難所に〇〇町の××さんは来ていますか？」という電話が来て、探している人の名前や年齢、住所、電話をかけてきた人との関係をメモし、体育館に行ってアナウンスするという作業を行いました。避難所では、ペットボトルの水とコンビニおにぎりが配られていました。

3/15 今日、中学校で新学期の準備の手伝いをしました。避難所が市内にたくさんできたため、分散して人数が800人くらいに減っていました。安否確認の電話も1時間に一本

くらいになっていました。白い防護服を着た人が5人くらい被曝量を量るために来ました。
3/16 隣町は水が出たと聞き、近所の子をつれて自転車で隣町の銭湯に入りに行きました。整理券が配られていて、入浴できるまで2時間かかりました。塩素臭い沸かし湯でしたが、今まで生きてきたなかで一番の名湯に感じました。銭湯のテレビでは、農家の友人が炊きだしをしている映像が流れていました。帰りにスーパーに寄ると、豚肉が高級黒毛和牛並の値段で売られていてショックでした。

3/18 午後、水道から水が出て一週間ぶりにお風呂に入りました。

3/21 午前、従妹を誘って市役所にボランティア登録に行きました。ボランティア登録をしている人はほとんどが高校生だったため、自動的にボランティアのリーダーに任命されました。午後、市役所から連絡をもらい食品仕分けのボランティアに行きました。一斗缶に入ったイチゴジャムをスプーンを使って一人前ずつに分けるという作業をしました。「最初から分けてあるジャムを送ってくればいいのに」と愚痴っている人もいました。

3/22 市役所から子供と遊ぶボランティアの依頼の電話を受け、従妹とともに一週間高校の避難所に行きました。親戚の家に行った人、県外に避難した人が増えたため、高校の避難所には80人程度に減っていましたが、避難所には全国から水や非常食の支援がたくさんくるため、余った物資が山積みになっていました。報酬に賞味期限の切れたヤクルトをいただきました。

3/23 2,3歳児と幼稚園児がプロレスごっこを挑んできてやんちゃな子ばかりです。何度も支援物資の山によじ登らないように叱ったり、引きずり下ろしたりしなければなりません。小学校高学年や中学校の女の子とは学校の話や恋愛の話、嵐の中で誰が好き？なんて話をしていました。

3/24 幼稚園児の女の子達は人におんぶしてもらうのがブームになっているようです。おかげで筋肉痛です。

震災ボランティアに対する想い

活動場所：千葉県内
文学部国際言語文化学科 大関麻里

「ディズニー大好き！ディズニーでアルバイトしてます！人を笑顔にすることが大好きです！」といつも自己紹介でも使っているこの私自身の軸は、私が震災ボランティアに深くかかわるきっかけともなりました。3月11日、地震が起きてひとり不安の中、アルバイト先のディズニーからは「明日はゲストのケアのために出勤してほしい」ということを言われていました。正直、不安な気持ちでいっぱいでしたが、ゲストのためにと職場に向かう覚悟をしていました。しかし、翌日になっても交通機関は麻痺していて、ゲストの元に向かうことはできませんでした。浦安市は液状化で多大な被害を受けていたことから、そ

れからすぐにディズニーリゾートが休園すると発表されます。私にとって自己実現できる大切な場所が大変なことになっている、何か私にもできることはないのかと思ったことがそもそもの始まりでした。そんな時、浦安市のボランティアセンターがボランティアを募集していると知り、「ここに行けば私にも何かできることが見つかるかもしれない」と地震発生から約一週間後にはすでに浦安市のボランティアセンターに自ら出向いていました。実際に浦安市に行ってみると、被害は想像以上で、街は噴出した砂であふれ、傾いた住宅や電柱、ひびの入った道（写真①）など、現実とは思えない光景が目の前に広がっていました。「浦安市がこのような状態では、ディズニー再開どころの話ではない。まずは市内の困っている人たちの手助けをしなくては！」という思いになり、それから3日間の作業に参加しました。そこでは、簡易トイレの配達や液状化で噴出した土砂の片付けをしました。ボランティアセンターでは、受付完了までに三時間もかかるほどのボランティア志願者が訪れていて、たくさんの方が少しでも役に立ちたいと思って来ていることがわかりました。ボランティアの年齢層も中学生～50歳代まで本当に幅広い人が来ていました。活動を通して、たくさんの方と話すこともできました。浦安市民のボランティアの方々は「わざわざ時間をかけてきてくれてありがとう」と感謝してくれましたが、与えられた仕事をするという最低限のことしかできない自分の不甲斐なさを感じることもありました。しかし、ただ家にいて復旧を待つだけでは分からなかった、人々の震災に対する思い、力を合わせて頑張っていこうという熱意も肌で感じることもできたことは、私自身の沈んだ心の励みになりました。

そして、大学のボランティアセンターに報告をしたことが、新たな活動のきっかけとなります。ボランティア体験者と未経験者の交流会があるということを知り、またその主催をするのがボランティアコーディネーターという学生だということを知りました。今度はこれからボランティアをしようとする学生の役に立ちたいと思い、その団体に加入することを決意します。ボランティアコーディネーターとしては、大学主催の被災地ボランティアツアーの企画・運営に携わりました。しかし多くの学生の話聴いていく中で、ボランティアに興味はあっても実際に参加する勇気がなく、金銭的にゆとりがない学生が多くいることに気がきました。そこで私はそのような学生にもボランティアの機会を提供するため、11月の大学祭で遠方支援として東北物産展を開こうと提案しました。商品は都内の東北の名物を扱っているアンテナショップに交渉し、手配しました。物産展という企画は前例のないものでしたが、「企画に賛同・協力してくれている学生達のため、そして何よりも被災地のため」という思いで準備に臨みました。当日は、予想を上回る盛況ぶりで、在庫が早々に底をつくといった状況でした。私自身戸惑いながらも、皆で協力し対応策を講じ、その結果、予想の7倍を超える東北物産を販売することができました。手伝ってくれた学生に「自分も被災地の役に立てた気がする、物産展を企画してくれてありがとう」と言ってもらえたことが何よりもうれしく、全員で達成感を共有することができました。買いに来てくれたお客さんの中にも「被災地の役に立つなら…」と商品を買ってくださる方がた

くさんいて、8 か月経って風化しつつあった震災の記憶を思い起こしてもらおうことができたのではないかと思います。

私は実際に東北のボランティアには行ったことがなく、現地の状況を自分の目で見たことはありません。被災地へのメッセージを求められることもあります。被災地を想えば思うほどに言葉に表すことができなくなってしまいます。いくら人を笑顔にするのが好きというモットーを持っていても、被災地の方々を笑顔にしたいなんて無責任なことは言えません。ただそれでも、少しでも役に立ちたいし、少しずつでも笑顔が増えていけば…と願わずには居られません。まだまだ私にもできることがあるはず。これからも自分にできることで、支援をしていきたいと考えています。



(写真①)



(東北物産展当日)

自分にできること

活動場所：千葉県旭市
工学研究科共生応用化学専攻 匿名

東日本大震災発生時、私は関西で企業の採用面接を受けていました。面接後、関東方面への新幹線が全線運休となり、事の重大さに気付いたのは地震発生1時間後のことでした。関西で被災民になった私は、翌日復旧した新幹線で実家に戻りましたが、震災を境に面接や説明会は中止または延期となり、3月の予定がほとんど空白になりました。この時期から、日々報道されるニュースを見て、力を持て余している若い世代の私たちに何かできることはないかと考えるようになりました。

私が実際にボランティア活動に参加したきっかけは、テニスサークルの同期である S 君とのメールのやりとりでした。『少しでも誰かの役に立ちたい』、『現段階で自分達ができることは何か』について議論し、情報収集を行い、千葉県旭市のボランティア活動の存在を知りました。旭市は、千葉県の東部に位置し、海に面するため、県内で深刻な津波被害を受けた地域の1つでした。なぜ東北ではなく、県内でボランティア活動を行ったかの理由は、東北では当時、ボランティアの公募を行っていませんでした。正確には、ボランティ

アを受け入れる段階に達していませんでした。たとえ、厚意から来る行動でも時と場合によっては迷惑になってしまう可能性もあるのです。

私たちが旭市で実際に行ったボランティア活動は、瓦礫の撤収と家財の回収でした。被災者の各家庭に、1グループ5人で計10グループ程度召集され、バスで活動拠点に向かい、活動を行いました。中には女性の方や外国の方も参加していました。しかし、グループ単位で行動するため、活動内容に大差はなく、互いにサポートしながら活動を行った印象が強く残っています。また、大学生でボランティアをしている方の数も多く、旭市にゆかりのある人や県外からの参加者の方も大勢いました。多くの厚意でボランティア活動が成り立っていると感じた瞬間でもありました。

私が最後にボランティア活動に参加した日を境に旭市市外からのボランティア公募は終了しました。2回という少ない活動回数ではありましたが、このボランティアの経験は、非常に私にとって忘れられないものになりました。ボランティアと聞くと一般的には、敷居が高いものと感じるかもしれませんが、実際にはそんなことはありませんでした。純粋に誰かの役に立ちたいという気持ちと実際に行動に移す一歩が重要なのだと思います。私には、自分の気持ちを共有してくれる友達が近くにいました。もし、この冊子を見てボランティア活動に参加したいと思った方は、周囲を巻き込んで一歩踏み出してみてください。近くには、あなたの気持ちに賛同してくれる方がきっといるはずです。今後、誰かのために活動する人がますます増えていくことを心より願います。

被災地へ

活動場所：福島県

人文社会科学研究科博士課程 鈴木慎也（福島県出身）

3月30日、まだ震災後間もない頃、私は友人と共にトラックに救援物資を詰め込み、石巻市の避難所であった北上中と長観寺、そして福島県南相馬市の市役所を巡ってきました。事前にツイッター駆使し、被災者の方々が必要としているものをピックアップし、被災地のご迷惑にならないように、自分たちの食料と燃料を確保した上で、救援に向かいました。北上中は約300人、長観寺は約60名の方が避難されている避難所で、この二つの避難所は電気、ガス、水道、全てのライフラインが復旧していない場所でした。

海岸部は全滅。住宅があったところが更地のようになっていました。残っていたのは建物の基礎部のみ。全てが津波の想像を絶するエネルギーで破壊され尽くしていました。被災者の方のお話では、10m近い高さの津波が押し寄せてきたとのこと。それは最早、波ではなく、水の塊が押し寄せてくるような感覚だったそうです。目の前で、波にさらわれていった人を目撃したという方もいらっしゃいました。震災後、1週間は涙を流しながら

ら、遺体を捜したり、家財道具を回収していたそうですが、「それ以降は、一滴も涙が出ない。涙が枯れ果ててしまった。」とおっしゃっていました。2つの避難所に伺ったときに印象に残ったことがあります。

北上中で、避難所を取りまとめている代表の方が、「ここはこれだけあれば十分ですから他の困ってる避難所にまわして下さい」とおっしゃっていたことです。それこそ、避難されている方の人数から考えれば、明らかにそれだけでは足りないはずなのに、「自分たちだけもらうわけにはいきません」と笑顔で答えてくださった瞬間、涙が出ました。これだけ危機的な状況にあるにもかかわらず、他者を思いやることができる。果たして、同じ状況に置かれたときに自分もそう言えるのか、考えてしまいました。

今回の体験で、それまで漠然と単なる数字としてしか捉えることのできなかった死亡者、行方不明者数が、非常にリアルなものとなりました。この数字の中には、自分たちが接した被災者の方の大切なご家族が含まれているんだと気づいたときにそれは単なる数字ではなくなっていました。

また、実際に被災地をめぐり、被災者の方と接し、自分の中で大きく変わったことがありました。それまで、テレビや新聞で見ていた被災地の映像や写真は「瓦礫」に覆われた姿として私の目に映っていました。しかし、自分の眼前に広がっていたのは、「瓦礫」ではなく、無数の被災者の方々の「思い出のかけら」でした。それは、タンスであったり、ぬいぐるみであったり、身長が刻まれた柱であったり、お気に入りのコップであったり。そんな「思い出のかけら」を「瓦礫」と呼んでしまうこと。それは被災者の方々を深く傷つけてしまっているのではないかと、そんなふうを考えるようになりました。

最後に私の実家の話をさせていただきます。私の両親は福島市内で果物農家を営んでおります。しかも今ではだいぶ珍しくなった専門農家です。地震発生2日目の午後にやっと家族の無事、親戚の無事を確認できました。1週間後に停電は回復しましたが、断水はその後も1週間近く続き、苦しい状況が続いておりました。

私は今、千葉におります。農家の長男坊でありながら、農業とは全く関係ないことを学んでいる親不孝者です。そんな私が学び続けることができているのも、実家の両親、祖母のお陰です。農家には決まった休み等ありません。農繁期の夏は朝5時から夜7時まで。雨の日も、雪の日も、真夏の暑い日も畑に出かけて行く家族の姿を物心ついた頃からずっと見続けてきました。私も長期の休み中に良く実家の手伝いのために帰省しました。その度に、日頃からこんなに大変な農作業をしている家族に頭が下がります。一人暮らしを始めてから、定期的に送られて来る家族が作ってくれた野菜や果物にどんなに励まされたことでしょうか。友達に果物をお裾分けした時に「すごくおいしかった！」と言われた時は自分のことのように誇らしく感じていたものです。

そんな福島農作物が震災後、「風評被害」という見えない脅威に曝され続けています。

桃の市場価格は例年の市場価格の10分の1まで下落し、他の農作物にも多くの影響が及びました。今、福島農家は必死に信用回復のために頑張っています。小雪のちらつく寒い中で、水浸しになりながらも畑の除染活動を行っています。効果がどれほどあるのか、正直分かりません。しかし、少しでも効果があるならばという思いで作業を行っています。ちなみに福島の果物は政府の基準値を大幅に下回っており、その値も限りなく0に近い値です。どうか、皆さん、「福島県産」というだけで避けないで下さい。

ボランティア活動を通じて感じたこと

活動場所：宮城県七ヶ浜町
工学部都市環境システム学科 荻野高弘

東日本大震災が起きたとき、僕はタイにいた。だから、震災は体験していない。津波が車や建物をまるごと流す映像を、テレビでみているだけだった。だから、帰国したら、震災のリアルが見たいと思い、僕は4月に宮城にいった。

被害の現場を見て、僕は泣いた。よくテレビで見る瓦礫の山は、ほんの一部で、被害は想像を超えていたからだ。その場所にあったはずの家や車はなく、人の陰もない。泥で汚れた服や本、瓦礫たちが数ヶ月前までそこに人がいたことを主張していた。どうしようもないと思った。自分に何ができるのか、考えざるを得なかった。自分の力で撤去できる瓦礫は、ほんのわずかで、それでも、何十人で何時間かやるうちにある程度は撤去できる。復興するためには時間と人と、お金が必要だと感じた。

ボランティアの仕事は、瓦礫を撤去することだけではない。ボランティアセンターというところで自治体と協力して、避難所の運営を手伝ったりもする。そこでは、被災された方と直接話すことになる。被災してから一ヶ月という状況で、何を話していいのか僕にはわからなかった。だから、ただ話を聞き、うなづくことしかできなかった。話を聞くと、家族をなくした方、恋人をなくした方、家をなくした方、みんな何かを失っていた。それでも、なんとかしなきゃという想いをたくさんの方が持っていた。みんなががんばっているから、と被災されたおばあちゃんがいていた。僕はそのときに、ここにいるみんな、東北にいるみんな、日本にいるみんなが、この状況に気づき、前向きにがんばっていかなきゃなと感じた。

僕は、ボランティアにあって良かったと思っている。それは、被災したことをリアルに感じる事ができたからだ。決して人ごとではない。あの状況を見てしまったら、何かせずにはいられなかった。それは、ちょっとしたことでもいいと思う。東北の物を買うとか、ボランティアを勧めるといったことでも良いと思う。僕は被災したことを考えることがなにより重要だとボランティアを通して思った。もうすぐ震災から一年経つことになるが、去年の4月にボランティアにあって感じたこと、考えたことは、これから何年経とうとも

忘れてはならないことだと思う。まだ被災地を見ていない方は、日本人として足を運ぶべきだと思う。そこで思うことは一人一人違うだろうけど、日本でこういう事態がおきたことを知り、この大震災について考えることが重要だと思う。だから僕は、実際に自分が見たことをまだみてないみんなに伝えたい。

被災地での活動を通じて感じたこと

活動場所：千葉県旭市，宮城県石巻市
理学研究科地球生命圏科学専攻生物学コース博士前期課程2年 佐々野耕平

私は震災復興関連のボランティア活動に参加しました。ここでは、その活動内容と私が今感じていることを書きたいと思います。

まず私が参加したのは、千葉県旭市のボランティア活動です。このときはサークルの友人と3人で2回参加しました。旭市の社会福祉協議会が運営するボランティアセンターに個人単位で伺いました。そこでの活動内容は、住居や側溝に侵入してきたヘドロを掻き出す作業と海水に浸って使い物にならなくなったものを運び出す作業でした。千葉県内で最も被害があった地域である旭市は3月いっぱいの作業で、ボランティアの募集が終了しました。

しかしながら東北地方太平洋沿岸部ではさらなる甚大な被害があったため、私はそちらにも行こうと決意しました。ピースポートというNPO法人主催のボランティア活動に参加し、4月末から5月初旬と12月中旬に2回宮城県石巻市に行きました。1回目の訪問時には炊き出しやヘドロ掻きなど基本的な作業が必要とされていましたが、2回目の訪問時には碇を作ったり仮設住宅に畑を作ったりと、作業の変化に復興の兆しが見てとれました。

私が今年のボランティア活動で一番感じたことは、「震災から時間がたっても忘れないでいてくれる人の存在が重要である」ということです。旭市での活動や石巻市での1回目の活動の際にはたくさんのボランティアが参加していましたが、石巻市での2回目の活動の際にはその数は激減していました。街はだいぶ片づけが進み、徐々に復興してきていますが、まだまだ助けを必要とする分野は多く、そして人々も傷ついています。そんなときに「私たちのことを忘れないでいてくれる人がいることを知ったときにとってもありがたかった」という現地の人の話を聞きました。

時間が経つにつれて多くの人々の関心は薄れていっているように思いますが、少しでも気にかけて何か出来ることをすることが、被災地の人々の励みや助けになっていることを私は確認してきました。なので、ほかの皆様方にも自分が出来ることをほんの少しでもいいからしていただけることを願っています。

「3.11 “ボランティア”から見えてきたもの」

活動場所：宮城県

文学部行動科学科社会学専攻 4年 浪川千晴

震災が発生してから約1カ月半後の4月末に、私は初めて被災地ボランティアを経験した。震災直後から「何かしたい、しなければならない」と思っていた私は、責任感とも使命感ともつかない感覚に突き動かされるように、自問自答と迷いを繰り返しながらも被災地ボランティアという選択をした。

覚悟はしていたものの、被災地の現実には涙も出ないくらい残酷だった。一面に広がるのは、その一つひとつに人々の生活があったはずの、がれきの山。もともと軟質の素材であったかのように、津波の爪跡をくっきりと残した電信柱やガードレール。家など残っていなかった。町などなかった。それを見ればどんな人間だって、一瞬で理解する。あの日、本当に多くの人の命が奪われて、生活が脅かされ続けているということ。言葉を失う、ということがどういうことなのか初めて知った気がした。この時ほど、自分の無力さと無知さと愚かさを呪ったことはない。

初めての被災地ボランティアは私に支援の継続性を痛感させ、危機感と自覚を強めた。それは、気仙沼や陸前高田、大島、東松島、原発非難区域住民が移住している会津若松など、様々な被災地ボランティアへの参加に繋がっただけではなく、後方支援という選択肢にも注力する結果をもたらした。学生震災復興支援団体「Youth for 3.11」での運営メンバーとしての活動である。

2011年3月11日14時46分18秒、日本の、いや世界の歴史が変わったその日、誰もが混乱と絶望の中、だけど一方では驚くほど冷静に誓いを立てた自分がいた。「私たち若者がリーダーシップを取って、復興支援に携わっていくこと、ともに復興支援を創り上げていくこと」それを達成するために私は、現地支援、後方支援にこだわることなく、どちらも続けてきた。

しかし、次第に私は“ボランティア”という言葉の多義性に苦しむようになる。責任感や使命感による自発的な、奉仕精神によって支えられる無償の、自立と積極性による公共性のあるもの、と社会的広範囲で定義されるボランティア。そしてそれは多くの場合、優しさや親切心、思いやり、見返りを求めない心、自己犠牲といった簡素化された言葉で説明され、イメージされると同時に、自己満足や偽善といった言葉で非難されることも多い。私自身も実際にボランティア活動を経験する前までは、ボランティアに対して“高尚”なイメージを持つ反面で、目に見えて優しさを押し出すように思えて不信感を抱いていたことも否定できない。

しかし実際にボランティア活動を経験し、継続する中で、自分自身の感覚はもっと別の次元にあることに気がついた。「震災」「知らない土地」「知らない人」からなる「緊急事態、

非常事態」をキーワードに、私は名前をつける必要のなかった行為に「ボランティア」という社会的評価の高い名前をつけて、そこに自分を置いた。ボランティアという言葉のもとでなら、私は遠慮なく良心を発揮することができたし、親切な行為に生じる恥ずかしさや戸惑いも軽減された。それが優しさなのかはわからないにしろ、優しいように見える行為をしやすくしてくれたのが、ボランティアという言葉だったかもしれない。つまり「ボランティア」という言葉、そういう存在ということは、もっと根本から自分自身を形成することに深く影響を及ぼしているという感覚に近い。

人間はいちいち自分の行為一つひとつに特別な意味づけをしようとする。意義や意味を見出して、自分の存在意義や価値を実感したいからである。だけど、それによって私たちはもっとも生きづらくなる。物が溢れ、情報が氾濫した社会に生まれた私たちは、「どうせ今の若者は」「ゆとり世代」といったよく意味のわからない大人の言い分に付き合わされて、「できない若者」を刷り込まれてきた。そうして、気がつかずに踏み潰していた自由と豊かさは、私たちから“生きている”という実感を奪った。

この大震災は人間という生き物、“生きる”ということを私たちに問いかけ、たくさんの社会問題を浮き彫りにもし、忘れさせもした。みんなが信じた“平和”な我が国日本は、自殺者が年間で3万人を超えて、自殺未遂者で言えばその10倍にも及ぶと言われる異常な国家。この国の抱える問題は震災だけではない。それを解決しようとか、力になろうとすることだけで満足したくない。今、となりで困っている人がいるのかもしれない。「ボランティアだ」と肩肘を張るのではなく、もっとシンプルに、まっすぐに、問題にしる、人間にしる、向き合いたい。

そして、私は「震災を忘れない」とか「伝えたい」という言葉で思考を停止したくない。今までこの国は、戦争も、原爆投下も、たくさんの災害も全部忘れてきた。何も教育されず、自分から学ぼうともせず、私たちは生きてきた。そんなつらい現実の繰り返しをもう終わりにしなければならない。

日本という国で次の震災は避けられない。私たちは次の震災へ備えなければならない。そして、この未曾有の大震災の記録を、知見を、復興への歩みを、その全てを世界中へ向けて発信する責任と義務を負っているのである。震災から約1年が経ち、被災地の悲惨な写真や動画の共有で感情に訴えかけても、あまり効果は期待できないだろう。私たちはもう次のステージへ前進しなければならない。防災教育を創り出し、徹底していくこと。それらが、私たちがこれから取り組むべき課題であり、達成すべきミッションであると考えている。

あの忌まわしい3月11日だって、今日と同じように1日は24時間だったし、1分1秒、同じように時は刻まれていった。誰かが自分のために未来を創ってくれるわけでも、望んだ未来を用意してくれるわけでもない。だから、今日も明日も明後日も、たとえそれが代わり映えのしない毎日だったとしても、私たちは“志向する未来”のために日々を積み重ねよう。そして生活を創造しよう。

ボランティアを通じて経験したこと、関わってくれたたくさんの仲間、涙も、笑顔も、その全てに心から「ありがとう」。

石巻動物救護センターでの活動を終えて

活動場所：石巻動物救護センター
医学薬学府修士課程総合薬品科学専攻 榊原美佳

もうすぐあの日から1年。3月11日は日本だけでなく、世界中の人々にとって何かしら特別な日になったと思います。私ももちろん、その1人。あの日以降続く余震とテレビから流れる悲惨な被災地の様子に、私は精神的にとっても苦しくて苦しくて堪らない日々を送っていました。募金をしようにも、自分も親に養ってもらっている身、ならば仕事で働けない人たちの代わりに自分の体で何かしようと考え、ボランティアに行くことに決めました。とにかく“被災地のために何かしたい”ただそれだけであまり深く考えもせず飛び込んでしまいましたが、すごく有意義なボランティア生活を送ることができました。それは石巻動物救護センターで出会った動物たちと人々のおかげでした。

私が初めて被災地へ入ったのは5月1日、ゴールデンウィークの初めでした。全国から休みを利用してたくさんの人が被災地へ向かっていました。石巻動物救護センターにも100人を超えるボランティアが駆け付け、活気づいたボランティア活動をしていました。センターでの主な活動は、ペット動物の保護と預かりでした。震災で飼い主と離れ離れになってしまった子、飼い主と一緒に逃げることはできたけれど、一緒には避難所にいられない子など、さまざまな背景を背負った子がたくさんいました。私はたまたま人手不足だった犬舎の担当になり、朝夕の散歩にゴハン、体調管理や掃除をしました。あまりのハードな活動に初めは1週間くらいで帰ろうと思っていたのですが、ゴールデンウィーク後に一気に人数が減ることを知り、この子たちのために残ろうと決めました。それくらい私はこの活動が好きになっていたし、情も移っていました。触れ合えば触れ合うほど、知れば知るほど犬たち一匹一匹の純粋な心に、嘘をつくことに慣れて自分の汚い心が洗われていくようでした。それに飼い主さんとの絆を見るたびに熱いものがこみあげて、涙が止まらなくなりました。こんなに泣いたのはいつぶりだろうと思うくらい泣いたり、喜怒哀楽が自分でも驚くほど出るようになりました。いつのまにか、この子たちを助けにきているのに、自分が救われていました。

また学生をしていたら、絶対にできなかった素敵な出会いがたくさんありました。年齢も職業もバラバラの人たちが、同じ目的に向かって活動するというのは、もちろん衝突もありますが、とにかく貴重な体験でした。人間関係で、もう面倒だ！やめてしまいたい！と思うようなこともありましたが、でも犬たちのためにやめるわけにはいかない！とまた一致団結することができたのです。夜中までお酒を飲みながら熱い議論をしたり、被災地か

ら帰ったあとも連絡を取り合って、新たな友人ができました。

10月6日、石巻動物救護センターは無事に閉所しました。石巻市に仮設住宅の設置が完了し、一応全員が仮設住宅に入れることになったので、飼い主のところへみんな帰れることになったのです。しかしやはり餌代などのために飼えないという方が何人かいらっしやっただので、里親さんを探したりしました。大好きな飼い主さんから離れなくてはならないのは犬たちにとってとてもつらいことだったと思います。それでもなんとか全員居場所を見つけられたので、センターは閉所しました。それから私は自分の就職活動が忙しくなり、石巻には行っていませんが、たまに飼い主さんから写真付きのお手紙をいただきます。今は雪が降っていてとても過酷な環境ですが、家族で頑張っているというお話でした。また絶対に現地でみんなの元気な顔が見たいと思います。それまで私も私で自分のやれることを精一杯やっておこうと思います。

私に大切なことを気づかせてくれて、次の一步を踏み出させてくれた石巻のみんなに感謝しています。ありがとう。

被災地支援活動で感じること

活動場所：福島県いわき市
法経学部法学科 加藤愛菜

去年の3月11日、私は泊りがけで千葉県匝瑳市にて農業体験をしており、十数名の学生と、主催者の方、現地の方と一緒にいました。予定ではその日に帰るつもりでいたのが、電気・ガス・水道が止まってしまい、道路も信号が動いていなかったため、やむなくさらに一泊しました。夕食も、調理手段が極端に限られてしまい、近くのコンビニでかろうじて買うことができた肉まんなどをみんなで分けて食べました。その夜は、大きな部屋に学生も主催者の方も毛布や寝袋をかき集めて一緒に横になり、緊急地震速報が鳴ると一斉に外に避難することを繰り返していました。翌日もみんなの携帯電話の電池が切れていき、電気が戻らないため公衆電話もつながらず…。ほんの少しの間でしたが、不便さを味わいました。

その後、3月の下旬ごろ、農業体験の主催者であった社会人の方に、震災関連のボランティア組織を立ち上げるので学生代表をやらないか、と声をかけていただき、さらに震災時に一緒にいた仲間を中心に人を集め「げんき団」を組織しました。これまでに、団体としては福島県いわき市、宮城県亘理町、千葉県鴨川市などでの活動や、千葉大学での勉強会などを行い、外部の方に向けた活動報告会も行ってきました。

私が震災後初めて被災地に行ったのが5月7日で、その日は社会人の方4人と一緒に、車で福島県いわき市を見て回りました。まだ高速道路も途中までしか開通しておらず、勿来ICで降り、海沿いを走ったのですが、道路もがたがたで、いたるところで盛り上がった

り崩れたりしていました。また、被害を受けた家の家財道具が道路わきに積まれてあったり、がれきの山が至る所にあったりしました。驚いたことは、道路を一本挟んだだけで、動いているまちと止まっているまちにわかれていたことです。海に近いところは津波が家を傾かせ、家の中のものを丸ごとさらっていき、誰も住んでいない、何もないまちでした。お店もシャッターが垂れ下がったままもぬけの殻でしたし、住民は見かけず、ときどき作業をしている人がいるくらいで、今までそこにあった暮らしを思うと苦しくなりました。

一方、そこから道路を一本挟んで陸側に入ると、まだ住むことができる家や、あいさつを交わしている人たちもいて、かなり違った様子が見られました。さらに陸側に入ると大人がグラウンドで草野球をしていたりもしました。その横を、はるばる福島まで来た岡山県警のパトカーが通るのを、不思議な思いで見ました。何もなくなってしまったまちがあり、同じ市内でも生活を奪われた人、続けられる人がいて、意識にも落差があることを感じました。私もこの状況を何とかしなければと思いながらも、いったい何ができるのだろうか、と悩ましい思いでした。

次にまたいわき市に行ったのは7月31日で、その日は久ノ浜で側溝のかき出し、がれきの撤去作業を行いました。当日は気温もあまり高くなく、ときどき雨も降ってくるような天気だったのですが、ヘドロの臭いは強烈で、作業後はシャワーを浴びたいくらい汗をかき、汚れていました。その時感じたのは、現地の人たちの明るさです。作業は現地の人を中心に、県外のボランティアも交じって行いましたが、現場を仕切っているチームがとても陽気で、仲良く笑いながら楽しんでいる様子でした。私たちにも声をかけてくれたり、水を差し入れてくれたりと、いろいろ心遣いをいただきました。現地の方は、自分の街だから、何とかしたいからという思いで活動をしていると言っていて、「ボランティアは自己完結だから」と言っていたのが印象的でした。自分がやりたいからやる。自分で満足すればそれでいい。ということで、他人のために責任を感じてやるものではないし、無理してまでやるものではないということを伝えてくれたのだと思います。

その後、私がまたいわき市に行ったのは11月26日で、いわきNPOセンターの方の話を聞き、現地のイベント運営の手伝いをし、夕食は久ノ浜で活動をしている方のお宅のお鍋参加させていただきました。その頃にはがれきもかなり片付いていて、海沿いはさらに「なにもないまち」といった感じがしましたが、相変わらず現地で活動している方たちは活気にあふれていました。現地の話聞くことで、被災地が抱える問題が見えたと思う一方、それに対して何ができるのか分からず、他団体の手伝いをしつつも、私たちがこの後「げんき団」としてどのような活動を続けていくべきかが分からずにいました。お鍋も、もやもやしたままお邪魔して、現地の方にもてなしていただく形になってしまい、「学生のうちはもっと楽しいことをした方がいい」といったアドバイスをいただいたりしました。

被災した地域で活動している方々と関わっていると、彼らは目の前にやることができ、やれることをやっているという感じがして、私たちが担える部分がどこにあるのか、何をすれば喜んでもらえるのかわからないというのが悩みです。また、学生とはいえ、活動す

るに当たっては普段の生活とのバランスや人数的制約もあります。一方で、精神的に辛い思いをしている人や、放射能のせいで不安を抱えている人もたくさんいて、活動をやるわけにもいかないと思います。そのために、自分たちがやりたいと思う支援を長く続けていきたいのですが、今まで活動をしてきても自分たちが求められる場を見つけられたわけではないので、現在はメンバーのモチベーションもあまり高くありません。とりあえず続けてはみたものの、本当は何がしたいのかいまだにわからないというのが本音です。一度、東京理科大学の学生が、いわき市の子供たちに理科の実験教室を提供しているところもお手伝いしましたが、直接に活かせる専門の分野があることを羨ましく感じてしまいました。

私は、両親が宮城県出身で、ほとんどの親戚も宮城におり、多くの身内が被災しました。福島大学に通う従姉もいて、何でもいいので何か身近な人の役に立ちたいと思う気持ちはあります。一方、それと被災地を支援することはあまり結びつかず、違う次元で考えてしまいます。やりがいを感じられれば楽しいし、得られるものも大きいですが、他人とかかわることで生まれる責任や、支援を続ける難しさなどもこれまでの活動で学び、考えるようになりました。それが身近な人を手伝うこととの違いだと思います。それもあって今何をすればいいのか分からず、なかなか動けないでいることをもどかしく思っています。

被災地仮設住宅でのコミュニティ復興活動

活動場所：福島県相馬郡新地町（5月）、宮城県石巻市雄勝町（7月～）
園芸学部緑地環境学科3年 環境 ISO 学生委員会（松戸・柏の葉地区） 勝美直光

震災発生～ボランティアに参加するまで

3月11日、私は西千葉キャンパスにいました。地震が発生したときは何が起きているのか分からずにグラウンドに避難しましたが、2度目の大きな地震が起きたあたりから事態の異様さに気がつき始めた事を、今でも鮮明に覚えています。自宅のある松戸には当然帰ることは出来ず、その日は西千葉の友人宅にて一晩を過ごしましたが、時間が経つほどに多くなっていく被害状況の報道、鳴り止まない緊急地震速報に不安な時を過ごしたことは言うまでもありません。

私は園芸学部緑地環境学科の学生です。大学では、主に自然環境を守るための勉強をしています。私が守りたいと思っている自然が牙を剥いたとき、どのような事態が起きるのかこの目で確かめる必要があると思います。震災直後から震災ボランティアに参加したいとの思いを抱いていました。しかし震災直後、ボランティアの現地入りは“現地が混乱する”との理由で控えるべきとの報道もあり、行動に移すことができないまま、新学期を迎えました。

新地町での震災ボランティア活動

ゴールデンウィークに入り、友人3名と福島県相馬郡新地町にて側溝に溜まった土砂を掻き出すボランティアに参加しました。参加していたボランティアの人数は50名程度でしたが、私たちが最年少グループでした。側溝に土砂が溜まったままだと、生活廃水も何も流すことが出来ず復旧が進まないとのことで、皆一生懸命出来る範囲で体を動かしました。土砂の中からは様々な物が出てきます。写真、靴、マニキュア、シャワーヘッド、電話、CD・・・、道路はガタガタで支給されたお弁当を倒れた電柱に座りながら食べる、そんな非日常の空間が広がっていました。目の前に広がる非日常の空間は、報道で見てきた物と何ら変わらないように思えました。しかし報道では感じられない“におい”と、少し離れた場所で活動している自衛隊員の様子は、現地に行って初めて知ったことでした。

雄勝町でのコミュニティガーデン活動

新地町でのボランティアを終え、松戸に帰ってきた私は仲間と、私たちに出来ることは何かあるか話し合いました。当時私は、『千葉大学 松戸・柏の葉地区 環境ISO学生委員会』（以下、ISO）の委員長を務めており、これまでISOのメンバーで松戸市にて行ってきたコミュニティガーデン活動を被災地でも実践できるのではないかと考えました。コミュニティガーデン活動とは、庭造りを通して参加者の方々の交流の機会をつくる活動のことです。震災時には仮設住宅内のコミュニティが希薄になり、孤独による自殺や孤独死が発生する恐れもあるため、阪神淡路大震災の時にも仮設住宅にコミュニティガーデンが作られました。そこで早速、ISO担当教諭の秋田典子准教授に相談したところ、活動の趣旨に賛同してくださり、私たちの活動がスタートしました。

現在雄勝町では3か所の仮設住宅にコミュニティガーデンと、雄勝町入り口の土地にチューリップ畑を作っています。色鮮やかな植物を通じて、少しでも被災者の心に癒しを提供できたらと思っています。



石巻市立大須小学校にて（12月活動時）

ボランティア活動を通じての感想

私たちには雄勝町で活動する際に、常に大切にしていることがあります。それは、被災者の方々に対して『ありがとう』とすることです。被災者の方々は今までも多くの支援を受ける立場にあり、常に『ありがとう』と言い続けてきました。しかし、『ありがとう』と言ってばかりの生活は、想像以上に辛いと思います。

私たちは高齢者が多い被災者の方々と一緒に活動し、時にはお世話をして貰って、時に

は甘えて、私たちが『ありがとう』と言う活動を心がけています。これまで一緒におにぎりを作って皆で食べたり、寝床を提供してもらったり、沢山お世話をしていただいています。おにぎりの上手な作り方を伝授してもらったり、お茶をご馳走になったりと、とても優しく、まるで孫であるかのように接してくれます。

私たちは2月で、5回目の雄勝での活動になりますが、回数を重ねるにつれ被災者の方々の距離も縮まり、交流が増えています。継続することで信頼関係が生まれていることが実感できます。また、甘えるボランティア活動は大学生である私たちにしかできない事だと思います。私たちの活動は胸を張って言えるような活動ではないかもしれませんが。しかし、被災者の方々に直接役に立つ活動ではなかったとしても、自分たちにできることを、できる範囲で継続していくことが重要だと実感しています。

震災とボランティア活動

活動場所：宮城県石巻市
教育学部小学校教員養成課程体育科選修 山野良介（福島県いわき市出身）

大震災の日、私はアルバイトのため東京にいました。ちょうどアルバイトの休憩中外でベンチに腰掛けて休んでいるときだった。物凄い揺れと電柱が大きく揺れる光景に立つことすらできなかったのを覚えています。揺れが続く中あつと言う間に道路は人で溢れかえっていました。揺れが落ち着きだし、震源地はどこなのか携帯電話の速報ニュースを見ると、それは私の実家のある地域でした。私はすぐに実家と両親、兄へと電話をかけましたがどれも繋がりませんでした。家族は無事なのか、そればかりが気になって不安の時間を過ごしました。結局電話が通じたのは日付けが回った頃でした。家族は全員無事ということを知ったときには力が抜けたような感じでした。その日は電車で帰ることができず、アルバイト先で一夜を過ごしました。その間携帯電話のテレビでニュースを見ると、私の地域の運動場が津波に飲み込まれている映像が流れていて、まるで映画でも見ているような感覚で、これが本当に現実で起こっていることが信じられませんでした。

そして、最悪の事態が起きました。原発事故です。小学生の頃に親や先生から原発が爆発したら大変なことになるということを冗談で聞いてはいましたが、それが現実になり私の実家の地域も避難区域に指定されたのを知った時は、もう実家に帰ることができないのではと思い絶望感に襲われました。

家族はすぐに東京の親戚の家へ避難しました。数週間が過ぎると、私の実家のある地域は避難区域から外されました。家族は実家へ帰りましたが、放射線の不安はしばらく続きました。

私は家族がひとまずは無事に家で暮らしていることに安心すると、私の地域よりも暮らしが大変な地域のために何かしたいと思いました。ゼミの教授にその話を持ちかけると、

教授は参加者を募って宮城県石巻市へボランティア活動へ行く計画を立ててくれました。そして5月の中旬、私は教授と参加者数名でボランティア活動のため石巻市へと向かいました。日程は3日間でした。まず現地で感じたのは悪臭でした。海のヘドロが津波によって陸へ上がり、ヘドロの中の微生物や生き物の死骸が腐敗したことが悪臭の原因となっていました。

活動初日は避難場所となっていた小中学校の体育館で暮らす方々や地域の方々のために、炊き出しを行いました。ご飯と豚汁だけでしたが、避難所や地域の方々はありがとうと言ってくれ、その言葉がとても嬉しかったのを覚えています。

次の日は側溝に詰まったヘドロの掻き出し作業を行いました。ヘドロの悪臭はひどく、海水を多く含んでいるため重く大変な作業でした。しかし、ヘドロを掻き出しているときに地域の方々から感謝の言葉や差入れを頂いたり地域の方々の温かさを感じ、作業を最後まで続けることができました。

最終日は石巻市のボランティア団体を訪れたり、被災地の現状を確認しに被災の大きかった場所を見に行ったりしました。

このボランティア活動を通して、ボランティアの必要性や人々の温かさ、そして何よりも私の中に体験として忘れることができないものになりました。

まだまだ復興には多大な時間を要すると言われています。私はこれからも被災地のために自分にできることは積極的に活動を行いたいと思います。

ボランティア活動を通じて感じたこと

活動場所：宮城県石巻市
匿名

私が被災地に足を運んだのは震災から3ヶ月後の、6月半ばのころだった。一度、自分の目で被災地の状況を見ておきたいとは思っていたが自分一人では勇気がなく、外部のボランティアツアーに参加できずにいた。そんなとき、運よく学内の人と共に行く機会に恵まれ、週末の3日間、石巻での活動に同行させてもらった。

被災地の状況はやはり、テレビと全く違っていた。自分の目で見える生の情景は、新聞の活字やテレビの映像をはるかに超える衝撃を私にもたらした。同じ日本とは思えない、がれき一面の風景があり、さらに沿岸部では物凄い異臭がした。マスクなしでは歩けなかった。

1日目は市内の中学校で炊き出しを手伝い、2日目は個人宅の片付けや側溝の泥出しを行った。炊き出しの日には避難所にもお邪魔させてもらい、勝手ながら避難しているご年配の方々と少しお話させていただいた。話をしても拒否されなかったことで調子に乗り、避難されている方々に対し「一緒にがんばりましょう」などと口走った。今思えば本当に自

分勝手だった。2日目にお邪魔した個人宅でも、短い時間で特に大きく仕事が進んだわけではなかっただろうに、その家のおばあちゃんが「ありがとう、ありがとう」と言って昼食からおやつから、色々なものを買ってきて私たちに出してくれた。私は「今度は遊びにでも、また来ます」などと言い、中途半端な満足感だけを感じて帰途に着いた。

それから今日に至るまで、私は一回も被災地へ足を運んでいない。かといって、被災地のために関東でできる活動をしていたかという、そうでもない。少なくとも、本当に被災地のために資する活動を自発的にやっていたとは、絶対に言えない。私は6月に1回、ああして3日間だけ被災地に行き、自分勝手に行動して、自分勝手な満足感を土産に何かを果たした気になっていたのである。

たしかに、現地に行かない・何もしないよりは1回でも行った方が誰かの役に立てるかもしれない。だが、被災地のことを本当に親身に考えず、みんなが行っているから自分も1回行ってみようというような軽い気持ちで行くと、現地の人を傷つけてしまうことがあるだけでなく、中途半端な満足感により、かえって被災地のことを知ろうという努力を怠らせる危険があるということ、私は身をもって感じた。被災地を自分の目で見たために、現地を見ていない他の人たちより被災地のことを知っているつもりになると、かえって被災地のことを積極的に知ろうとせず、継続的な活動にもつながらない。

被災地のために今も活動している団体は、口をそろえて継続的支援の必要性を訴える。そのことを踏まえて私はこれまで、頭では継続的支援が重要であることを知っているつもりでいて、被災地のことをしゃべるときには口々に“継続的支援”という言葉を使っていた。だが、短期単発で被災地に行ったきり、ろくに被災地のことをちゃんと知らずしななかった自分に、その言葉の重みが分かるはずもなかった。

1回現場を見たからと言って、それが事実の全てではないこと。短い期間で満足感を覚えてしまったときは、自分の見たもの、思ったことこそが絶対だと思い込まず、常に「他の視点から考えたらどうなのか」を考え続けること。問題について知ろうとする姿勢を崩さないこと。そうして、一度この活動をやろうと思ったら、自分勝手な理由で辞めたりしない、単発で終わらせない、継続的に活動を行うこと。これらは震災に限らず、他のボランティアをするときでも、様々な問題に対処するときでも、常に有効な心構えだと思う。

もちろん活動をやる、やらないは自分の気持ち次第である。自分がやりたいと心から思うなら相手に資する範囲でやるのがいいし、やりたくないなら潔く辞めたほうがいい。大事なのは、一度やると覚悟を決めたら、それを貫き通す心の強さだろう。

こうして私の震災ボランティア活動を振り返ってみても、活発に現地のために活動されている方々のように益のあることは、何ひとつ言えない。だが、私がこの1年を犠牲に感じた心構えを、ボランティアに対して宙ぶらりんな気持ちを持っている方が読んでくれて、もし一助となれたならこれ幸いである。

あらためて、震災からもうすぐ1年が経つ今、私もこの心構えを胸に、今更ながら被災地に対して自分なりにできることを模索していくことを、心に強く誓う。

ボランティア活動を通じて

活動場所：千葉県、宮城県東松島市・気仙沼市・南三陸町
工学部情報画像学科 古谷佳大

1. はじめに

3月11日に発生した東北地方太平洋沖大地震とそれに伴う大津波によって、多くの地域で甚大な被害がもたらされ現在もなお復興活動が進められています。この大災害に対して私も何かできないかと考え、千葉県と宮城県にて活動を行いました。それらの活動内容についてまとめ、活動を通して感じた事を記すことで私からの報告とします。

2. 学内での活動について

私は現在学生支援団体に所属しており、今までボランティア情報の紹介やボランティアに関わるセミナーの企画をしていました。しかし、実際は1月にそこに入団したばかりで、ボランティアを紹介する立場でありながら3月11日の時点で一度もボランティア活動を経験したことがなく、知識も全くありませんでした。そのため地震発生直後は、ボランティア団体に所属しているにも関わらず何をして良いか分からない自分に疑問を抱いていましたが、とにかく自分に出来る事から始めようと思い、「ふれあいの環」学生総合支援センターの掲示板をお借りして、震災ボランティア専用の掲示板を作り、インターネットでボランティア情報を調べ掲示することにしました。最初は情報の探し方や信頼度なども分からなかったためあまり多くの情報を提供できませんでしたが、次第に充実した掲示板となっていきました。掲示板を見ている学生や、その場でメモをとり電話をしている学生を見かけると、少しは役に立つことが出来たかなと嬉しく思います。

活動を続けていく中で、現地の様子が分からずなかなかボランティア活動に参加出来ないという話をしばしば耳にしました。そこで、すでに現地で活動を経験した学生と、これから現地で活動を希望する学生との情報交換を目的とした交流会を企画しました。やはり最初は上手くいかず全く盛り上がらない交流会になってしまいましたが、進め方や時間帯を工夫し何度も開催することで、多くの学生に参加してもらい、有意義な情報交換の場となっていきました。そのような活動を続けて行く一方で、私も一度現地の現状を自分の目で確かめたいという想いが強くなり、自分でツアーに申し込み、宮城県東松島市での泥かきのボランティア活動に参加しました。

交流会に参加した学生から、現地に行きたいがお金がない、時間がない、参加の仕方が分からないなどの意見が出ました。そのため、ボランティア活動支援センターに所属する教職員の方々と協力し、まだボランティアに参加出来ない初心者の学生を対象としたボランティアツアーを夏休みに開催することにしました。しかし企画者全員が震災ボランティアに対しての知識がなかったため、全て手探りで進めていきました。そうして、第1回目は8月4日～7日に宮城県気仙沼市へ、第2回目は9月22日～25日に宮城県南三陸町

へ行くボランティアツアーを開催しました。

3. ボランティアツアーについて

現地の風景はとても信じられないものでした。道路は大体片付いていましたが、その脇には瓦礫の山があり、畑や田んぼに車が埋まっている場所もありました。南三陸町の海辺の家は土台しか残されておらず、高台にある近所の駅はホームが流されていました。改めて自然の怖さと震災の被害の大きさに驚きました。

活動としては主に瓦礫の撤去作業を行いました。最初は慣れない作業ということもありなかなか効率よく進めることが出来ませんでした。学生同士で作業を分担して適切な方法を考え出し、次第に効率的に作業を行えるようになりました。瓦礫の中にはお椀やコップ、服などの日用品が混じっており、金庫が出てきたときもありました。頭では分かっていたのですが、実際にこのような物を見ると、何か言葉では表せられない感情を感じました。そして1日の終わりに振り返りを行い、活動を通して感じた事、反省点、企画者側への要求など様々な意見を交流し合いました。中には非常に考えさせられる意見や思いつかなかった考え方などがあり、そこから学ぶことも多くありました。

ツアー終了後は、千葉県内の中学校へ赴き、自分たちが体験した事、見てきた事を伝える活動を行いました。中学生が現地の写真を集中して見ていたのがとても印象的でした。

4. 活動を通して感じた事

私はボランティア活動を通して、人との繋がり大切さに気付き、自己の可能性、そして学生の可能性を強く感じました。ボランティア活動を始めてからとても多くの方と出会い共に活動してきましたが、そのどれもが私にとっては貴重な体験でした。自分には無いアイデアや価値観を知り、考え、行動することで多くの事を学び、成長することが出来たと思います。時には大変な事もありましたが、1つの課題を達成した事実が自信へと繋がり、まだまだ自分には多くの可能性を秘めていると感じるようになりました。この可能性は私だけに存在するのではなく、学生1人ひとりが持っていると感じています。ボランティア活動に限らず、ぜひ今の自分の環を少し広げて、様々な人と出会い新たな価値観に触れ、考え、行動し学ぶことで実りある学生生活を送って欲しいと思います。しかしそこに無理が生じていては継続せず楽しくもないため、自分に出来る事をするということが大切だと考えます。ボランティア活動が少し敷居の高いものと感じている人もいますが、活動によって種類や期間は様々あるため、自分に適したものがきっとあるはず。「何かしてみたい」という気持ちがあれば動機としては十分だと思います。

震災から約1年が過ぎ、現地の状況は確実に変化しています。それに伴い支援の在り方も変化しますが、残された課題はまだあると考えます。一方で、ボランティアの必要性は被災地だけでなく、私たちの住む地域にも多く存在します。そのため今後は、被災地と私の住む地域に対して自分が出来る活動を行うと共に、幅広い分野のボランティア活動を学生に紹介し、それぞれの学生に適した活動の場を提供することを目標に活動していきたいです。

震災復興インターンシップ ～陸前高田で感じたこと～

活動場所：岩手県陸前高田市
法経学部総合政策学科3年 市川祐人

私は、2011年7月25日から8月4日にかけて総合政策学科の震災復興インターンシップに参加した。メディアを通じて陸前高田の様子はある程度知っているつもりではあったが、実際に現地に行きその地に立ってみると想像していたこととはまったく違うことを感じた。震災から4ヵ月が経ち、もともと市街地であった場所のがれき撤去作業は進み、大きながれきの山がいくつも積み上げられていた反面、その他にはなにもないという状態に衝撃を受けた。そもそも「がれき」という表現は、おかしいものだとボランティアに行ってみようと思った。そこにあるものはがれきなどではなくて、もともとはそれぞれの家族の家財、思い出などであるからである。本文では「がれき」という表現しかできないが、そのことを意識してもらいたい。

私たちが行ったボランティアは大きく分けてふたつで、ひとつは昼間の屋外でのがれき撤去作業、もうひとつは夜の高田第一中学校での学習指導「寺子屋千葉大」だった。ひとつ目の昼間のがれき撤去作業では、個人宅の畑に流されてきてたまってしまったがれきの撤去などを行った。がれき撤去中に見つかる家族の写真、思い出の品、津波に襲われた時刻で止まった時計、何もかもがその無残さを語っていた。また、気づくと目に前に大きな釘やガラスが飛び出ている怪我の危険性が常にあることや、海水によって木材等が腐ったことによる激しい腐敗臭がすることなどは、実際に現地に行って作業に取り組んでみなければわからないことであった。初日の時点では完成が程遠い作業と感じたが、他の参加者と協力して最終的には、がれきをどかし終えて畑を耕す作業までできた。畑の持ち主である腰の曲がったおばあちゃんも毎日作業を手伝ってくれて差し入れも下さった。炎天下の中での作業であったが、最後にそのおばあちゃんが言ってくれた「みんなが頑張って綺麗にしてくれた畑だからね、一生懸命おいしい野菜を作るからね。ありがとう。」という言葉が今でも忘れられないしこれからもずっと胸にしまっておきたい。

ふたつ目のボランティアである夜の中学生への学習指導「寺子屋千葉大」は、高田第一中学校が会場だった。高田第一中学校は、校庭が全面仮設住宅になっていて、体育館は、テレビで見るようなそのままの避難所になっていた。それを目の当たりにし、現地の実情をさらに痛感した。校庭も体育館も使えず、生徒たちはどこで遊べるのだろうか。校内の廊下には、全国の小学校や著名人から送られてきた応援のメッセージや作品が多数貼ってあった。寺子屋のほうは、実際に被害にあった子どもたちと話すということで、最初はかなり戸惑ったが、教室に入った時の生徒たちの笑い声や笑顔に救われ、緊張も和らいだ。

私たちのグループはふたりの学生でふたりの生徒を担当した。集まってくれた生徒たちには、全体的にまじめに学習へ取り組む姿勢が見られて、教える学生のこちら側もやりがいがあり、宿舎に帰ってからも夜遅くまで翌日の授業の準備をしているボランティア参加者もいた。ただ、元気があるように見える子どもたちも、深い傷を抱えていることに違いなかった。教科書に本人と違う名前が書いてあった生徒に、特に何も考えずに理由を聞いたところ「津波に流された」という返事が返ってきて、どう返事をしたらよいのか迷うこともあった。もちろん故意に震災関連の話を避けようとするのはいけないと思うが、被害にあっている人とコミュニケーションをとるときには、こちら側も少し意識を持つことが必要だと感じた。寺子屋千葉大での学習指導ではどれだけ力になれたかはわからないけれど、担当した生徒が最後に「勉強する意味がわかった」と言ってくれたのがとても嬉しかった。陸前高田の未来を担うひとりとして成長してもらいたい。

今回のボランティアでは、現地の方々と交流する機会もあり、本当にいろいろとサポートしていただいた。現地の方が、口をそろえて言うことは「また元気になった陸前高田を見に来てほしい」ということだった。現地の方々も明るい方が多く、ことらも元気づけられた。陸前高田といえば、奇跡の一本松で有名であり、実際に近くまで見に行く機会があったが、その力強く大地に立つ姿には本当に希望を感じた。復興の象徴として人々が大切にしている理由がわかった気がした。

私は今回の震災の被害についてある程度は理解しているつもりであったが、ボランティアとして実際に行ってみると、実は何もわかっていなかったということを感じた。実際に足を運んでみなければわからないことだらけであったからである。また、まだまだボランティアが足りないという現状も目の当たりにした。震災から月日がたつにつれメディアの関心も薄れてしまうが、現地では今もつらい思いをしている人がいることを常に胸にとどめておかなければならないと感じた。

もしまだボランティア等で行ったことがない方で、少しでも興味がある方がいるならば、しっかりした準備をせず現地に行ってみてほしいと思うし、私自身もまた必ず支援に行きたいと考えている。できれば単発ではなくまとまった期間のボランティアに参加できるとよりやりがいがあるかもしれない。幸い震災で家族も家も失っていない私が言うのもおかしいかもしれないが、現地に行けばきっと震災に対する考え方が変わると思う。本気で、忘れてはいけない、これからも支援していかなければならないことを感じるはずである。震災を風化させず、多くの人が現地に足を運んでくれること、そして被災地の早期の復興につながることを願いたい。

最後は人の手で

活動場所：岩手県宮古市
教育学部小学校教員養成課程 匿名

今回、研究室の先輩である方が被災地で教師をしているという縁もあり、岩手県宮古市で研究室の学生が集まり、ボランティアをすることとなった。事前にゼミで映像から被災地の現状や、人々が抱えている不安を知り、自分たちに必要なことは何か、話し合いを重ねた。岩手県のボランティアセンターと連絡をとりあっていたが、現地がどのような状況になっているのか、まったく掴めない状況で、十分すぎるくらいの準備、装備を用意し、岩手県宮古市へと向かった。

盛岡市の駅に着いたときは、思っていた以上に活気にあふれていた。宮古市は、盛岡の駅から2時間ほど、電車で山の間を縫うようにして進んだ先にある、海に近い市である。盛岡の駅を離れ、緑豊かな山間部を進む。しばらくのどかな風景を楽しんでいると、次第に建物が増えてくる。瓦礫の山などは見当たらない、普通の町並みだった。よく見ると、艶やかな同じ形をした屋根の集落がある。種類は違うものの、いくつもいくつも建てられている。誰かが気づいて、声をあげる。「仮設住宅だ」と。楽しい旅行の雰囲気になりつつあった車内だが、一気に空気が冷たくなるのを感じた。次第に、楽しい笑い声も消えていった。その日の夜は談笑をする気分にもなれず、全員が早々に就寝した。

ボランティア当日の朝。宮古のボランティアセンターは、駅からしばらく歩いたところにある。長靴を履いた足で、重い踵の音をあげながら向かう。センターに着いたとき、数人の人が集まっていた。受付で作業をしている職員の人以外は、誰がボランティアに来た人なのかもわからないほど、壁がなかった。しばらくすると、続々と人が集まってきた。その日は30度近い夏日で、私たちはテントの日陰から出ることができなかった。しかし、職員含めセンターに集まってきた人々は、みな元気だった。

少し離れた場所での作業になる、と車に乗せられ移動する。すると、川の上流へと車は向かう。しばらくして、見覚えのある建物の前へと出る。同じドアがいくつも並ぶ。私たちが任された作業は、仮設住宅に資材を運び入れることだった。布団や、なべ、机はもちろん、米などの食料も支給されている。まだ、人はいない。仮設住宅ができていても入居できないのは、資材の運びいれが完了していないからだという。ゼミで集まれるだけの人数がボランティアへとやってきたので、流れるように作業が終わった。気合を入れて長靴で赴いたが、暑さを助長させるだけで役に立たなかった。そうして、数箇所の仮設住宅の集落を巡った。その中で、一組の老夫婦が、作業を嬉しそうに遠くから見ていた。これでやっと、住むことができる。そう、職員に話して帰っていったそうである。

予想より早く作業が終わってしまったので、別の場所で泥かきをしている舞台と合流することとなった。長靴も無駄には終わらなかった。到着してすぐに、磯の香りが鼻を突く。

海はまだ見えないが、近くにあるようだった。暑さで腕をまくっていたが、伸ばすよう言われた。スコップなどで手を引っ掛けて、傷口に泥が付くと、破傷風になる恐れがあるのだ。先ほどの作業とは違い、ただ泥を側溝から出すだけでも、注意が必要だった。この泥かきという作業も、テレビなどで聞くものと様子が違った。まず、スコップが泥の中に入らない。泥が固まっているわけではない。もっと、硬いものに当たって歯が止められてしまう。手で丁寧に泥を取り、やっとのことすくい出してみると、30cm ほどのコンクリートの塊だった。その他にも、どこからやってきたのかわからない岩が挟まっている。現場の監督のような人が、時々様子を見に来ては声をかけていく。そうやって、集まった人々のペースを作ってくれている。昼過ぎから作業を始め、数時間。電柱と電柱の間ほども、泥をかき出すことはできなかった。

作業終了後、しばらく自由時間をもらえたので、散策に出かける。ほんの数分歩いただけで、海へ出た。入り口のようなものが付いているが、ここにはもともと例のスーパー堤防があったそうだ。壁の大半は、津波に耐え切れずに流れてしまっている。ここは地元でも有名な海水浴場だそうだが、人は私たち以外にいない。海の中には、堤防の壁の一部が突き出して沈んでいた。

次の日、この旅行の最終日になるのだが、また違った被災地の様子を見るために海沿いの町、田老町という場所へ移動する。田老地区は震災のとき、国内最大の堤防を持ちながらも津波に襲われた。その田老の町役場の人に、お話を伺った。まだ町を囲うようにして、万里の頂上とも呼ばれた堤防が残っている。津波の直撃は避けられたものの、堤防の上を大量の水があふれ出て、町の大部分をさらっていったようだ。その堤防の上を歩かせてもらえることになった。町の様子がよく見える。瓦礫は片付けられて、土地はきれいであった。家も何もない。かろうじて、山の上の数件が残っているくらいだった。津波を目の当たりにした彼は、防災について語る。どれだけ備えをしても、十分なことはない。守られて安心してはいけない。いつでも、心の中に身を守る意識を持たなくてはならない。目を伏せながら、語っていた。最後は人の手で、人の命を守る。近代的な設備などではない。誰にでもできるような、ちょっとした注意を向けることだ。本当に大切なことを、再認識した。



石巻より

活動場所：宮城県全域（主に石巻市）
看護学部看護学科2年（休学中） 塚田祐子

あの津波の日からもうすぐ1年が経とうとしています。石巻では3月11日に向かうにつれて心の辛さを訴える方、慰霊祭の準備を静かに進める方、なぜそっとしておいてくれないのか？と怒りをあらわにする人々、様々な方と向き合い、触れ合う毎日です。今回、千葉大学の「東日本大震災に寄せて」に寄稿のお声掛けいただき感謝いたします。

現在私は千葉大学看護学部を2012年10月まで1年間休学し、石巻市に住みながら「キャンパス東北」という看護師を中心としたボランティア団体でコーディネーターとして活動しております。被災地入りしたのが4月2日、大学に週3日通いながら4日は宮城で過ごした5月～7月、8月に石巻市に引っ越してきました。活動の中で感じたことを書かせて頂きます。

2011年8月に石巻市に長期で入ることを決意し、私がやってきたことは事務局としての機能、避難所での住民さんへのケアやボランティアナースのコーディネート、仮設住宅の談話室でのお茶っ子飲み会開催などです。振り返ってみると、その時に必要だと思われることを住民さんと相談しながら手探りでひとつひとつやってきたというように感じます。

この約1年間の活動は「一体、資格を持たない看護学生に何が出来るのだ」という無力感との闘いであったようにも思います。自分の周りにはいるボランティア達は看護師やリハビリ職がほとんどでした。被災地では自己判断、自己責任での活動が基本、自分を良く知る知人は一人もおらず、本当に「塚田祐子」というただ一人のまっさらな人間としてここにいるのだと強く感じる瞬間が多くありました。初めてこの問いに正面から向き合ったのは、8月の夕方の石巻でした。私は避難所の外を歩いていて、まだ復旧しない信号、家屋解体の粉塵が目にしみて、でもその向かいの家では懸命に片づけをする人々がいました。瓦礫がまだまだあり、瓦礫の仮置き場からは煙が出て、何とも言えない匂いが街中まで漂って、未だに避難所で眠る人々がいる・・・「自分に何が出来るのか」という問いの答えは、いつでも目の前の現実の中にあるとその時思いました。目の前にいる人の為に何が出来るのかを考え、行動していくことを覚悟した瞬間でした。

この約1年の間に住民さんの生活環境は変化し続けました。発災、避難所へ行き、夏からは仮設住宅、待機所、自宅へ、市外へ行った方も多くいました。住民さんの迎える変化に伴い、私達団体の活動も変化していきました。避難所では最後の一人の住民さんが退所されるまで昼夜常駐を続けました。私が活動している団体は看護師中心の団体ですが、看護行為のみを行っているわけではありません。掃除（トイレ掃除も大量発生したハエ駆除も）、花植え、一緒に食事や散歩をしたり、避難所でカフェを開いたりもしました。活動が看護行為のみに留まらなかったのは、「人の心に寄り添う存在でありたい。生活の側に居さ

せてほしい。」というキャンパス全体が抱いていた思いがあり、思いから行為が生まれたからなのでしょう。

今、避難所や待機所は全て閉鎖され、住民さん達は自宅や仮設住宅へと生活の場を移しています。私達は仮設住宅にある談話室でお茶っ子健康相談会を開いています。お茶を飲みながら血圧を看護師が測ったり、風邪予防などの話を看護師がしたりします。私は長期滞在のスタッフとして、住民さんのリーダーと話し合いをしてお茶っ子を開いたり地域のニーズを聞いたり、短期ボランティアの看護師と住民さんを繋いだりと言う役割をしています。震災によって元々あった浜のコミュニティは崩壊されており、お茶っ子飲みという機会を通じて「震災後初めて会った」「また皆で集まりたいね」という声が聞かれるようになりました。意外でもあったのは、お茶っ子をすると皆さん、津波の日の話を自然と始めることです。「生き残った人達はね、奇跡が2つも3つも重なって今生きているんだよね」「孫が屋根の上に乗っててさ、引潮に連れて行かれるの、高台から見てることしか出来なかった」集まった人々がそれぞれの体験を話し合い、お互いをいたわり合っていました。集団のカウンセリング効果が生まれていて、相互の癒しがそこにあることを感じました。

しかし、お茶っ子参加者は多くが女性か子供で、働き盛りの男性へのアプローチが中々出来ないという問題があり、課題でもありました。中年男性は日中、浜へ出て瓦礫撤去をしています。私は「じゃあ浜へ血圧計持って訪問すればいい」と本当に単純に考えて、血圧計や聴診器を持って看護師達と浜へ降りることを決めました。漁師さんに正直、仕事の邪魔だと怒られるのではとも思いましたが、若い看護師達に血圧を測ってもらいながら少しずつ打ち解けていき、ポツリポツリと漁業復興の不安や身体の不調を看護師に話し始める様子を見て、浜訪問は間違いではないと思いました。浜へ歩いて訪問する看護師の活躍の仕方は、病院で働く看護師の姿からはかけ離れたものであるに違いありません。だからこそ病院看護師にはこの活動の仕方は想像しにくかったと思いますが、私が一人の人として考えた結果の行動でした。

私は今でこそ、コーディネーターと自分の役割を言っていますが、被災地で「目の前の人の為に自分に何が出来るか」を考えて行動することを繰り返して、人と人を繋いだり、誰かと話したりしていて気が付いたらそれは、コーディネーターという仕事でした。また、住民さんと話している時に自然と背中や手に自分の手を添えていることに、ふと気付きました。この手も、コーディネーターとしての自分も、全て住民さんから頂いた、育ててもらったと感じています。私は少しでも何か、住民さんへ返すことが本当に出来ているのでしょうか。

石巻では震災後初めて取れるワカメが収穫されています。お茶っ子のみ会で住民さんが一緒にワカメを食べさせてくれました。新鮮なワカメはそれはそれは美味しくて、何より住民さんがこのワカメと一緒に食べようと言ってくれたことが嬉しくて私は泣きそうな

ります。活動は住民さんが受け入れてくれなければ始まりません。私を受け入れてくれて
いる石巻の住民さんに感謝して、なるべく彼らの生活に寄り添って活動を続けたいとい
う想いです。



仮設でのお茶っ子的様子（宮城県石巻市）



震災から半年。大漁旗が橋にかかる。
（宮城県気仙沼市）

自分にできる事を探して

活動場所：宮城県気仙沼市
法経学部 子安奈穂

2011年3月11日、日本に突如として大地震が襲い掛かりました。特にニュース番組で映し出された東北の津波の映像は、私に多大なるインパクトを与えたと同時に、この未曾有の大震災の状況下で自分に出来ることは何かないか、と強く考えさせるきっかけとなりました。しかしながら、自宅も多少ですが被害を受けてしまったことと、大学の入学準備の忙しさをなかなか一歩を踏み出すことができませんでした。そんな自分にもどかしさを感じながら日々を過ごしている折、千葉大学主催のボランティアツアーのことを知り、なんと夏休みを利用し、低コストで被災地に行くことができたのです。

このツアーで私は宮城県の気仙沼に行かせていただきました。震災から約5か月もたっているのにも関わらず、周りにはまだ打ち上げられた漁船や線路に引っ張り返ってしまっている住宅、自動車、瓦礫など、様々なものが撤去されずに残されたままでした。前々からボランティア交流会などに参加して、現地の被害状況や活動について聞いたりしていましたが、やはり実際に自分の目でみると色々考えさせられるものがありました。

そうして様々な思いが浮かぶ中、一日目、現地において瓦礫撤去の作業が始まりました。炎天下の中、全員が長袖・長ズボン・帽子・マスクをフル装備して作業に取り組みました。すると、ヘドロの中や流木の下には機材では扱えない様々なものが埋まっており、手作業の大切さをその時に学んだのです。この作業中、私は不覚にも釘を踏み抜き、現地の方々にご迷惑をかけるという本末転倒なことをしてしまいましたが、その代わり現地における病院の状況を知ることが出来ました。病院は早朝にもかかわらず患者の方々で溢れ返って

おり、被災地の医療事情の深刻さが伝わってきました。

そして、二日目の作業においても、改めて手作業の大切さを実感しました。二日目の作業は、漁網の絡みを手で解くという地道なものでしたが、その網には依頼主の方の様々な想いが詰まっており、作業を始めるにあたって、むやみやたらに切ったりしないほしい、大切に扱ってほしいとおっしゃっていました。私もそれを聞いて慎重に作業をしたつもりでしたが、やはりボランティアから帰ってきた後に、あれで大丈夫だったろうか、本当に自分は役に立ったのか、自己満足で終わっていないかなど、かなり悩みましたし、活動したのはたった2日間だったけれども課題が自分の中に多く残りました。

以上のボランティア経験から、私は以前よりも違う視点でものを考えることが出来るようになりました。例えば、今までの自分なら聞き流していた話も注意深く聞くようになり、さらにそこから「自分に出来ること」を探し、可能な範囲で実践していきました。私はボランティアをすることで、人のために何かを考え行動することの難しさ、大切さを学ぶことが出来ました。なので、自分自身の成長のためにもボランティアをやることを周りにも伝えていこうと思います。

最後に、今回このような震災を再び振り返る機会を与えてくださり、本当に感謝しております。私はこれからも冒頭にあるように「自分に出来ること」を探して大学生活を過ごしていきたいと思っています。稚拙な文章でしたが、一読してくださった皆様、ありがとうございました。

震災を忘れない

活動場所：稲毛区役所，宮城県気仙沼市・南三陸町，大学祭
教育学部2年 米山聡美

東日本大震災が起きた当時、まさか私自身が震災ボランティアに参加し、現地まで行くとは、想像もしていませんでした。震災が起きた直後は、メディアの報じる震災の悲惨さにテレビが見られなくなるほどにショックを受け、震災から目をそらしていました。しかし、今になって考えてみると、多くの命を奪い、甚大な被害を与えた東日本大震災に、私がきちんと向き合えるようになったのは、震災ボランティアに参加したことが大きなきっかけとなっていたように思います。

私が初めて参加した震災ボランティアの活動は、稲毛区役所での救援物資仕分け作業です。千葉県でも、浦安市などが地震の被害にあっていたことはもちろん知っていましたが、震災直後の落ち着かない雰囲気の中、現地まで行きボランティア活動をするという勇気は私にはありませんでした。それでも、時間のある学生が震災復興の力になるべきなのではないか、という考えがあり、身近でできる震災ボランティアを選び参加した次第です。

支援物資の仕分け作業を通して、多くの人が震災復興のために尽力していることを肌で

感じました。多くの方の協力により、多くの物資が東北に贈られたことに、微力ながら貢献できたのではないかと達成感を感じたことは、今でも忘れません。この活動が震災後間もない4月はじめに行われたこともあり、人々の震災への意識が高く、そのような雰囲気刺激され私自身もっと何かできないだろうか、この活動をきっかけに思い始めました。

その仕分け作業を紹介していただいたことで、ボランティア・コーディネーターの存在を知りました。そして、多くの学生達にボランティア活動に参加してもらう機会を提供したい、という思いからボランティア・コーディネーターとなることを決めました。支援課の方に後方支援をしていただき、夏には二度の千葉大学ボランティアツアーを実現することができました。このツアーが、私が初めて現地で行ったボランティア活動です。二度にわたる現地での活動を通して感じたことは多々ありますが、私が強く感じるのは、「震災を忘れてはならない」ということです。東日本大震災からもうすぐ一年が経とうとしています。一年前はあれほど多く報道されていた震災のことが、今では報道されることが珍しくなるほどになってしまいました。私の周囲の人々の間からも震災の話題が出ることは減りました。もちろん、震災を忘れたわけではないでしょうが、日本全体が震災を過ぎ去った過去のこととしてとらえているような気がしてしまいます。現在でも、東日本の復興はまだ必要とされていることは確かです。「震災を忘れない」ために「震災ボランティアに参加するべきだ」と、直列に繋ぐことはできないかもしれませんが、「忘れないための一手段」として「ボランティア活動」が今後も継続されていくことが私の理想であり、自身の目標でもあります。

「9月あたりまでは積極的にボランティアに参加する人が多かったが、2012年に入りその人数が激減している」という新聞記事を最近目にしました。私が現地を訪れたのは8・9月で、道も所々でこぼこのままで、瓦礫の撤去が済んでいない土地がほとんどといった状況でした。あれから半年たった今では現地の状況は大きく変わっていることでしょう。それでも、ボランティアは形を変え、今でも必要とされています。体力と時間のある学生の若い力が、必要なのではないのでしょうか。震災ボランティアと言っても、現地に行くことだけがそれだけではありません。遠く離れた関東でも、さまざまな形で震災ボランティアがなされています。体力がない、お金がない、時間がない等の不安から、震災ボランティアのハードルが高くなってしまっていることに、震災ボランティア参加者の方々とお話をする中で気がつきました。ボランティアがもっと身近になるよう、誰もが参加しやすいよう、ボランティア・コーディネーターとして、今後尽力していけたらよいと思います。



ボランティア活動を通じて感じたこと

活動場所：稲毛区役所，宮城県気仙沼市
教育学部 遠藤加奈

東日本大震災が起こってから，一人暮らしをしている私は，家族の無事を確認し，自分を落ち着かせることで精いっぱいでした。携帯電話が繋がらないため，毎日公衆電話に通い，福島県に住む家族に電話をかけていました。そんな時，福島県に住んでいる友達が，避難所になっている体育館で炊き出しのボランティアをしているということを聞き，私も家族や友達の無事を願うだけでなく，被災された方々のお手伝いをしたい，積極的に働きかけたいと思うようになりました。

しかし，具体的にどうやってボランティアを探したらよいか分からず，友達と千葉大学のボランティア活動支援センターに行きました。そこで離れている私たちでもできるボランティアを探し，稲毛区役所で救援物資の仕分け作業のボランティアに参加しました。そして，自分が，「ボランティアをしたいけど，どうやって探したらよいかわからない」と困った経験から，同じような悩みを持つ学生に協力したいと思い，ボランティアをしたいと思っている学生に支援をするボランティア・コーディネーターになることにしました。

それからは，ボランティア・コーディネーターとして様々な活動をしてきました。

8月には，千葉大学主催のボランティアツアーに参加し，宮城県気仙沼市で，がれきの撤去と漁網をほどく作業をしました。実際に自分の目で被災地の様子を見たのは初めてで，改めて今回の震災の恐ろしさを実感しました。とても暑い日だったせいもあり，がれきの撤去も漁網をほどく作業も，どちらも想像以上に重労働でしたが，特に2日目に行った漁網をほどく作業では，人手の重要さが分かりました。絡まった魚網をできる限り傷つけないようにほどくのは，絶対に人の手でなければできない作業です。活動できたのはそれほど長い時間ではなく，途中になってしまった作業は今後どうなるのか，本当に役に立てたのか，と不安になったこともありました。実際に被災地で活動する機会を持てたことで，今回の経験を今後に活かしていきたいと思うようになりました。

その後，ボランティア・コーディネーターとして，大学祭で宮城県の物産展を開いたり，他のボランティア団体を招いて交流会をしたりしました。現在震災ボランティアの意識が以前と比べて低くなってきていると言われていています。しかし，これらのことを通して，まだまだ被災地のために支援を続けていきたいと考えている人たちが多くいることが分かりました。資金や人員不足など，継続していくには様々な問題があります。私は，これからも自分が活動を続けていくことはもちろん，それに加えて震災ボランティアを続けていきたいと考えている人達とともに，今後の課題解決にも取り組んでいきたいと考えています。

“記憶の風化”を考える半年

活動場所：第1回&第2回ボランティアツアー、復興支援シンポジウム
看護学部看護学科2年 藤原香奈絵

今まで私は、夏休み以降、ボランティアツアーや文部科学省でのフォーラム、千葉大でのシンポジウムに参加させていただきました。これらの活動をするには、震災前では全く予想もしなかったことで、この震災をきっかけに、「自分は何をできるのか、何がしたいのか、大学で何を学びたいのか」を考えさせる一年になりました。そして、この活動の中で「震災の記憶を風化させたくない」と思いが強くなりました。

3. 11の震災時、私は千葉のバイト先で、大きな揺れや停電に襲われました。真っ暗の店内で周囲の人々が混乱する中、事務所にあったラジオを使いニュースを聞き、東北で大きな津波が発生していることを知り、「千葉にも来るのではないか」という恐怖すらも覚えました。それからTVで移る被災地の様子や被災者の方々の姿を見て、被災地に行きたいと思いました。が、被災地への行き方や必要な道具などが分からず、結局何も出来ないと思ったときに、千葉大学主催のボランティアツアーの存在を知りました。私のようなボランティア初心者向けのツアーであることも知り、前に被災地に行ったことがある方のお話や写真を伺うことで、ボランティアに対する不安も減り、参加することを決めました。最初は「ようやく現地に行くことが出来る！」という前向きな気持ちであったことを覚えています。

しかし、現地に着いたとき見たものは、建物が壊され、船が打ち上げられ、人の姿が見えない石巻の姿でした。TVではそれぞれの地域ごとに映し出されている被災地も、バスで海岸沿いを走れば、果てしなく続いているかのよう。がれき撤去のお手伝いをしたお宅でも、40人近くが一日かけて田んぼのがれきを撤去しましたが、それでも石巻の一部に過ぎません。途中で見えるがれきの山を見ながら、「自分には出来ることが限られてしまう。何かしら支援が継続しなければ、復興というものはまだ先のことではないか」と肌で感じる経験でした。

しかし、震災から時間が経ち、徐々に下火になり始めていた現状がありました。「継続してボランティアに参加したい」。そう思った私は、文部科学省主催の「全国生涯学習フォーラム」と、学内で行われた「震災復興支援シンポジウム」の発表に参加することにしました。この時、学内で行われたボランティア活動を調べる担当でしたが、多くの学生や団体が活動し、その活動の内容が募金活動から学習支援まで多種多様であること、ただ時が経つごとに、その数が減っている事が分かってきました。やはり時間には逆らえないのか、と思う一方で、震災を機に全国の学生が活動している事、千葉大学の様々な分野で震災復興に力を入れている事などを知る、良いきっかけにもなりました。シンポジウムでは、附属病院の医療支援、放射能汚染地域の復興にむけた協働についてのプレゼンを聞く機会も

ありましたが、どちらも「研究・活動している事を、被災地支援にどう還元するか」が共通項として存在し、千葉大学として、今後の活動の課題となると感じさせるものでした。

時間が経つごとに震災の記憶は風化していくと思います。ただ、その風化していく速度は、例えば支援活動の継続、情報の発信などの行動で遅くすることが可能ではないでしょうか。マスコミで報道されているだけでなく、学生という形で活動することは、ほかの学生にも影響がより強く出るのではないかと思います。私自身、専門分野に進む中で、ボランティアに関わる機会が減っていくと思いますが、そうした「風化」を遅くできるような、そんなボランティア活動に参加していきたいと考えています。

私が見た石巻

活動場所：宮城県石巻市A小学校
教育学研究科1年 益田亜矢子

東日本大震災以降、報道やインターネットで、被災地の様子に触れるたびに「私にできることは何か」「可能な限り、大学で学んできたことと近接する形で活動したい」と考えていたところ、指導教官の^{あららぎ}蘭先生より、支援組織「さくらサポート」をご紹介いただいた。さくらサポートは、蘭先生のお知り合いである小澤美代子先生（前千葉大学教授）が、今回の震災支援のために立ち上げられた組織である。さくらサポートの先生方は、2011年4月より毎週のように石巻市A小学校で支援活動をなさっている。私は、大学院の夏休み中に同行させていただくという形で、2011年8月と9月にそれぞれ2泊3日の日程でA小学校での支援活動に参加した。

A小学校は現在、元々の校舎よりも2kmほど内陸にあるB中学校に一時移転しているため、子どもたちは、地域を循環するスクールバスで毎日通っている。支援活動の朝は、このバスで到着する子どもたちを迎えるところから始まった。期間中は、子どもたちと過ごすほか、運動会練習などの行事支援、救援物資の仕分け作業、季節の掲示物の作成などに関わった。

子どもたちとは、音楽、図工、体育などの授業補助の他、休み時間に一緒に外遊びをしたり、歌ったりして過ごした。その様子を見て、大震災の後という尋常ではない生活環境の中でこそ、楽しい時間や仲間と関わる時間の保障が大切なのだと実感した。



A小学校には、全国から様々な救援物資が連日のように届いていた。筆記用具、ノート、児童書、衣類、おもちゃなどを品物ごとに仕分け、大体の数を把握することが主な仕事であった。特に文房具類は、学年によって使える物が異なってくるので、鉛筆をB・2B・HBに仕分けるなど、二次的な作業が必要だった。全国の皆様からのお気持ちを早く子どもたちに届けたいという思いで作業を進めていたが、A小学校の先生方のお話から「頃合いを見計らって渡す」ということが大切なのだと思った。「知らない誰かから、無条件に品物が届く」という環境で子どもたちが「物をもらえて当たり前」という気持ちにならないようにしたい、ということをつづった。実態に見合った支援が求められているのであり、それが一番、物資を送って下さった人の気持ちを活かすことになるのだと学んだ。



既に1万本以上の鉛筆が届いている (2011年9月)

9月27日には、さくらサポートの先生方の案内で、石巻市街の様子を見に行く機会を得た。海に近づくにつれ、津波の被害の大きさを目の当たりにした。日和山のふもとは、住宅地が広がっていたのだそうだが、津波と火災で多くの家々が流失・焼失してしまっていた。土台だけが残っている家が多く、食器の破片や泥をかぶった家財道具もそのままになっていた。辛うじて残った家も、外壁が割れて断熱材もむき出しになっていて、言葉を失うばかりの光景だった。家や物が、人間と同じ言葉を持つのなら、それはどんな言葉になるのだろうと感じた。

日和山からは、石巻の市街と海を臨むことができる。こんなに青い海が、あの日、真っ黒な津波となって街を襲ったと思えないほど凪いでいた。写真のように、海に近い空き地には、街の瓦礫が重機で集められていた。瓦礫の処理が間に合わないため、この空き地に暫定的この空き地に暫定的に集め、埋め立て地のように押し固めているようだ。瓦礫の山の高さは、およそ15メートルほどになっている。日和大橋の高さにほぼ相当する瓦礫にも驚いたが、被災から半年を経ても尚、人々の生活にも様々な影響を与えていることを目の当たりにして驚くばかりだった。例えば、市内を流れる旧北上川の沿岸では、震災の影響で80センチ程地盤が沈下したため、満潮の時間になると道路に海水が流れ込んでしまっていた。また、停電で信号機が機能しない交差点には、他県の警察官の方が立ち、交通整理をしているところも見て、予想以上の被害の大きさと、復興を支えているたくさんの方がいることを感じた。テレビや新聞で見たことで「知っているつもり」になっていた自分に気がつき、少し恥ずかしいような申し訳ないような気持ちになった。

日和山から街を見渡していて強く感じたことは「この街で見聞きしたことを忘れない」「支援活動を通して感じたことを忘れない」ということである。そして、千葉に帰ってから、今回の活動を通して見聞きしたことや感じたことを、周りの人たちに伝えることが、今の私にできる役割だと考えている。



保健室の用品（上段）と仕分けたノート（中・下段）



運動会向けの掲示物を作成。（2011年9月）



様々な救援物資。職員室の隣の部屋で保管・仕分けをしている。（2011年8月）

ボランティア活動を通じて感じたこと

活動場所：RQ 市民災害救援センター
教育学部生涯教育課程1年 塚田萌

3月11日に震災が起きてからずっと、私の中には漠然として、それでいて強い“何かしなくては”という思いがあった。しかし、実際に決心がついて行動に移せたのは、震災から6ヶ月もたった9月の中ごろ（夏休みも終わりに近づいたころ）だった。もう少し早く行動に移せていればと今でも思う。

私が参加したのは、RQ市民災害救援センターという、東日本大震災の被災者救援のために3月13日に発足し、宮城県登米市を拠点に活動している任意団体である。ボランティアに参加する人びとは、今は廃校となってしまった小学校で寝泊まりしながら、小泉・唐桑・歌津など、南三陸町から気仙沼にかけての地域に、がれき撤去の作業や、仮設住宅の冬支度のお手伝い、地域のお祭りのお手伝いなどをしに行く。

はじめて9月に行ったときは、唐桑のがれき撤去作業、“道の駅フェスタ”というお祭りの屋台のお手伝いをした。がれき撤去に行ったときは、恐ろしいほどの殺風景に胸が苦しくなった。また、震災から6ヶ月もたっているにもかかわらず、いまだ手のつけられていない（重機が入っていない）家や建物の多さに愕然とした。重機を入れる前に、細かい分別をしなくてはいけないため、そういった手でやる作業をする人材が明らかに足りていないと感じた。私が行った作業は、木とコンクリを分別するなどの単純作業が多かったため、無心になってやっていたが、ときどき、ミニカーなどの玩具や、アルバムなどが見つかることもあり、そういう時は自然と手が止まってしまった。ここにはかつていろいろな人たちの生活があり、がれきと呼ばれる物にも、ひとつひとつ大切な思い出がつまっている。そういったものをがれきとして私たちが処分してしまうことに少なからず抵抗を感じてしまった。しかし、“道の駅フェスタ”で隣に屋台をだしていたおばさんは「家とか全

部流されちゃったけど、家族みんな無事だし、泣いていたってしょうがないしね」と、もう前を向いていた。私たちが悲しむのではなくて、憐れむのでもなくて、前を向いている人びとを少しでも助けられる支援をしていかなければならないと感じた。

二回目にいったときは、小泉のがれき撤去作業、仮設住宅の冬支度のお手伝いをした。11月（一回目から2ヶ月後）に行ったが、やはり状況はさほど変わっておらず、今回の地震がいかに規模の大きいものだったかを改めて感じさせた。また、仮設住宅に関しても地域によると思うが、私が伺った地域は急いで作ったためか、人が快適に過ごせる環境とは言い難いところであった。隙間風がはいってきたり、寒い朝には結露が見られたり、また隣の家（仮設）の音が聞こえたりする。仮設住宅に住むのは、お年寄りが多いため、そういった方たちがこの環境下で今後も生活をしていくことに不安を覚えた。また、私たちが作業をしに伺うと、その家の方たちがお昼を用意してくださったり、お茶休憩に呼んでくださったりと、一緒にお話をする機会が多かった。地震で家を失い、顔見知りも少ない地域で、とても心細い思いをされているようだった。被災地の復興とともに、被災された方々、特にお年寄りや子どもの精神的なケアもしっかり行っていく必要があると感じた。

二回の現地ボランティアを通して感じたのは、今回の震災はとても規模の大きなものであり、長期的なスパンでの支援を考えていく必要があるということ。そして、そのためには、地域（被災地）の人たちが自分たちの力で復興していくのを待つのではなく、ボランティアの力だけにまかせるのでもなく、地域（被災地）の人たちと一緒にその地域をもう一度作り上げていくことが必要である。つまり、ボランティアがどれだけ地域に根づいた支援をしていくか、地域のニーズを把握できるのかが重要になってくるように思う。

また、ボランティアを終えて、帰ってくるたびに感じたのが、被災地とそうではない地域があまりにも違う世界になってしまっているということである。あれだけの衝撃を受けたのにもかかわらず、戻って普通の生活をしていると、徐々にその衝撃が薄れていく。また、私たちがふだん生活している中で、被災地の話や原発の話が会話に出てくることはほとんどない。それだけ、大学（に限るわけではないが）と被災地は違う世界になってしまっているということである。今でも仮設住宅で暮らしている人や、違う地域に避難している人は多く存在する。また、原発の問題は現在も進行形である。大きな行動でなくとも、私たちが自分のこととして関心を持ちつづけることは大切であり、復興にむけての大きな一歩につながると思う。

二回目にボランティアに行ったとき、被災地の方に「ボランティアに来てくれるのはすごくうれしいけど、自分の人生も大切にしてほしい。この経験を生かして自分の道をすすんでほしい。」と言われた。今後私は、今できることは何か、大学生という立場でできることは何か、どう関わっていけばよいのか、短期ではなく長期で支援していくためにはどうすればよいのか、もう一度しっかり考えていきたい。

石巻でのボランティア活動で感じた事

活動場所：宮城県石巻市
園芸学部2年 匿名

私は震災ボランティアとして9月14～16日まで、ピースボートの短期ボランティアに宮城県石巻市まで行ってきました。

行く動機としては、実際に津波の現場を自分の目で見てみたいというものがありました。

9月にもなると被災地以外では電力供給以外においては大方普通の生活に戻っていましたが、その時被災地は一体どのように復旧が進んでいるのだろうと思っていました。

現地での流れとしては宿泊施設で装備をした後、少数のグループに分かれて漁業支援や側溝のヘドロ除去といった作業を一日中しました。現地の人々のニーズに応ずるのがボランティアの役目でしたので、様々な班の人が個々に異なる体験をしていました。中には地元小学校の運動会のお手伝いという方もいました。

私は三日間側溝などのヘドロの除去にあたりました。初日住宅地の側溝のヘドロ除去を行った際、生まれて初めてヘドロというものを見ました。最初はいろんな物質が混ざった、黒くてネバネバしているヘドロに対して抵抗がありました。けど自分たちが担当した側溝が綺麗になっていくのは見ていて嬉しいものがありました。初日の夕方ヘドロの除去が終わって、頑張った後のシャワー(仮設のものでしたが)はすごく気持ちよかったです。二日目、三日目は廃棄物処理工場の裏手のヘドロの除去にあたりました。細い路地にあったヘドロでしたので、土や砂利とヘドロが混ざり合って初日より大変でした。けど、みんなで役割を分担して行ったので、無事除去することができました。

次に、ボランティアに参加したことに対する感想です。まず、私が一番参加して一番感じた事は、震災は全く終わっていなかったということでした。初日のボランティアが終わった後、再開したコンビニに軽食を買いに行くついでに近くの海沿いを見に行こうと数人で歩いたのですが、道中の半壊の家や港に積み上げられた廃棄物の山を見て、私たちのグループは会話の口数が減り状況を見渡してしまいました。確かにコンビニは再開していましたし、営業している飲食店もあります。けど、半分以上の土地がやっとながれきの撤去が終わっているだけの状態でした。また、リアス式海岸の地域にある女川もいったのですが、こちらはもっと復旧が進んでいませんでした。地盤沈下で市街地の半分以上が海水に浸かり、狭い湾の影響で高波が襲ってきたこの街は、横倒れしている建物や外の窓枠以外全て流されてしまった建物が多くありました。女川という町は20m近くの高台の上に大きな病院があるのですが、ボランティアのリーダーさん曰くその病院の1階まで水が押し寄せてきたそうです。そんな町の状況を見て、震災から半年以上経ってこのぐらいの復旧なのかと私は心底思いました。私たちは砂利を敷き詰めて作られたアスファルトの道路の上を

通って女川町の市街地へ行きましたが、この新しい道が無い時ここはいったいどんなだったのだろうと思いました。私は普段は関東にいて、震災のことについては節電を気にかけるぐらいです。自分のアパートで普通に自炊できますし、駅の近くに行けば飲みに行くこともできます。カラオケや買い物にだって行くことができます。私の生活は極めて日常であるといえます。けど、自分の状況に問題が無いからといって被災地の事を全く意識しないのはどうなのか、と自分自身に思いました。

次にボランティアで感じた事は、仕事に対する充実感です。確かに泥だらけになったり、一日中肉体労働を行ったりしましたから、ボランティアの活動は大変でした。けど、何かの為に自分が動く、その活動を周りの人と協力して行う事にとっても充実感を感じました。ヘドロの除去が終わったときの達成感はとても気持ちがよかったです。人の為に動き、人と一緒に活動を行うことの満足感は普段では得られないものでした。普段の大学生活よりずっと充実感があったと私は思います。

そして最後に感じた事は、人とのつながりや生きている事についてです。被災地の人は、生き残った人達で協力し合って復旧を行っていました。普通に生活している状況と大変な状況では、周囲の人の大切さの感じ方がとても異なるのだなと思いました。確かに被災地では多くの方が辛い経験をしたと思います。一日のボランティアの活動が終わった夜に現地の復旧支援団体の方から聞いた話ですが、震災で行方不明になった娘を探すために教壇を下りてブルドーザーの免許をとり、行政の捜索が終わった後も自分で探した母親がいたそうです。そうして自分の娘を見つけた時、その両親は娘に対して「おかえり」と言ったそうです。私はボランティアを終えて半年経った今でもその話を思い出すと、なんとも言えない気持ちになります。生きていなくてもいいから大事な人に会いたいと思っていて、それでも会えない人達がありました。けど、その人たちはそれでも一日でも早く生活を元に戻りたいと皆で協力していました。そんな人たちと会って、そんな人たちに協力すると、不思議と私たちボランティアの参加者のほうが元気づけられるのです。私たちがお手伝いに行ったのに、私たちはいろんなものを被災地の人々からもらいました。確かに被災地にいた時間は短いものですが、その時間はとても多くの経験と考える糧を私にくれました。

これを書いている時は三月三日なのですが、あの震災からもうすぐ一年になります。自分の生活は元に戻った人が、特に被災地以外では多いでしょう。ネットのニュースを見ても、芸能人の話題や政治家の問題でトピックスはいっぱいです。けど、それが世の中の全てじゃないのです。大変な事があっても、前向きになって皆と協力しながら生活している人だっています。震災は、一時的な話題ではありません。一年前から今まで続いている現実です。普通に生活することができる私たちは、それを忘れてはいけないのではないかと思います。

震災から半年、見えた現実。伝えたいこと。

活動場所：宮城県石巻市
園芸学部緑地環境学科2年 小針香澄

平成23年3月11日、東日本大震災は起きました。テレビで流れていた映像は今までに見たことがないひどいものでした。そして震災から半年が経った10月15、16日に私はピースボート主催の被災地ボランティアに行ってきました。別に友達と示し合わせて行ったわけではなく、ただ、大学生という自由がきくこの時期にこのような災害が起き、こんな自分でも役に立てるものなら行って出来る限りのことをしてみたいという気持ちからです。ここでは私が活動した中でも特に印象に残った漁業支援の活動を中心に話をしたいと思います。

2日目の朝、漁業支援を行うため私たちはバスに乗ってカキの養殖を手伝うために荻浜へ向かいました。前日は雨が降っていて私たちは外に出ることができなかつたためこのとき初めて町の様子を見渡すことができました。バスの窓から見渡したその町はとてもきれいでした。ほとんど何もないのです。ところどころ家があっても一階部分は柱だけで二階部分だけ残っているような家です。あたりに山になっていた瓦礫は先に来たボランティアの方々が片づけてくださったということでした。おそらくそのあたりは家がたくさん並ぶ住宅街だったのでしょ。そのような跡が見受けられました。津波の力というものがどんなにすごいものだったのか、震災から半年が経っているにも関わらずまざまざと見せつけられました。私は何も言葉にできませんでした。

しばらくバスに乗っていると荻浜に到着しました。そこにはとてもきれいな海と山が広がっていました。小さな浜です。しかし辺りをよく見てみると街灯が海の中から生えています。地盤沈下しているのです。こんな美しい場所でも津波は大きな被害をもたらしました。荻浜は入江になっているため津波によって多くの水が流れ込み、漁師さんを含むたくさんの方々がお亡くなりになりました。津波が引いた後も、浜は瓦礫がひどく漁師さんたちはカキの養殖自体もうやめてしまおうとしていました。そこでピースボートのボランティアが入り懸命の瓦礫の撤去を行ったそうです。次第にきれいになっていく浜の姿を漁師さんたちが見て、ようやく「もう一回やってみよう」と考えてくれるようになりました。これを聞き、人の思いを動かすのはやはり人の思いなのだ、というのを胸に熱く感じました。

カキの養殖というのは二年物です。つまり今年作業を行っても収穫できるのは二年後です。震災前に養殖していたカキは津波でほとんど流されてしまいました。そして津波で流されたのは作業場や船も例外ではありません。漁師さん一人あたりの被害額は相当なものになるそうです。そこで今はカキの養殖と同時に、今年に収穫することができるワカメの養殖も共に行っています。漁業支援はいくつかのグループに分かれそれぞれ作業を行いま

した。そして私たちのグループではカキの種付けを行いました。カキの種付けというのはカキの赤ちゃんがたくさんくっついているホタテの貝殻をロープにたくさんはさんで、海に吊るすためのものを作る作業です。ロープを緩めて、貝をはさんで、ロープを締めて…という作業を永遠と繰り返します。作業をしている漁師さんたちはとても元気です。私たちはそんな笑顔の素敵なお漁師さんたちに逆に元気づけられていました。休憩中、漁師の方に養殖のお話を聞くことができました。今はホタテの貝殻にいっぱいついているカキの赤ちゃんですが実際に海に入れて大きくなるのはその中の一部だけなんだそうです。「カキも人と一緒に強いやつが生き残るんだ」、漁師さんがそうつぶやきました。これまで漁師さんたちと一緒に楽しく作業をしていて忘れかけていた、ここで起こった悲惨な出来事を改めて思い知らされました。漁師さんたちは仲間や家族を失ったにもかかわらず、それを乗り越えここで作業をしているのです。漁師さんの心の中に残っている暗い影が見えたこの瞬間、改めて震災の、津波の恐ろしさ、どうしようもなさというものを思い知らされました。そして、そんなつらい状況に今なお置かれているにもかかわらず漁師のお父さんお母さんたちは笑顔で作業をしているんです。とても明るく良い人たちです。「学校あるのに来てくれてありがとう」と、こちらの心配までしてくださいます。本当に強くて優しい人たちです。私は漁師さんのこの言葉に対してなにも返すことはできませんでした。ただ心の中には今なお強く残っています。

お昼の休憩時間には船で海にでていたグループが戻ってきて、カキを持って帰ってきてくれました。あの津波を乗り越えて僅かに残っていたカキです。そんな貴重なカキをお父さんたちは私たちにふるまってくれました。お父さんお母さんたちが一生懸命育てた生ガキは本当にプリプリできらきら輝いて…とてもおいしかったです。勢い余って私は3つも食べてしまいました。それだけおいしかったし、それだけ愛情に満ちたカキでした。帰り際に漁師のお父さんお母さんたちが言いました、「2年後育ったカキを食べに来てね!」と。絶対に行こうと思いました。

近頃テレビなどのメディアで被災地について報道されることは以前に比べてだいぶ減ってしまったと思います。それに伴いボランティアの数も大幅に減少してしまったそうです。現地の方にとってボランティアが来てくれているというだけでも大きな心の支えになるそうです。だから、たくさんの人たちが東北のことを気にかけているのだということを現地の方に伝えてください。そのために理由はなんでもいいのでボランティアに行ってください。行けないにしてもなにか行動してください。行動しなければ何も始まりません。2日間はとても短い時間でした。正直もっと現地に居たかったです。けれどその2日間で得ることのできた経験はとても大きなものでした。わずかな期間でしたがそこで得られたものを私はできるだけ多くの人に伝えたいと思います。この冊子に寄稿するというのもそのためです。それが私にできる数少ない後方支援なので。東日本大震災は終わっていません。とにかくそれだけは心にとめてほしいです。

ボランティア活動を通じて感じたこと

活動場所：千葉大学西千葉キャンパス，宮城県南三陸町
法経学部総合政策学科 石澤裕

私は、千葉大学環境 ISO 学生委員会の一員として、千葉大学キャンパス整備企画室と共同で「自転車をつなぐ復興支援」プロジェクトを進めてきた。当プロジェクトでは、2011年10月に、千葉大学内の放置自転車約50台を整備して、宮城県南三陸町へ寄贈を行うというボランティアを行ったのである。

当プロジェクトは、東日本大震災で被災した地域の方々への移動手段の提供を目指して企画したプロジェクトであるが、千葉大学キャンパス整備企画室の発案で始まり、当委員会のメンバーの学生とキャンパス整備企画室の教職員が共同で進めてきた。当委員会では、日頃から本学キャンパス整備企画室と協力して、大学構内や周辺地域の自転車に関わる問題の改善に向けた調査・協議を行っているが、2011年3月に発生した東日本大震災以降、被災地では自家用車や自転車等の交通手段が失われており、震災後はそれらに関するニュースが多く報道されていたので、私は千葉大学内の放置自転車を整備し、それを寄贈することで、被災した地域の復興支援になればという思いが強かったため、当プロジェクトの責任者を引き受けることになり、南三陸町へ自転車の寄贈を行うまで、一連の活動を行ってきた。今回、私は、当プロジェクトの責任者として、活動を通じて感じたことを記していこうと思う。

活動を通じて私が感じたのは、ボランティア活動は精神面で成長をさせてくれるということである。被災した地域の方々へ自転車を寄贈するために、企画から始め、関係者と調整しながら、学生ができる活動をしていったが、実際、活動してみると苦労の連続であった。一番苦労したのは、プロジェクトをする人数が少なかったことである。大学の教職員に許可を取って、千葉大学内の放置自転車のなかで、寄贈する自転車の選定を行い、所有者への寄贈の許可を取る確認作業等、地道な活動をしたが、そもそも学生が活動できるのは、講義と講義の間の空きコマや昼休みの時間が中心で、当初は、100人以上いる委員会に呼びかけても集まったのは5人程度であった。ただ、大学からの協力を得て、プロジェクトを進めることができていたので、使命感は持っていたし、なんといっても被災した地域の方々のために一刻も早く寄贈を行う必要があるといった気持ちを私自身はもっていたので、当初予定していたスケジュールから遅れても、5人程度で、自転車の寄贈に向けた活動を継続し、徐々に協力してくれる人が増えて、最終的に自転車の寄贈を行うことができたのである。企画を立案し、限られた時間のなかで、目的に向けて活動をしていくのは、容易なことではなかったが、だからこそ私は精神面で成長できたと感じたし、被災した地域の方々のことを思って活動をすることで、思いやりの心を育むことができたと感じたのである。

私は、実際に、2011年10月に、宮城県南三陸町へ行って、自転車の寄贈を行ったが、想像していた以上に被害が深刻で、自転車を有効に使用してもらえるか不安になったし、それに加えて、私達がやったことはほんの小さなことでしかないので、もっとボランティアをしていかなければならないといった気持ちになったが、その一方で、約半年間かけて継続してきたプロジェクトの目的が達成できて充実感を感じることができたのである。

このように、「東日本大震災」が契機となって始めた、被災した地域の方々に自転車を寄贈するというボランティア活動によって、私は、精神面で充実ができたし、何よりも貴重な経験ができたと思う。ボランティア活動は、ボランティアを受ける人はもちろん、ボランティアをする人にとってもプラスの影響をもたらしてくれるものだと思う。「東日本大震災」後に、千葉大学でも復興支援に向けたボランティア活動が広がっていったが、こうした動きを無駄にしてはいけないと思うし、私自身もボランティア活動を通して培った経験を今後の人生に生かしていきたいと強く感じたのである。

被災地に行って

活動場所：宮城県
文学部 匿名

震災からおおよそ8カ月後の11月、遅ればせながら、初めて被災地を訪れました。場所は宮城県仙台市若林区。最も津波の被害の大きかった地域の一つです。仙台湾沿岸の一面の平野で、もともと農業の盛んな土地です。しかし今回の津波であたり一帯冠水し、塩害などの影響があったそうです。稲に関しては少なくともあと一二年は栽培することはできないだろうとのことでした。また、大きな瓦礫の処理は大方済んでいたものの、あちこちで道路が陥没・隆起していたり、倒壊した家屋の再建が遅れていたりと、まだ復旧したとは言いがたい状態でした。

お手伝いさせていただいたことは、側溝に溜まった泥土をかき出すことと、田圃に残る、津波が運んできた細かな木くずや石を手作業で取り除くことです。どちらも機械に頼ることができない、人手を要する作業で、これからも多くのボランティアが必要とのことでした。

印象的だったことは、その日参加されたボランティアの多くが地元の方々だったことです。土日ということもあり、40～50人くらい参加されていたのですが、そのほとんどが近くに住む大学生や中学生、市内に勤める社会人の方々などでした。また、お世話になった「ReRoots」という団体も地元の方々や東北大学、東北学院大学の学生を中心に結成された団体です。

自らも被災されているにもかかわらず、自分のことだけを考えるのではなく、「地域」全体の復旧・復興を志向し、そのために互いに協力し合おうとする姿勢にはたいへん感心し

ました。

それに引き替え、最近被災地を訪れるボランティアが減りつつあるという報道がしばしばなされます。今年1月に災害ボランティアセンターを介して活動された方の人数はピーク時（4～8月）の十分の一以下だそうです。いま求められていること（それが把握しづらいこともたしかですが）には協力したいし、協力してほしい、というのが思うところです。

被災者の方々の復旧に対してひたむきな姿を見て、本当に微力ながら、これから自分でできる精一杯の支援を続けていきたいとそう思うことができました。

福島県富岡町立小中学校との交流活動に参加して

活動場所：福島県三春町
教育学研究科修士1年 相良好美

2月3日、福島県富岡町立小中学校との第一回目の交流活動のため、学生・教職員を乗せたバスは福島県三春町に向かった。福島第一原発から南に10キロほどの距離に位置する富岡町は、全域が警戒区域となり、すべての町民が避難生活を強いられている。福島第一原発の事故後、町の行政機能は郡山市に、町内併せて4つの小中学校は三春町に合同で三春校を構えることとなった。

私が今回の富岡町立小中学校との交流に関わることになったのは、私が福島県相馬市の出身であること、そして父が、その4校のうちの1校、富岡町立富岡第一中学校に勤めていることがきっかけであった。3月11日、私は千葉において、父は富岡町にある富岡一中に、同じく教員である母は南相馬市内の中学校にいた。地震発生直後、両親には何度も電話をしたが、なかなかつながらない。父と連絡を取ることができたのは夜になってからだった。その電話で、今から学校を施設して実家のある相馬市に向かうこと、津波は学校のテニスコートまで達したこと、その日は卒業式でほとんどの生徒は残っていなかったが、みんな校舎の3階に避難したこと、学校と海のあいだに位置していたJR富岡駅は津波で流されてしまったことなどを聞いた。つい2か月前、父が富岡駅のホームで私と弟が乗る上野行きの特急電車を見送ってくれたことを思い出すと、なんとも言えない気持ちであった。その後、原発の事故により、富岡町全域に立ち入ることができなくなり、「学校」そのものが失われかねない状態となっていた。三春町に合同で学校を構えることになったと父から伝え聞いたのは、8月の末、夏休み明けのことであった。

交流活動は、まず小学校の各学年の授業参観にはじまった。クラスは各学年1クラス、学年によってばらつきはあるものの、おおむね3～10名程度であった。本来は小中学校4校併せて千数百名が在籍していたが、この三春校に通っているのはわずか80名程度である。児童生徒たちはみな、近隣の仮設住宅など避難先からバスで通っているとのことであ

った。クラスには千葉大の学生・留学生が3名ずつ入り、給食の時間をともにした。お昼休みは学校そばのグラウンドで、一緒になって雪遊びを楽しんだ。太平洋に面している富岡町は本来、積雪が少なく、富岡町にいた頃は雪遊びをあまりしたことがなかったのだと子どもたちが話してくれた。この数カ月の三春校での学校生活において、子どもたちは今いる環境の中でさまざまな遊びを覚えたようで、雪遊びに慣れていない大学生たちにいろんな遊び方を教えてくれた。午後は、豆まき集会を行い、各自が「自分の中から追い出したい鬼」を追い出した。

私が今回子どもたちの姿を見て驚いたのは、子どもたちが、30数名の大人たちが教室を出入りしても、あまり気にする様子がなかったということである。事故後、避難所にも、学校にもたくさんのメディアや大人たちが連日のように出入りしていたのだろう、ということは容易に想像がつく。それは同時に、たくさんの人が被災地・福島を気にかけてくれていることの証でもある。ただ、私は人々の関心や支援が一過性のものにならないでほしい、と願う。大地震から約1年、人々がそれぞれの暮らしの再建に向けて動き始めたいま、もはや被災地支援は、「施す・施される」の関係ではなく、両者が互いに力を出し合っただけで困難に立ち向かい、協働して何かを作り上げていく「仲間」の関係になることができれば理想的だと私は考えている。私は自分の故郷・相馬市をはじめ、富岡町立小中学校でも、子どもたちと学生が互いを「仲間」と思えるような、そんな交流活動を末永く展開していければと思う。

また、今回参加してくれた20数名の学部生・留学生たちが帰りのバスで「また行きたい」と言ってくれたことを大変うれしく思う。被災地支援には興味があるが、何をしたいかわからない、そんな学生も多いと聞く。私はそんな学生たちに、一度でいいから、福島・岩手・宮城に行ってみて、そこで現地の人との交流を持ってもらいたいと思う。そして、そこで細く長く、人々との交流を続けてほしい。

そして最後に、私と同じく、被災地出身の学生にも伝えたい。千葉大学には被災地出身の学生も多いことと思う。故郷から離れた場所に暮らしていても、いつまでも自分の故郷を気にかけていること、それだけでまずは十分なのではないだろうか。私は震災後ずっと自分に何ができるのか考えてきた。しかし現実には、被災地から遠く離れた環境の中で変わり果てた故郷の現状にただ悲観的になる一方で、何をしたいのかもわからずもどかしい日々を過ごしていた。そんなとき福島に住む母が「時期がきたら、必ず人の役に立つことができる」と言ってくれた。そうして今、人の縁で富岡町立小中学校への支援活動に関わることができ、自分の故郷の復興にも動き始めたところである。「時期がきたら、必ず人の役に立つことができる」、その言葉を信じて、私はこれからも「福島」や「東北」にアンテナを張り続け、自分にできることを発信し続けていきたいと思っている。

福島県富岡町立小中学校との交流活動に参加して

活動場所：福島県三春町
短期留学生（トルコ） メリヒ・ユルマズ

富岡小中学校の皆さんへ、

皆さんと知り合って、とても楽しい時間を過ごしました。私は少し照れ屋で、最初は話かけられませんでした。が、どんどん慣れてきて、クラスの皆さんと面白い話ことができました。特にみんなで昼ごはんを食べている時、自分の小学生の時を思い出して「懐かしいな～」と思いました。それから、久しぶりに雪合戦をしたり、雪だるまを作ったりして、雪で遊びました。とても楽しかったです。この活動で遊びだけではなく、勉強できたこともありました。例えば、授業で、先生が韓国について色々なことを話してくださって、いい勉強になりました。そして、授業が終わって、皆さんが宿題をやっている時、私も新しく勉強したことがありました。教科書には私が知らない漢字が書いてあって、「自分のレベルは小学校6年生のレベルより低いね～」と思い、もっと頑張らなければいけないと思いました。それに、節分について勉強したことがありますが、実際にやると、節分の意味がさらによく理解できました。これもいい勉強になりました。

ちなみに福島に行って、一番印象に残ったのは子供たちの笑顔でした。激しい災害でしたが、子供たちが笑顔で元気を出しながら、一生懸命頑張っている様子を見ると、やはり大人であっても子供たちに教わるがあると思いました。

この活動で福島の子供たちと遊ぶこともでき、様々なことも勉強しました。これからもこのような活動があれば是非参加したいと思います。このような活動のおかげで、日本の文化や日本人のことをさらに詳しく理解できるようになり、それに従って特に私の専門は日本語教育なので、日本の学校、日本人の生徒達、つまり日本の教育に関しても実際に勉強できたと思います。このチャンスを下さった富岡小中学校と千葉大学の方々に心から感謝しております。

富岡小中学校交流活動

活動場所：福島県三春町
短期留学生（ミャンマー） モ トウエ ニイ
短期留学生（インド） アフリン ムジャワル

2月3日、福島県、富岡小中学校へ交流活動のボランティアとして行った私たち。留学生11人、日本人学生8人が参加した。目的地に近づくにつれ千葉では見られないような雪景色が目の前に広がった。目的地である富岡小中学校がある所は、震災の影響があまりなかったものの子供たちの数は予想していたよりも少なかった。そのため、最初はこのボランティアの目的であった「かかわる、楽しむ、伝え合う、自分の夢や希望を見つめる」

という目的を達成することができるのだろうか、また子供たちにとけこむことができるのかと様々なことを考えながら学校の中へと入った。

私たちが担当したクラスは2年生と4年生のクラスだった。4年生は4人そして2年生は3人ととても少ない人数での授業だった。2年生の子供たちは初対面の私たちに対し、照れることもなく明るい姿を見せてくれたが、4年生の子供たちは最初は恥ずかしがってあまり話しかけてくれなかった。しかし、一緒にお昼ご飯を食べる時には小さな声で「一緒に遊んでください」と声をかけてくれた。給食後のお昼休みの時間には、外で雪合戦をして遊ぶ子もいれば、校舎の中で縄跳びをする子もいた。

その後、節分行事の豆まき集会が行われた。そこでは、全生徒45人と先生たちが集まり千葉大学生と先生たちが、お互いに自己紹介をした。子供たちは、私たち一人一人の自己紹介が終わるごとに「よろしくお願ひします」と可愛い笑顔で一生懸命答えてくれたことがとても印象に残っている。そして、皆で自分が追い出したい鬼を発表し豆まきをした。先生たちが鬼の格好をしホールの中に入ってくると、子供たちはもちろん学生の私たちまでもワクワクして一斉に豆を投げていた。その後、それぞれのクラスに戻り子供たちと楽しいひと時を過ごした。

今回の経験は私たちの一生忘れられない貴重な思い出となった。地震という恐ろしい体験をしたにも関わらず、子供たちの笑顔はキラキラと輝いていた。勇気を与えるために行ったはずだったのが逆に子供たちに勇気をもらえた気がする。この町の子供たちは、これからも自分たちの夢や希望に向かって前向きに一生懸命進んでいくと私たちは心から信じている。

3月10日を忘れない

活動場所：宮城県石巻市雄勝町
園芸学部緑地環境学科 阿部真梨

3.11から早くも1年がたとうとしています。あの大地震は今まで経験したどの天災よりも過酷で辛いものだった気がします。毎日繰り返される報道や現地の映像に心を痛み、東北に住む友人や家族の無事をただひたすらに祈り続け、大切な家族や友人、故郷がこんなにも辛い思いをしているのに、何もできない事実が本当に辛かったです。何か私にできることはないだろうかと模索していた時、所属していた「松戸・柏の葉地区 環境 ISO 学生委員会」の友人から、宮城県石巻市雄勝町での活動の誘いを受けました。

委員会での活動内容の一部に「コミュニティガーデン活動」があります。コミュニティガーデンは、庭造りを一緒に行うことによりコミュニティを形成することを目的としています。阪神淡路大震災では仮設住宅における孤独死や、孤独に耐えかねての自殺が少なからずありました。このような事態を避けるために、新たなコミュニティを形成し、お互い協力し合える環境を整える必要があります。委員会での活動経験や、国公立大学で唯一の園芸学部生として日々、植物に関する勉強に励んでいることから、植物の力で被災地を元気にすることを

目標として活動をスタートさせました。

活動は主に宮城県石巻市雄勝町で行っています。雄勝町は宮城県北東部に位置し、森やリアス式海岸など自然が豊かな地域です。津波による被害も大きく、初めて行った時は、家も漁港も学校も全て流されて大地がむき出しになっている状態でした。それまでテレビでしか見ることのなかった現実を実際に目の当たりにして、虚しくなりました。私の地元も東北の港町で、津波による被害を受けていたからなのかもしれません。当たり前だと思っていた日常を突然奪われ、なれない暮らしを強いられている被災者の方はどんな心情なのだろうと思いつつ、仮設住宅に伺わせていただきました。被災者の方とお話するのはこの時が初めてで、とても緊張していました。しかし、実際お話してみると、みなさんはとても元気で明るく、現実と向き合っているように感じました。ボランティアの私たちに「ご苦労様です」、「ありがとうございます」と明るく声をかけてくれました。また、何度もお茶をごちそうになり、楽しいお話もきかせてくれました。

現地に行くまでは自分が被災地に行ってもいいのか、みなさんの力になれるのかと考えていましたが、やさしく迎え入れていただき、本当にありがたい気持ちになりました。今では被災地に行ってお父さんやお母さんとお話することや、一緒に花壇を作ることがとても楽しみです。

右も左もわからない状況で始めたボランティアですが、委員会のメンバーや先生、現地の方々と試行錯誤しながら活動するのがとても楽しいです。また、行くたびに新しい人と出会い、活動の場所がどんどん広がっていくのがとてもうれしいです。現時点では仮設住宅でのコミュニティガーデン活動の他、仮設住宅でのイベントの実施、雄勝町入口部での花壇作り、oh!ガッツとの活動、石巻市内にある仮設店舗での緑化活動等多くの活動をしています。

ボランティア活動を通じて多くの方と出会え、貴重な経験をすることができ、活動を始めてよかったな、と思えます。最後に、2月の活動で知った言葉を紹介したいと思います。

『3月10日を忘れない』

明日も明後日もずっと続くと思いがちな何気ない1日を、もっと大切にしようと思いました。

皆にこにこしていた

活動場所：宮城県石巻市里の杜サポートセンター、復興支援センタースマイル
工学研究科 松崎志津子

私は都市防災工学を専攻する社会人大学院生で、それ以前は建築構造設計の仕事に15年以上従事していたこともあり、地震の被害や防災と近いところに長くいたものの、兵庫県南部地震や中越沖地震等の時には仕事のためボランティア活動をするのはかなわなかった。これまでペルーやチリに地震被害調査に行ったことがあったが、今回初めて指導教員の先生と国内の被害調査に行き被災者の方々の話をうかがっているうちに、もっと被

災者の方々に近いところで何かのお手伝いをしたいと強く思うようになりボランティアを志した。

具体的な活動として、里の杜仮設住宅にお住まいの方々を支援している里の杜サポートセンター(7日間)とボランティアセンタースマイルさんご紹介の農家(2日間)合計正味9日の間、仮設住宅のイベントのお手伝い、仮設巡回訪問の同行、仮設住宅の問題点のチェックと提案、畑の汚泥除去などを行った。

最初のうちは自分も少し緊張していたが、仮設にお住まいの方も作業を依頼した農家の方も皆たいへん明るくにこにここと接して下さるので、だんだん気持ちがほぐれた。身内を亡くされた方も少なくないはずで、心の中にたくさんのかかえておられることは想像できるが、よその土地から来た私たちに気づかい、お菓子や飲み物をたくさん出してくださって「まさか自分が避難所暮らしをするとは夢にも思ってなかったなあ」「こうやってお手伝いの人に来てくれて、本当に元気をもらえるよ」と言ってくださった。「こんな短い活動期間でたいした結果も出せないのでは」といった心配も忘れて、こちらの方が活力を与えられたようであった。

ボランティア活動以前、調査目的の訪問時に思ったのは「まるで日本じゃないみたいだ」だったが、ボランティアの現場にいるうちに「これはすぐ身近で起こった現実だ」になり、次第に「少しずつであっても前進することが大事」ということを感じるようになった。ほんの一時ではあるが岩沼の方々と直接会話しながら活動できたことで、被災地の実際の生活を知ることができた。また最近の仮設住宅が以前よりも、収納や玄関回りの庇、手すり等使い勝手を考慮して改善されていることがわかり、研究室や周囲の建築関係者にも紹介した。被害を受けた方々に本当の笑顔になれる日が一日も早く来るよう、心から願っている。

活動に関し、社団法人青年海外協力協会(JOCA)のご支援をいただきましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

母校富岡小中学校と千葉大学交流への想い

活動場所：福島県
教育学部教授 片岡洋子

2011年3月6日、私は「男女共生のつどい」の講演のため、郷里の福島県富岡町にいました。会場にはかつての同級生や長く近所つきあいのあった人、亡き母の友人たちの顔もありました。

私は富岡町夜ノ森で育ち、都内の大学に進学するまでそこで暮らしました。2003年に母が亡くなった後も育った家を失いたくなく、年に一度、妹と一緒に空き家の掃除に帰っていました。しかし空き家は近所の方にも物騒なので、2010年7月末についに更地にして隣家に土地を売りました。我が家とともに故郷が無くなってしまった気分が、しばらくは帰る機会もないだろうと思っていたところに講演の依頼がありました。こんな機会でもなければ行かないからと、都内に住む妹と大学受験の終えたばかりの娘も一緒に、3月5日に「リフレ富岡」に宿泊しました。「リフレ富岡」は我が家から徒歩3分で、娘が小さい頃は屋内プールや温泉浴場によく連れてきた施設です。館内には1か月後の桜祭りのポスターが貼られ、桜の名所として一年でもっとも賑わう春は間近でした。

「また来てね」「また来るよ」と言い合い、故郷の人たちに見送られて、講演会場を車で出発した5日後の3月11日、あの大地震が起こりました。その夜、帰宅困難となってしまった私は一人で研究室にいました。岩手・宮城の沿岸部の大津波の映像に驚愕しているうちに、福島第一原発で電源喪失というニュースが飛び込んできました。しかしなかなか続報が伝えられず、チャンネルを変えて原発のニュースを探しました。夜遅く「第一原発から3キロ圏に避難指示」と報じられました。富岡町は10キロ圏内です。私は「3キロじゃダメ、30キロ」と思わずテレビに向かって叫びました。研究室には、「チェルノブイリ事故から25年」のカレンダーが掛けてありました。つい数日前に会った人たちの顔が浮かんで、原発の危険から早く住民を避難させてほしいと願っていました。このときは、富岡の町も津波に襲われ、常磐線富岡駅も流されていたとは全く想像もしていませんでした。

12日早朝、避難指示が10キロ圏内に拡大されました。避難のためのバス乗り場は、私たちが宿泊した「リフレ富岡」でした。私はそのニュースを聞いて少しほっとして、総武線が動き出すのを待って帰宅しました。5時間後に自宅についたときには、原発はいっそう深刻な事態になっていました。そして15時36分に1号機で爆発があったことを夕方のニュースで知りました。さらに14日に3号機、15日に2号機が爆発、4号機でも火災が起こるといふ事態に及びました。後で町に人たちに聞くと、「とりあえず避難」と思っていたので何も持たずに家を出た、落ち着いたら戻れるだろうと思っていたとのことでした。12日の爆発でもう二度と帰ることはできないのではないかと思い始めたという同級生もいました。

12日以降、誰がどこに避難したのか、無事なのかなど県内に住む従弟や同級生にメールで連絡を取り続けました。18日に千葉県内に介護を必要とする母親を連れて車で避難して

きた友人がいることがわかり、君津市役所の職員をしている卒業生に援助を依頼したところ、連休明けから家族4人で住める住宅をさっそく手配してくれました。埼玉県杉戸町が富岡町からの避難者を受け入れたことを知って20日（日）に杉戸町の施設に出かけると、富岡町役場の担当職員が中学の同級生で、町の様子や彼の家族の状況を聞かせてもらいました。5月の連休には多くの住民が避難していた郡山のビッグパレットに行き、役場の職員に会って現状を聞き、懐かしい八百屋のご夫妻や同級生にも偶然会いました。

研究活動としては、教育科学研究会の共同研究チームの一員として、6月4日から3日間、8月末に2日間、福島県内の警戒区域からの避難していた人たちや他の学校に間借りしている南相馬市の警戒区域内の小中学校の教職員からの聞き取り調査を行ってきました。そうした中でもずっと気がかりだったのは、私の母校である富岡第二小学校、第二中学校はどうなってしまうのかということでした。共同研究チームでも警戒区域内の学校のその後の調査の計画を立てようとしていた10月初め、教育学部教授会の報告事項で、富岡第一小学校長の八島先生が教育学部の卒業生でいらして義援金の呼びかけをしていることを知りました。さらに偶然にも教育学研究科院生の相良好美さんのお父さんが富岡第一中学校の校長先生でした。相良さんを通じて内諾をいただき、9月1日から三春町の仮設校舎で4校合同で再開していた富岡小中学校を、11月28日（月）に訪問することができました。

訪問の目的は3つありました。一つは千葉大から継続的に支援・交流をしていきたいと山内副理事から伺っていたので、具体化のために下打ち合わせでした。二つ目として、日本教育学会70回大会（千葉大学）実行委員会の意向として大会での黒字分の寄付を学会理事会を通して行いたいということをお伝えしました。そして三つ目は、日本教育学会が総合的に「東日本大震災と教育」の調査研究を行うにあたっての協力依頼でした。その日は4人の校長先生が揃っていらして、震災当日の写真をパソコン画面で見せていただきながら避難から学校再開と現状などについてのお話も伺いました。

そのときに千葉大の学生と富岡小中学校の子どもたちとの交流の場として、とりあえず具体化できそうな学校行事として「豆まき集会」が上がりました。その後12月13日に学生支援課長の菅野さんたちが富岡小中学校を訪問して具体的な計画をたてられ、2月3日の「豆まき集会」での留学生と日本人学生、齋藤学長をはじめとする教職員と、富岡小学校の子どもたちとの交流が実現しました。

小中学校には幼稚園が併設されています。偶然にも幼稚園教員の一人は、私の保育所から中学までずっと同級生だった人でした。2月3日の昼休みに、私は幼稚園の事務所にお邪魔して、3月11日の幼稚園の様子と避難の状況、現在の子どもたちの状況などとともに、同級生だった彼女の家族のことなどを聞きました。

わが家が無くなったとしても、故郷の町と、私の同級生など町に住む人々の暮らしは、あり続けることを私は疑いもしませんでした。しかし今や、町や人々の暮らしは元あった場所にはありません。町を捨てて生きてきた、原発の危険性に本気で考えてこなかったという負い目が私にはずっとあります。教育学研究者としてできること、千葉大学の教員としてできることを探りながら、故郷の人々とつながっていきたくて考えています。

総合政策学科陸前高田支援プロジェクト 「震災復興インターンシップ」

活動場所：宮城県陸前高田市
法経学部教授 倉阪秀史

千葉大学法経学部総合政策学科は、「フィールドスタディ」科目の一環として、7月25日（月）～8月4日（木）の11日間にわたって、学生31名、院生1名、教員1名を岩手県陸前高田市に派遣し、がれき撤去と中学生の学習支援を行いました。当プロジェクトに参加する学生は、7月19日（火）に開催された事前研修において、震災復興ボランティアの経験者の話と教員による事前調査（7月8日（金）～11日（月））の結果報告を聴いてから、現地に入りました。現地では、陸前高田出身の本学科4年生の実家近くの公民館をお借りして、自炊し、寝袋を持ち込んで宿泊しました。

実施した内容は、以下のとおりです。

- 「畑のがれき撤去・再生」 日時：平成23年7月26日～29日（日中）



陸前高田災害ボランティアセンターの紹介で民家の畑のがれきを撤去し、畑に再生しました。

- 「水田のがれき撤去」 日時：平成23年7月30日～31日（日中）



陸前高田災害ボランティアセンターの紹介で水田のがれきの撤去を行いました。

- 「陸前高田第一中学学習支援の実施」 日時：平成23年8月1日～8月3日（日中）

陸前高田第一中学校の協力によって、中学3年生を対象とする学習支援を行いました。

- 「寺子屋千葉大」の実施 日時：平成23年7月28日～8月2日（夜間）



市の広報・教育委員会・市内中学校の協力によって事前に募集した中学生20名をマンツーマンで2時間ずつ6日間にわたって指導しました。

これらの活動の様子は、共同通信（8月1日）、岩手日報（7月31日）、河北新報（8月1日）、読売新聞（8月3日）の各紙、テレビ岩手（8月2日夜）、岩手朝日（8月3日夜）の報道番組で報道されました。

公民館をお借りした横田第二部落のみなさんと二回にわたってバーベキューを行うなど、地元のみなさんともふれあえた11日間でした。参加した学生は、震災の被害の大きさを実感しつつも、充実した時間を過ごし、貴重な体験が出来たと思います。

今回のインターンシップは、そのセッティングのほとんどを教員側が行いました。現地の状況がわからない中、臨機応変に対応することができたと思いますが、学生がセッティングから関わることであればもっと実務経験としての価値が高まったのではないかと反省しています。支援を息長く続ける観点から、2012年度も夏の支援プログラムを計画する予定です。



震災から1年 千葉大生による震災支援活動

活動場所：宮城県石巻市
教育学部准教授 下永田修二

まもなく、未曾有の東日本大震災から1年が経ちます。まだ、被災地では厳しい状況が続いており、少しでもはやい復旧をお祈り申し上げるとともに、これからもできる限りの支援を千葉大学の教職員、学生の皆さんとともに行っていきたいと思っています。

さて、私は震災直後からこの1年間、ボランティア活動支援センターの活動に関わってきました。誰もが経験したことのない出来事が続き、すべての人々が戸惑うことばかりであったと思います。そんな中で、地震から3日後の3月14日には、学生の有志が学生支援課に集まり、募金活動をはじめたいと申し出てきました。学生の熱意に打たれ、私はいつの間にか、学生の活動をサポート



することとなりました。支援活動に立ち上がった学生たちは、毎日、ふれあいの環に集まり、今、千葉大生としてできることは何か考え、お互いに意見交換をし、募金活動を行う準備をはじめていきました。そして、地震から1週間も経たずに、学生100名程が参加し、街頭で、募金活動をはじめ、多くの方々の賛同を得て、被災地に支援を送ることができました。これも千葉大学全体をみわたすと、学生たちのほんの一部の活動だとは思いますが、まだ余震の続く中、少しでも被災地へ支援をしたいと立ち上がった学生たちの活動には心を打たれ、今も強く記憶に残っております。また、千葉大生の逞しさ、若さ溢れる活動力を感じさせてくれました。



それから、ボランティア支援センターの本格的な活動がはじまり、少しでも被災地の力になりたい、お手伝いをしたいという学生がセンターに集まるようになりました。ここでも、学生同士のミーティング、教職員を含めたミーティングが数多く行われ、学生たちの気持ちのこもった活発な話し合いが行われていました。その場に居合わせたひとりとしては、震災支援に対する学生たちの思いがひしひしと伝わってきました。

私も6月には、一度、数名の学生とともに石巻へ復興支援に向かいました。現地に入ったのは、夜でしたが、はじめて震災後の街のようすを目の前にして、言葉にならない気持ちがこみ上げてきました。しかし、実際に、支援活動をはじめてからは、とにかく、今、自分が少しでもできることをやっていくしかないという気持ちが強くなり、たくさんきているボランティアの方々とともに、支援活動を行ってきました。実際に被災された方々も、皆さん前向きに活動をされており、我々が伺うと、ここから喜んでくださって、日本人の絆というものを強く実感させられました。また、避難所生活を余儀なくされていた方々とも話をさせていただき、毎日、避難所から自宅や仕事場の復旧作業に向かわれていると



いう話も伺いました。そのときは、一日でもはやく皆さんが普段の生活に戻れるように、とにかくできる限りのお手伝いしたいという気持ちが強く湧いてきました。この経験を通して、私自身、学生に支援の大切さ、また、支援を行うことによって、支援する側にも多くの気付きがあることを伝えていきたいと深く感じました。

そして、夏休みには、ボランティア支援センターで有志を募って、被災地に向かい、多くの学生が支援活動を行うことができたことは、参加した学生にもほんとに貴重な経験になっていると思います。

まだ、震災から1年、被災地をはじめ、震災後の対応については、日本全体として大きな課題を抱えています。また、必要な支援のかたちもこれから変化をしてくれています。そのような中で、総合大学である千葉大学として今できることは何なのか、また、大学生であるからこそできる支援、活動はどのようなことなのかについて考え、実行していくことが今後重要であると思います。また、その活動を振り返り、さらなる活動へつなげていくことで、学生は大きな学びを獲得していくことができると思っています。

そして、この活動を通して、学生には、ボランティアの環を広げ、また、人と人の環をひろげていってほしいと思います。

私自身、これからも皆さんとともに考え、活動していきたいと思っています。

東日本大震災とボランティア

活動場所：福島県，宮城県，岩手県
学生部学生支援課長 菅野仁

平成23年3月11日午後2時46分、文部科学省14階で文科省担当者との打合せ中に未だかつて体験したことのない、立つことすらできないほどの大きな揺れを感じた。

大声で「机の下に隠れろ!」と叫び身の安全を促す職員、書類やパソコン、テレビ、棚などを押さえる職員など、その場は一瞬にしてパニック状態となった。数分後揺れが収まりテレビを見れば、地震速報が流れ「太平洋三陸沖を震源とする地震が発生。津波に注意」のスーパーが流れ、東北地方は震度7、6強・弱と報じられ東京都心でも震度5弱と伝えられていた。この揺れが日本観測史上最大マグニチュード9.0を記録する「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）」であった。

その後、一時間ほど文部科学省内に留まり大きな余震も収まった後、大学に戻るため東京駅に向かった。出先であったため詳細な情報を得ることが出来なかったがJR等の交通機関が運転を見合わせていることは携帯電話で情報を得ており、数時間後には運転が再開され千葉に戻ることが出来ると思っていた。

東京駅に徒歩で向かう途中、日比谷公園付近では多数の人々がヘルメットをかぶり集団で行動している状況を見つつ徐々に地震の大きさや激しさを感じ、混雑の中、歩を進めながら家族の安否を携帯電話で連絡しても繋がらない状態が、地震の発生直後から続き、5時前に東京駅に着いた。

多数の乗客が殺到する東京駅構内に8時頃だったと思うが「本日の在来線の運転は終日行いません。」と構内放送が流れ、他の交通機関は無く徒歩での帰宅も考えたが、千葉へ向

う道路の状況なども分からず、深夜に行動を起こすことは無理であろうと周囲の人々とともに判断し帰宅困難者の一人となった。

東京駅で一晩過ごす覚悟をし、メールで家族の無事が確認され、ほっとする暇も無く駅構内で一夜を過ごす場所を探して歩くが、暖かく休める場所は既に多数の帰宅困難者が所狭しと座っている。動輪の広場近くに身を寄せ一夜を過ごすこととした。時間が過ぎるにつれ「寒さ」との戦いがあった。翌日帰宅後、東京駅付近には帰宅後困難者のために施設を開放しているところが多数のあったようであるが、駅構内の人々にはその情報は伝達されなかった。

新聞紙の上に横たわりコートを体にかけて寒さを凌いで、不安と空腹の中で過ごした一夜はとても寝ることは出来なかった。この体験が後にボランティア活動をしなければならぬとの思いを起こさせる大きなきっかけとなった。被災した方々はこの何十倍、何百倍の辛い思いをしているのだろう。

テレビ、新聞等で避難所におられる被災された方々の辛く悲しい思いや寒さに耐える姿を見るたび、何かしなければ、何かできることはないのかなど自問自答を繰り返していた頃、学生たちのボランティア活動の状況を知り大学として被災地支援をやらなければならない気持ちが強くなり、2回のボランティアツアーを計画した。

学生たちが主導的に計画したツアーでは、学生たちの殆どは初心者で私はその後方支援として気仙沼市と南三陸町において活動した。平日の勤務が終了後夜10時に大学を出発し（后方支援としてワンボックスカー運転しバスと並走）、早朝現地に到着し活動を行い、床に就いたのは夜12時を回っていた。前日起床後から床に就くまで43時間の間一睡もせず、車の運転を行い、現地で種々の活動ができたか、今思うと不思議である。緊張感のほか、被災地、被災された方々へ何かをしたいとの思いがあったからだと思う。1泊4日のツアーで現地に早朝到着、正にそこに見える風景は報道などで何度も見た映像以上のものであり、言葉を失いただ茫然とするものであった。海岸から数百メートルはなれた陸地に大型の漁船があり、周辺には瓦礫と家屋の基礎（コンクリート）、鉄筋の建物は外形を残し窓も建物内の家財等も一切ない。ここで人々が普通の生活を営み幸せな暮らしをしていたことを思ったとき、自然の驚異を改めて知った。

2回のボランティアツアーでは主に現地ボランティアセンターから瓦礫の撤去作業を依頼された。しかしその「瓦礫」は、数か月前までは人々が生活していたモノであり、単なる「瓦礫」ではない。今では使えないモノではあるが、そこに暮らしていた、ここに自分がいた証となるそのモノは、決して「瓦礫」ではないだろう。壁も柱も全てに様々な思い出が津波で一瞬にして流され、着の身着のままに避難をした人達にとっては「瓦礫」は存在しないのではないだろうか。

ツアーに参加し学生が「瓦礫撤去などは重機を使えば早く作業も終わり、効率的だと思っていた。しかし、ボランティアに参加して人の手による作業が重要であることが分かった。全てのものがそこに生活していた人たちの思い出だから。」この言葉のとおり、ボラン

ティアは被災した人たちの想いをしっかりと受け止め、行動しなければならないと感じた。

ボランティアをやりたい気持ちはあるけど一人ではなかなか参加できない、参加する勇気がない人がいるだろう。自分もそうであった。しかし、まず一步を踏み出す。バス会社などがボランティアツアーを企画しており、経験が無くても参加しやすい環境が整っている。まずは被災地へ赴き現場をしっかりと見て脳裏に焼き付けるとともに、被災された方々の想いを受け留め、小さなことでも構わない、少しでも復興の力になればとの強い気持ちを持つことが大切だと思う。

ボランティアツアー参加した学生たちの多くは、出発時には不安気であったように見えたが、活動終了後の表情は一変し、何かを成し遂げた達成感、充実感がみなぎり、自信に満ち溢れた姿であった。この体験で学生たちは確かに変わり、得たものがあったのである。大きく成長したようにも見えた。

今私たちができることは何か、何を成すべきかを、しっかりと考え行動をすることが求められることであろう。

今、平成24年3月11日午後2時46分、各地で黙祷が捧げられ、1周年追悼式において天皇陛下のお言葉が述べられた。「被災地の今後の復興の道には多くの困難があることと予想されます。国民皆が被災者に心を寄せ、被災地の状況が改善されていくようたゆみなく努力を続けていくよう期待しています。そしてこの大震災の記憶を忘れることなく、子孫に伝え、防災に対する心掛けを育み、安全な国土を目指して進んでいくことが大切と思います。」

まさに、私達はこの経験、この教訓を忘れず後世に伝える使命を忘れずに、しっかりと復興への歩み続けなければならないと思う。

終わりに

昨年8月、9月の千葉大学ボランティアツアーでは、気仙沼市ボランティアセンター及び南三陸町災害ボランティアセンター並びに周辺の方々に大変お世話になりました。また、2回のツアーでは南三陸町のホテル観洋様にもお世話になり、学生、教職員一同ありがたく思っております。改めて感謝申し上げます。

最後に、亡くなられた方々のご冥福と被災された皆様へ心からお見舞い申し上げますとともに被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

千葉大学震災ボランティアに参加して
— 東日本大震災から学んだもの —

活動場所：宮城県
学生部留学生課留学生支援係長 立石公史

そのとき私は、普段どおりデスクに向かい仕事をしていた。大学では、後期の個別試験を翌日に控えて準備に追われていたが、突然、かつて経験のない揺れを感じ、状況確認のために外に出ると、道路が波打つように揺れる中、大勢の学生が教室から逃げ出してきていた。テレビは、津波への備えを繰り返し、その予想は直ちに映像となり、信じられないような速さで、予想出来ないほどの規模で私たちの目に届けられた。あれから1年、私が参加した千葉大学震災ボランティアについて振り返ってみたい。

多くの学生や職員が、あの日帰宅しないことを選んだはずだ。翌日から、各部署では何をどのような優先順位で対応することが必要か検討し、私たちも手探りの中で学生の安否確認作業を行っていた。テレビを通じて繰り返し映し出される被災地の状況を目にするたび、自分でも何か出来ないかと思う気持ちが強くなり、私も現地に赴きたいと思うようになっていた。本学の附属病院は、地震発災直後からDMATチームを編成して支援活動に当たっており、後日、私たちにも後方支援の希望者募集が巡って来たが、仕事の都合から止むを得ず参加を見送った。その後の私は、街頭募金や、衣類を送るプロジェクトに参加することしか出来ず数ヶ月を過ごしていたが、ある日、大学が独自で震災ボランティアツアーを計画していることを聞いた。1日休暇を取れば参加出来る行程で教職員も参加可能と聞き、迷いはなかった。

千葉大学では既に、ボランティア活動支援センターが立ち上がっていた。たくさんの学生が関わり、参加者に対して、経験者による体験談やオリエンテーションの他、ボランティアに対する心構えやボランティア保険への加入等も含めて、不安を取り除く十分な情報提供と準備期間が与えられた。

第1回目は、8月4日から7日にかけて、学生31人と教職員7人により宮城県気仙沼市へ、第2回目は、9月22日から25日にかけて、学生24人と教職員10人により宮城県南三陸町を拠点として実施された。いずれも、大型バス1台及び後方支援用のワンボックス1台により千葉大学を22時頃に出発し、翌日及び翌々日の2日間の活動後、最終日の早朝に大学に戻る1泊4日の行程である。詳細は割愛し、参加しての感想を思い返してみる。

気仙沼に近づくにつれ、車内から震災の爪あと目に飛び込んできた。テレビの映像で見た以上に、自分自身の目で見ると現地は驚くほど衝撃的なものであり、どうしてもっと早く自分が行動を起こさなかったのかを反省した。現地には全国から沢山のボランティアが参

加しており、テントや自家用車で寝泊りしながら活動を続けている方も少なくなかった。初日は瓦礫撤去を、翌日は漁網をほどく活動を行ったが、自分ひとりの作業量がいかに微力であるかを知らされる一方で、皆が力を合わせ作業することで、小さな活動が僅かな成果となって、少しずつでも前に進んでいくのだと実感させられた。

南三陸にも、たくさんの団体が全国から活動に来ていた。歌津駅付近で瓦礫撤去や草取りを中心とした活動を行ったが、建物のほとんどが既に撤去され、住居等の基礎部分がわずか残るだけの現場で瓦礫を整理する中で、確かにここには生活があったのだと感じ、津波の恐怖を実感せずにはいられなかった。また、バスでの移動中に公立志津川病院の前を何度か通過したのだが、4階まで津波に襲われた病院の映像を思い出し、やり切れない思いを覚えた。

二回の経験を通じての印象をまとめてみたい。

今回の企画は、学生の参加が主であり、自分の置かれた立場はそれを支援するものであったかもしれない。しかし、同じ目的を持って同じ方向に向かって真摯に活動を続ける学生と一緒に行動させてもらえたことで、ともに感じともに考える時間を与えられ、毎夜の反省会を通して皆の考え方や意見を聞いたことは、個人としてとても大きな収穫となった。現地での時間が十分に取れず小さな活動であったかもしれないけれど、皆がこの体験をきっかけとして更に活動が広がるよう期待したい。私自身もこの記憶を風化させず、この思いを多くのひとに伝え、まだこれからも支援は必要であり少しでも多くの仲間がこの輪に加わるよう語り継いでいかなければならない。とにかく現場に足を運ぶこと、そして自分の目で見て感じること。そのことがいかに重要であり、気持ちも自然に動いてくるはずだと信じている。

おわりに。

本来ボランティアは、自分の行動を自分で計画し実行すべきだと考える。今回の企画は、すべて大学から与えられたものであり、学生のお世話どころか、学生から多くを学ばせてもらう状況であった。現地への交通はもちろん食事や飲み物の手配など、学生支援課職員をはじめ、ボランティア活動支援センターで活躍される学生及び関係教職員による完璧な後方支援を受けて実施されたものであること、心から感謝したい。

しあわせな人々の生活を一瞬にして変化させた震災から1年が経過したが、被災者の思いは止まったままだ。放射線問題をはじめとして、震災前の生活を取り戻すに立ち塞がる問題は山積している。しかし、毎日それに向き合いがんばっている人だってたくさんいる。引き続き、支援は必要だ。今を生きることが出来る私たちは、大きなことではなくとも、自分ができることを探しながら支援し続けていかなければならない。私は、東日本大震災から多くのものを学んだ。そして、どんなに辛いことがあろうとも、笑顔を絶やさず生きていく、そういう自分であり続けたいと改めて思う。

活動資料

○ 活動一覧

日程	活動内容	参加者
3月13日(日), 14日(月)	避難所(福島第四小学校)の清掃	学生1名
3月14日(月)~4月13日(水)	募金活動(学内, 学外) 5,206,729円 <small>〔千葉県, 茨城県, あしなが育英会に寄付〕</small>	学生95名
3月15日(火), 16日(水)	福島県にて安否確認電話	学生1名
3月17日(木)	浦安市にて土砂撤去	学生1名
3月19日(土)	旭市にて友人の手伝い	学生2名
3月19日(土)	旭市にて家屋の復旧作業	学生1名
3月19日(土)	浦安市にて土砂撤去	学生1名
3月19日(土), 20日(日)	旭市にてボランティアセンターを通じてのボランティア活動	学生1名
3月21日(月)	京都にて義援金, 物資支援活動に参加	学生1名
3月21日(月)~3月23日(水)	浦安市にて簡易トイレの配達, 土砂撤去	学生1名
3月22日(火)	有志による個人的な物品支援・郵送(自宅)	学生1名
3月22日(火)	浦安市にてボランティアセンターを通じての生活支援活動	学生1名
3月23日(水)	津田沼駅前にてアカバラサークルで募金活動を実施	学生1名
3月24日(木)	千葉駅前にて募金活動を実施	学生1名
3月25日(金)	旭市にてボランティアセンターを通じての土砂撤去等	学生1名
3月25日(金)	福島にて支援物資の仕分け作業	学生1名
3月25日(金)	旭市にて家屋の復旧作業, 土砂撤去	学生1名
3月26日(土)	旭市にて炊き出し・支援物資の配達(所属しているフットサルチームでの活動)	学生1名
3月28日(月)~3月31日(木)	福島県の避難所にて子供支援活動に参加	学生1名
3月31日(木)	東京にて被災地支援品の積み荷(玩具)	学生1名
4月3日(日)	上野にて「We Love Nippon」という団体で募金活動を実施	学生1名
4月4日(月), 4月7日(木)	船橋アリーナでの被災者受け入れ支援	学生1名
4月4日(月)	稲毛にて救援物資の仕分け	学生2名
4月7日(木)	浦安市にて土砂撤去	学生1名
4月8日(金)~ 約1ヵ月間	宮城県にて家屋の応急危険度判定	学生1名
4月10日(日), 4月16日(土)	宮城県にて家屋の掃除, 土砂撤去	学生1名
4月12日(火)	稲毛にて物資の積み込み	教員1名
4月18日(月)~4月20日(水)	宮城県の小学校にて学習支援	学生2名
4月22日(金)~4月26日(火)	宮城県にて土砂撤去, 家財運搬, 片付け等(大学生協募集ボランティア)	学生1名
4月22日(金)~4月24日(日)	磯部第一中学校にて土砂撤去	学生1名
4月24日(日)	磯部第一中学校にて土砂撤去	学生1名

4月25日(月)～4月27日(水)	宮城県の小学校にて学習支援	学生3名
4月26日(火)～4月30日(土)	宮城県にて土砂撤去, 家財運搬, 片付け等	学生1名
4月29日(金), 4月30日(土)	船橋のショッピングモールにて募金活動を実施(ショッピングモールからスタッフ募集の依頼あり)	学生5名
4月29日(金)～5月7日(土)	宮城にて土砂撤去	学生2名
4月30日(土)～5月4日(水)	宮城県にて土砂撤去, 家財運搬, 片付け等(大学生協募集ボランティア)	学生4名
4月30日(土)～5月4日(水)	宮城県にて炊き出し, 子ども支援, 瓦礫撤去等	職員1名
4月30日(土)～5月4日(水)	宮城県にて瓦礫・土砂の撤去, 傾聴など(フェアトレード東北・TICOの両NPOとともに活動)	学生1名
5月1日(日)	船橋のショッピングモールにて募金活動を実施(ショッピングモールからスタッフ募集の依頼あり)	学生2名
5月1日(日)	石巻動物救護センターにて犬の世話	学生1名
5月2日(月)～5月6日(金)	宮城県にて炊き出し, 避難所支援, 物資運搬など	学生2名
5月3日(火)～5月6日(金)	被災家屋の片付け, 救援物資の仕分け, 食事準備, ボランティアの後方支援等	教員1名
5月3日(火)～5月5日(木)	岩手県にて炊き出し	学生1名
5月3日(火)	福島県にて屋内外の片付け, 土砂撤去等	学生4名
5月4日(水)～5月8日(日)	宮城県にて土砂撤去, 家財運搬, 片付け等(大学生協募集ボランティア)	学生3名
5月4日(水)～5月7日(土)	福島県にて被災者のエモーショナルケア	教員1名
5月13日(金)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名
5月20日(金)～5月23日(月)	宮城県にて瓦礫撤去等	学生1名
6月3日(金)	佐倉市にて損傷した土蔵からの歴史的資料搬出	学生3名
6月4日(土)	福島にて瓦礫撤去等	学生2名
6月9日(木)～6月12日(日)	宮城県にて日本緊急援助隊とともに活動	教員1名 学生2名
6月10日(金)～6月13日(月)	宮城県にて瓦礫撤去等	学生1名 教員1名
6月10日(金)～6月13日(月)	宮城県にての活動 活動内容未報告	学生1名
6月10日(金)～6月13日(月)	宮城県にて土砂撤去等(日本緊急援助隊とともに活動)	学生1名
6月10日(金)～6月24日(金)	石巻動物救護センターにて犬の世話	学生1名
6月11日(土), 6月12日(日)	「RQ市民災害救助センター」の指示により支援活動	学生1名
6月11日(土), 6月12日(日)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名

6月11日(土), 6月12日(日)	宮城県にて支援活動	学生2名
6月11日(土), 6月12日(日)	福島県にて炊き出し, 瓦礫撤去	職員1名
6月13日(月)	宮城県にて土砂撤去等	教員1名
6月18日(土)~6月20日(月)	宮城県にて「山武市社会福祉協議会 東北復興支援プロジェクト」に参加	職員1名
6月25日(土), 6月26日(日)	宮城県にて支援活動	学生6名 職員1名
6月29日(水), 6月30日(木)	東日本スポーツ復興支援検討会への参加	教員1名
7月1日(金)~7月4日(月)	岩手県にて土砂撤去等	職員1名
7月5日(火)	佐倉市にて土蔵から搬出した資料の整理	学生3名
7月8日(金)~7月11日(月)	岩手県にて土砂撤去等	学生1名
7月9日(土), 7月10日(日)	場所・活動内容ともに未報告	学生1名
7月12日(火)	佐倉市にて土蔵から搬出した資料の整理	学生1名
7月16日(土)~7月24日(日)	宮城県にて学習支援, 「思い出探し隊」に参加	学生2名
7月18日(月), 7月19日(火)	宮城県にて支援活動	学生1名
7月19日(火)	佐倉市にて土蔵から搬出した資料の整理	学生3名
7月19日(火)	岩手県にて土砂撤去等(ゼミメンバーでの活動)	学生15名 教員1名
7月22日(金)~7月24日(日)	宮城県にてクリーン作業	学生1名
7月23日(土)~7月24日(日)	宮城県にて瓦礫・ごみの撤去	学生2名
7月23日(土)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名
7月25日(月)~7月29日(金)	雇用関係と外国人の情報提供に関する支援活動	教員1名
7月25日(月)~8月4日(木)	宮城県での学習支援, その他震災復興活動(インターンシップとしてゼミメンバーで活動)	学生34名
7月25日(月)~7月29日(金)	「福島子どもリフレッシュキャンプ」に参加	学生1名
7月28日(木)~8月3日(水)	岩手県での支援活動	学生1名
7月29日(金)~8月1日(月)	宮城県にて朝市運営の補助, 被災地見学	学生2名
7月31日(日)~8月2日(火)	岩手県にてアンケート配布の補助	学生5名
8月1日(月)~8月2日(火)	岩手県にて被害調査	学生1名
8月1日(月)~8月8日(月)	石巻動物救護センターにて犬の世話	学生1名
8月3日(水)~8月5日(金)	宮城県にて墓地の清掃作業	学生1名
8月3日(水)~8月5日(金)	岩手県にて被害調査	学生1名
8月5日(金), 8月6日(土)	宮城県にて瓦礫撤去, 魚網をほどく作業(千葉大学ボランティアツアー)	学生31名 教職員7名

8月5日(金), 8月6日(土)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名
8月14日(日)~8月21日(日)	福島県での「元気玉プロジェクト」参加	学生1名
8月17日(水)~8月19日(金)	宮城県にて家屋・商店の土砂撤去・清掃	教員1名
8月19日(金)~8月22日(月)	宮城県での「山武市社会福祉協議会 東北復興支援プロジェクト」に参加	職員1名
8月21日(日)~8月24日(水)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名
8月21日(日)~8月24日(水)	宮城県での活動 活動内容未報告	学生1名
8月22日(月)~8月24日(水)	宮城県にて学校心理士のボランティア	学生1名
8月29日(月)~8月31日(水)	宮城県にて学校心理士のボランティア	学生1名
9月4日(日)~9月7日(水)	「日本造園学会学生ワークショップ」に参加	学生1名
9月5日(月)	宮城県にて学校支援ボランティア	学生1名
9月6日(火)	佐倉市にて土蔵から搬出した資料の目録作成	学生1名
9月7日(水)~9月9日(金)	場所・活動内容ともに未報告	学生1名
9月7日(水)~9月13日(火)	岩手県にて日本財団チーム「ながぐつ」プロジェクト参加	学生2名
9月11日(日)~9月14日(水)	宮城県にてピースボート災害ボランティアセンターを通じての漁業支援活動	学生1名
9月11日(日)~9月17日(土)	宮城県にて家財運搬・片付け, 土砂撤去等	学生2名
9月12日(月)~9月22日(木)	宮城県にて JOCA 災害救援ボランティアに参加	学生1名
9月12日(月)~9月14日(水)	宮城県にて学校心理士のボランティア	学生1名
9月13日(火)	佐倉市にて土蔵から搬出した資料の目録作成	学生3名
9月14日(水)~9月16日(金)	宮城県にて炊き出し, 瓦礫撤去等	学生1名
9月16日(金)	宮城県にて土砂撤去	学生1名
9月17日(土)~9月21日(水)	宮城県にて瓦礫撤去等	学生1名
9月18日(日)	宮城県にて瓦礫撤去等	教員1名
9月19日(月)~9月21日(水)	宮城県にて小学校での支援活動	学生1名
9月19日(月)~9月23日(金)	宮城県にて児童館での支援活動	学生1名
9月23日(金), 9月24日(土)	宮城県にて仮設住宅での環境 ISO 活動	学生12名
9月23日(金)~10月1日(土)	宮城県にて瓦礫撤去, 漁港手伝い	学生1名
9月23日(金), 9月24日(土)	宮城県にて瓦礫撤去(千葉大学ボランティアツアー)	学生24名 教職員9名
9月26日(月)~9月28日(水)	宮城県にて学校心理士ボランティアの手伝い	学生2名
9月26日(月)~9月28日(水)	宮城県にて小学校での支援活動	学生1名
10月7日(金)	千葉県の中学校にて講演会出演(震災ボランティアを経験して)	学生2名
10月14日(金)~10月17日(月)	宮城県にて漁業支援, 入浴支援, クリーン活動	学生1名

10月14日(金), 10月15日(土)	宮城県へ大学内放置自転車の寄贈(南三陸町)	学生4名
10月14日(金)~10月16日(日)	宮城県にて漁業支援, 除草	学生1名
10月17日(月)	宮城県にて個人宅の清掃	職員1名
11月11日(金)~11月17日(木)	宮城県にてRQ市民災害救援センターと共に活動	学生1名
11月12日(土), 11月13日(日)	宮城県にて農作業ボランティア(ReRootsに参加)	学生1名
12月5日(月), 12月6日(火)	宮城県にてYouth for3.11×ピースボートの活動に参加	学生1名
12月19日(月), 12月20日(火)	宮城県にてYouth for3.11と共に活動	学生1名
12月19日(月)~12月21日(水)	宮城県にて学習支援	学生1名
12月22日(木)~12月25日(日)	宮城県と福島県にて支援活動	学生1名
1月28日(土)	宮城県にて側溝掃除	教員1名
2月3日(金)	福島県にて千葉大学として学校行事支援活動に参加	学生18名 教職員12名
2月4日(土)	福島県にて仮設住宅の視察	職員3名
2月11日(土), 2月12日(日)	宮城県にてコミュニティガーデンの整備	学生5名 教職員1名
2月20日(月)~2月22日(水)	岩手県にて陸前高田ママサロンの補助(SAVE IWATEの活動に参加)	学生1名
2月24日(金), 2月25日(土)	宮城県にて瓦礫撤去, 清掃活動	学生1名

(平成24年2月29日現在)

○ 千葉大学としての支援活動

医療支援	DMAT活動(3件), 遺体検案(12件), 医療救護(44件)
義援金	緊急災害募金: 1,747,028円 千葉大学校友会及び千葉大学経済人倶楽部「絆」の募金: 1,464,175円 千葉大学SEEDS基金被災支援特別募金: 4/25から募金活動開始 千葉大学海外校友会及び校友からの寄附金 海外在住千葉大学卒業生有志: 114,637円 中国校友会: 301,065円
物資支援	ガーゼ, 非常食, 手術用手袋, 紙おむつ, 電池等(緊急物資支援) 軟式野球用バッド, ホイッスル, A4フラットファイル, ラインカー, サッカーボール, フットサルボール, 幼児用椅子, 藍染Tシャツ, パイプ椅子, タンバリン, カスタネット, マラカス, ブロック, 木製電車・レール, 床上積み木, 中型積み木, 小型積み木, 靴箱, 幼児用ロッカー, 幼児用机, 自転車, 女性用を中心とした服や靴
その他	帰宅困難者へのホール, 集会場の解放, 放射線測定作業, 被災地空撮, 放射線線量計の貸与, 避難所での絵本コーナーの設置 等

○ 生涯学習ネットワークフォーラム ブース出展用パネル

千葉大学ボランティア活動支援センター

ボランティアを通して学ぶ、成長する、繋がる

ボランティアに参加する学生、教職員への支援

ボランティア活動報告

センターの歩み

ホームページ

センターの現状

ボランティア登録者数：362人(教職員・学生)
ボランティア活動者数：233人
開催件数：1021件 (2011年10月14日現在)

登録学生の活動地域

ボランティア活動報告

ボランティア777-の感性

活動内容

第1回ボランティアツアー
夏休みを利用してボランティアツアーを行った。学生、教職員を被災地へ派遣し、現地のボランティアセンターのものと活動を行った。

第2回ボランティアツアー
第1回に引き続き夏休み中に2回目のボランティアツアーを開催した。

募金活動
3月17日～27日までの10日間、大学周辺の駅周辺や学内にて募金活動をおこなった。

ボランティア交流会
すでに現地へ活動した学生と、現地の様子や持ち物などを交流した。

若葉市の中学校にて講演会
震災後どのような活動を行ってきたか、現地の様子など、ボランティアを通して感じたことを講演した。

2011.3～現在

活動資料

第1回ボランティア・ツアー（気仙沼市 8月）



第2回ボランティア・ツアー（南三陸町 9月）



被災地の状況

宮城県南気仙沼 8月



宮城県南三陸町 9月



○ 復興支援シンポジウム 報告用スライド

震災復興支援シンポジウム
～学生ボランティアの取り組みについて～

1

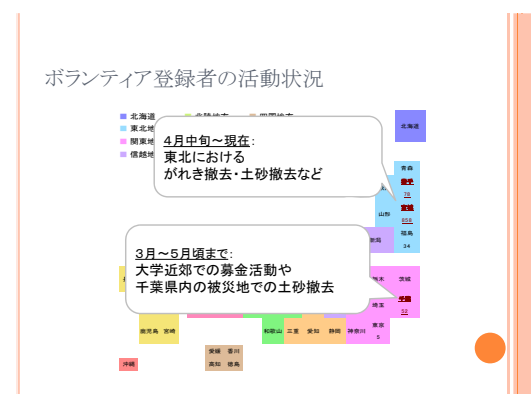
千葉大学ボランティア活動支援センター
<http://gakuseiengp.chiba-u.jp/volunteer-center/index.html>

活動支援センターに寄せられた
ボランティア活動 報告

2

ボランティア登録者の活動状況 2011年10月17日現在
千葉大学ボランティア活動支援センターより

地域	人数	活動内容
岩手県	78	炊き出し、瓦礫の除去、泥かき
宮城県	858	●泥かき、電線の清掃、片付け、瓦礫の除去、支援物資の仕分け、 情報、学習支援、学校支援、思い出探し ●避難所支援 （炊き出し、食事準備、掃除、子供の遊び相手） ●ボランティアの遠方支援、動物介護センター支援（犬の世話） 学校心理士支援
福島県	34	●屋内外の片付け、泥かき、安否確認支援、支援物資の仕分け、 ●避難所支援 （炊き出しの献金提供、被災者のエモーショナルケア） ●子供リフレッシュキャンプ
旭市	7	泥かき、炊き出し、支援物資配達
滝安市	8	泥かき、簡易トイレ配達、建物被災度調査（市役所職員の補助）
船橋市	10	避難所支援、募金活動
習志野市	1	募金活動
千葉市	8	支援物資の仕分け・積み込み、泥かき、募金活動
佐倉市	16	歴史的資料の搬出・整理
小計	52	
その他	9	募金活動、支援物資の積み込み
合計	1031	



ボランティア登録者の活動例 紹介

5

ボランティア活動例 ～個人の活動～

- 名前: 勝美 直光さん
(千葉大学 校戸・柏の葉地区 環境ISO学生委員会所属)
- 場所: 石巻市の雄勝町の仮設住宅
雄勝町の入口
- 期間: 2011年7月から年間。毎月一回は現場に行っている。
- 活動内容: “コミュニティガーデン”
 - コミュニティガーデンとは、花と花壇を媒介にして、地域住民（被災者）が交流することを目的とした地域住民の自主活動。
 - 寄付された花や企業から提供された苗、種を使っている。
 - 寄付された花は鉢に入っている。鉢に入っている花はすぐに弱ってしまうので、花壇に移すことで長く花を楽しむことができる。

ボランティア活動例 ～授業での活動

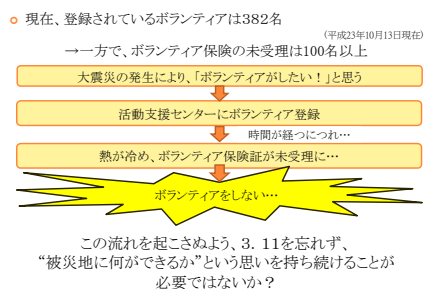
- 代表者: 倉坂教授 (千葉大学 法経学部 総合政策学科)
- 参加人数: 32名
- 活動時期・活動内容:
 - 7月25日 西千葉出発
 - 26日～31日 陸前高田ボランティアセンターからの紹介で、
畑のがれき撤去・再生、田んぼのがれき撤去の作業
 - 8月1日～3日
陸前高田第一中学で中学3年生の学習支援を実施。
夜間は、7月28日から6日間、19:00～21:00に高田一中のPTA集会所を借りて、中学生への学習支援活動「寺子屋千葉大」を実施。市内の4中学から20名の受講があり、マンツーマン指導を行った。

活動の様子は、共同通信、岩手日報、河北新報、8月3日読売新聞全国版で報道。
また、テレビ岩手(日テレ系)、名古屋テレビ(テレ朝系)、TBS、NHKからも取材を受け、テレビ岩手(8月2日夜)、岩手朝日(8月3日夜)の報道番組でも報道された。

ボランティア活動で発生している
問題点

8

今後のボランティア活動における問題点



支援センター主催 ボランティアツアーについて

10

ボランティアツアーの目的

- いろんな学生がいる。
- 中には、ボランティアしてみたいけど・・・
どうしたら良いかわからない、お金もない、時間もない
 何を準備したら良いかわからない

⇒ 大学主催にすることで
 まず、一歩踏み出すきっかけを!!

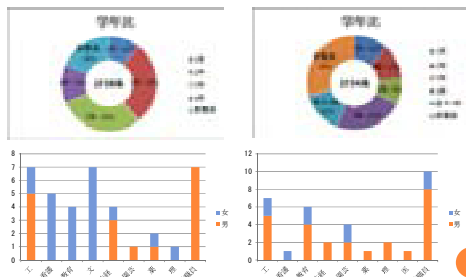
- 学生支援課という大きな存在

ボランティアツアー概要

- 第1回ボランティアツアー(2011.08.04~07)**
活動内容:宮城県気仙沼市(気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター)
 活動内容:がれきの撤去(1日目)・絡まった漁網の整理(2日目)
 交通手段: バス借り上げ+1BOX車(後方支援用)
- 第2回ボランティアツアー(2011.08.22~25)**
活動内容:宮城県南三陸町(南三陸町災害ボランティアセンター)
 活動内容:がれきの撤去
 交通手段: バス借り上げ+1BOX車(後方支援用)

12

参加者内訳



ツアー日程

- 1泊4日の弾丸ツアー
- 1日目 22:00 大学出発 ⇒ 車中泊
- 2日目 現地着 ⇒ ボランティア活動 ⇒ ホテル泊
- 3日目 ボランティア活動 ⇒ 入浴・夕食 ⇒ 現地発
⇒ 車中泊
- 4日目 6:00 大学着 ⇒ 解散





ツアーで得たもの

- 実際に現場を見た経験
- 達成感、満足感
- 人手で行うボランティアの意義の再認識
- 他学部、他団体の人との交流
- 学生と教職員の交流

21

これからの課題

- ツアー2回だけで終わってしまっていない。
⇒ 継続的な支援を！！
- では、どうしたらいいか？
⇒ 交流会で大学内部に発信
⇒ 講演会やシンポジウムにて外部に発信
⇒ 学生と教職員の間で意見をまとめ大学へ

22



24.2.1 朝日新聞 (千葉版) ②

千葉大、福島に植物工場



福島の復興支援の一環として、千葉大が福島県に植物工場を建設中。

【東京24日共同】千葉大が福島県に植物工場を建設中。福島県は震災後、食料自給率の向上を図るため、植物工場を積極的に推進している。千葉大は、福島県に植物工場を建設し、復興支援の一環として、福島県に植物工場を建設中。

OBの縁 避難した富岡町の学校に贈る

【東京24日共同】千葉大が福島県に植物工場を建設中。福島県は震災後、食料自給率の向上を図るため、植物工場を積極的に推進している。千葉大は、福島県に植物工場を建設し、復興支援の一環として、福島県に植物工場を建設中。

「教育ほど遠い現状」富岡第一小・八島成校舎

【東京24日共同】千葉大が福島県に植物工場を建設中。福島県は震災後、食料自給率の向上を図るため、植物工場を積極的に推進している。千葉大は、福島県に植物工場を建設し、復興支援の一環として、福島県に植物工場を建設中。

福島民友

2月4日 土曜日

交流広げ 福は内

三春の富岡小中学校で豆まき 千葉大生や留学生参加



三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

福島民報

2月5日 日曜日

鬼やっつけろ！ 三春に仮校舎



三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

福島の小学校 千葉大が支援

校長2人が卒業生縁で



三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

三春町の富岡小中学校で、三春町の児童と一緒に豆まきをする。左から富岡小中学校の児童、三春町の児童、千葉大生、留学生。

活動資料

あとがき

ボランティア活動2011を振り返る

学生総合支援企画室長

宮野

モモ子

学生支援GP業務を終え学生の活動の今後について考えていた矢先に大災害は起こった。構内にたたずんだ私の足裏で地面の盛り上がり波打つのが感じた。大変なことになった。詳細な情報が入り被害状況は広がる一方であった。学生たちの無事の確認、災害支援策が急ピッチで具体化され同時にボランティア活動支援センターが立ち上げられた。学生支援GPで育んだボランティアコーディネーターの学生と一体となって千葉大学のボランティア活動が迅速に滑り出した。私は2回目の南三陸町近隣のがれき処理に加わった。そこで私自身が強く実感した事柄を2つ振り返っておきたいと思います。一つはボランティア学生支援団体の学生の成長ぶりです。支援課職員のリードのもと、明確な目的による具体的な行動計画の立案によって、現地に赴き実際に場を踏むことで、学生たちは日増しに頼もしくなった。言動、表情は自信に満ち輝きが備わってきました。経験によって大学生を成長へと導けることは明白でした。その過程には支援する側と支援される側のかかわり、また学内における学長をはじめ学内教職員や学生たちが双方向にかかわりを持ち一体感が醸成されていったからこそと言えます。こうした環境の中で他の存在を慈しむ心が自然に定着するものではないかと思いました。二つめは私が得られたことです。私はがれき処理をしながらそぎ落とされた町並みの土の怒りと悲しみを指先に感じていました。ガレキと言ってもまだ生活のぬくもりを感じる品々、それらを掘り起こすことが復興に繋がるとするには遠い気持ちで作業していました。災害ではあるが海がもたらした自然の営み、この現状をまた人間が勝手気ままに作ろうとするのが復興なのか?悶々とやるせない気持ちで作業をしていました。しかし、極日常の事です。私のその気持ちを温め受け容れてくれたことと出会いました。車道を横切ろうとしていた私たちに、一台の車の運転席から深々と会釈をして通りすぎる女性との出会いです。あっという間に過ぎていくその会釈によって私は救われたように心が軽くなりました。何も無い荒れ果てたこの場所での作業を温かく受け入れてもらった安堵感を得たのです。この光景を今も思い出します。こうした事は私にとって「学生支援」の意味を再確認することに繋がりました。「学生支援」は自主的に行動し、かかわる者全ての間で双方向の対話を生み出し、その繰り返しのよって更により高い営みにしたいと思えた時、意味ある支援といえるのではないだろうか。2011年度は私にとってたった一度の被災地ボランティア支援ではありましたが、これまで継続してきた学生支援GPプログラムとその場で育まれてきた学生たちの力が発揮されたことへの喜びがありました。また今後更に両センターからの学生の発信力が高まり学生たちの憧れのリーダーとして育ててほしいと思います。また、この被災地ボランティアではそうしたリーダーたちのもと、反省会が開かれました。そこでは自ら志願した学生たちは心で感じ考えたことを自分の言葉で伝えようとしていました。強く明るく困難を切り拓く人間に成長できたボランティア活動でした。協働の素晴らしさを与えてくれました。この一冊の冊子からますます磨かれたボランティア活動が展開されることを祈念します。

この冊子には、東日本大震災後の 1 年間のボランティア活動を通じた学生たちの被災地への想い、被災された方々へのさまざまな想いがこめられています。多くの学生たちが人としての責任を自覚し、被災地支援に参画しました。その活動は何にもかえがたい学びとなり、学生たちが大きく成長していることに感動を覚えます。

震災直後にボランティア活動支援センターが立ち上がったものの信頼できる情報がなかなか得られず、一刻も早く支援活動を始めたいという学生たちの熱い思いに応えることができませんでした。ボランティア活動支援センターが本格的に動き始めたのは、4 月に入り、新学期になって学生たちが大学に戻ってからでした。学生支援課職員の協力を得ながら学生たち自身が学生間のネットワークを活用して情報収集、情報発信に努め、同時に被災地での活動を始めました。

ボランティア活動支援センターとしては、8 月と 9 月に短期間のボランティア・ツアーを実施しました。活動したいと思うけれども、一歩踏み出せずにいる学生たちに大学として手を差し伸べる程度ではありましたが、参加した学生たちの複雑な思いを知ることになりました。気仙沼では海水につかった田んぼの泥かき。南三陸では手作業での瓦礫の除去。田んぼとして再生するのかわからぬ中での泥まみれの作業。一つ一つの手作業の意味を問いながらの自省。活動に参加できたことの達成感、ほとんど何もできなかったことへのいらだち、ツアー後の振り返りでは、学生たちが率直な思いを口にしてくれました。

10 月になって福島県富岡町の富岡第一小学校の八島校長が仮校舎運動場の大型遊具設置について千葉大学同窓会に協力を呼びかけておられることを知りました。ボランティア活動支援センターとしても被災地支援の新しいフェーズを模索しているところでしたので、何かお手伝いできることはないかと三春町に開設された富岡小中学校に連絡をしたところ、卒業生でもある片岡教育学部教授のお口添えもあり、快く受け入れてくださいました。福島県ご出身の齋藤学長も即座に賛同してくださり、全学の資源を活用した富岡小中学校支援を今後の活動の柱とすることになりました。

すでに柏の葉の環境健康フィールド科学センターが小型の植物工場を富岡小中学校にプレゼントし、交流が始まっています。医学部の子どもたちの発達研究センターからも協力を申し出てくださいました。2 月 3 日は千葉大学から齋藤学長以下 20 名を超す学生教職員が富岡第一小学校・第二小学校の豆まき行事に参加しました。3 月 7 日には、富岡小中学校から 4 年生と 5 年生の児童が柏の葉の植物工場を見学し、楽しいひとときを過ごしています。新学期になると運動会があり、また授業では放射能についての学習という重い課題もあります。中学生への支援としては夏休みを利用しての合宿学習支援も考えています。千葉大学として継続的な活動を実現するためにも、ボランティア活動支援センターに温かいご支援をお願いいたします。

あとがき

ボランティア活動支援センター長

山内 正平

寄稿者一覧

—ご挨拶—

- ・千葉大学 学長 齋藤康
- ・千葉大学 理事（教育担当） 長澤成次

—被災学生の想い—

- ・教育学部 宮城県出身 匿名
- ・理学部 福島県浪江町出身 匿名
- ・文学部 岩手県陸前高田市出身 匿名
- ・工学研究科 宮城県石巻市出身 匿名
- ・工学部 岩手県大船渡市出身 匿名
- ・法経学部 福島県出身 鈴木信吾
- ・工学研究科 福島県富岡町出身 小暮健人
- ・理学部 福島県出身 佐久間光貴
- ・園芸学部 福島県出身 匿名
- ・教育学部 宮城県石巻市出身 横江和樹
- ・文学部 福島県出身 匿名
- ・工学部 岩手県出身 匿名
- ・教育学研究科 福島県出身 橋本綾香
- ・ 岩手県出身 匿名
- ・理学研究科 福島県浪江町出身 匿名
- ・理学部 宮城県気仙沼市出身 匿名
- ・文学部 宮城県出身 匿名

—ボランティア活動を通じて—

- ・普遍教育センター 白川優治
- ・ 匿名
- ・文学部国際言語文化学科 大関麻里
- ・工学研究科共生応用化学専攻 匿名
- ・人文社会科学研究科博士課程 鈴木慎也
- ・工学部都市環境システム学科 荻野高弘
- ・理学研究科地球生命圏科学専攻
生物学コース博士前期課程2年 佐々野耕平
- ・文学部行動科学科社会学専攻4年 浪川千晴
- ・医学薬学府修士課程総合薬品科学専攻
榎原美佳

- ・法経学部法学科 加藤愛菜
 - ・園芸学部緑地環境学科3年 勝美直光
 - ・教育学部小学校教員養成課程体育科選修
山野良介
 - ・ 匿名
 - ・工学部情報画像学科 古谷佳大
 - ・法経学部総合政策学科3年 市川祐人
 - ・教育学部小学校教員養成課程 匿名
 - ・看護学部看護学科2年 塚田祐子
 - ・法経学部 子安奈穂
 - ・教育学部2年 米山聡美
 - ・教育学部 遠藤加奈
 - ・看護学部看護学科2年 藤原香奈絵
 - ・教育学研究科1年 益田亜矢子
 - ・教育学部生涯教育課程1年 塚田萌
 - ・園芸学部2年 匿名
 - ・園芸学部緑地環境学科2年 小針香澄
 - ・法経学部総合政策学科 石澤裕
 - ・文学部 匿名
 - ・教育学研究科修士1年 相良好美
 - ・短期留学生（トルコ） メリヒ・ユルマズ
 - ・短期留学生（ミャンマー） モ トウエ ニイ
 - ・短期留学生（インド） アフリン ムジャワル
 - ・園芸学部緑地環境学科 阿部真梨
 - ・工学研究科 松崎志津子
 - ・教育学部教授 片岡洋子
 - ・法経学部教授 倉阪秀史
 - ・教育学部准教授 下永田修二
 - ・学生部学生支援課長 菅野仁
 - ・学生部留学生課留学生支援係長 立石公史
- ### —あとがき—
- ・学生総合支援企画室長 宮野モモ子
 - ・ボランティア活動支援センター長 山内正平

編集スタッフ

ボランティア活動支援センター長 山内正平

学生スタッフ

古谷佳大 大関麻里 遠藤加奈 安里加菜 米山聡美
富永育穂 子安奈穂 藤川聖久 鈴木紗樹

学生部学生支援課

発行日 平成24年3月

発行者 千葉大学学生部学生支援課・千葉大学ボランティア活動支援センター

〒 263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

043-251-1111 (代)

